
魔法少女リリカルなのはStrikerS～聖王の騎士～

來人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはStrikeS（聖王の騎士）

【Nコード】

N4238I

【作者名】

來人

【あらすじ】

機動六課に配属される新たな部隊、そして…復活する最強の騎士。運命の物語の歯車が、今…回りだす

プロローグ（前書き）

はじめまして、來人^{らいと}といひます

最近になって、リリカルなのはにハマり、この小説を作りました

小説は初めてで、誤字脱字があったり、更新が遅れたりすると思いますが、応援よろしく願ひします

プロローグ

かつて、聖王に仕えていた最強の騎士がいた：名はオリフィエル

彼はファルシオンという聖剣を手にし、どんな強敵も倒し、主である聖王を守ってきた：

オリフィエルの騎士の魂は死して尚、聖剣ファルシオンに宿り、永き時間ときの眠りについた：

そして：彼の魂が目覚める時、物語の歯車が動き始める……

キャラクター紹介（前書き）

一話と二話は、誠に勝手ですが、書き直すことにいたしました

読者の皆様には、本当に申し訳ありません

先にキャラクターの紹介をさせていただきます

それでは

キャラクター紹介

名前／龍崎伊吹
りゅうさき いぶき

年齢／21歳

性別／男

出身地／第97管理外世界「地球」 日本 東京都出身

利き腕／両利き

所属／時空管理局本部特務部隊

役職・階級／特務部隊・部隊長／提督

魔法術式／近代ベルカ（一部のデバイス使用の魔法のみ、古代ベルカ式）

魔導士ランク／総合SSSランク

好きな事／料理（洋風・和風・デザート全て5つ星の味）

機械いじり兼改造（車に飛行機能を付けたり、バイクにホバースライダーになる機能を付ける等）

嫌いな事／上層部の連中 仲間を侮辱する奴

備考

5歳の頃、違法魔導士に捕まった時に、ある魔導士に助けもらった事が切っ掛けで、魔導士になった

そして、7歳で囑託魔導士、9歳で正式な管理局の魔導士になり、そこから異例の出世の速さで提督に上り積めた。

特務部隊を築く前は武装隊に入っていたので、なのは達とも面識がある

実家が有名レストランで、彼の作る料理は必ず行列が出来る程の美味さ

また、非公開だがなのは達と同じ年の許嫁がいる（これは後に本編で書くつもり）

デバイスを複数個持っており、専用デバイスだけで5個以上10個未満は持っている（ただし本人は大抵、神威しか使っていない）

管理局の魔導士達から「1000の異名を持つ魔導士」と謡われていて、伝説化されている

デバイス／神威^{かむい}

長刀型インテリジェントデバイス

待機状態／蒼色の宝石が埋め込まれた金のブレスレット

備考

伊吹が使うデバイスの一つ

性格は「某正義を貫く物語」の主人公のような奴で憎まれ口を言いながらも、戦闘になればテンションが上がる

伊吹を相棒と言うだけあって仲はいい

名前／ファラン・グラフィット

年齢／21歳

性別／男

出身地／ミッドチルダ首都

利き腕／右利き

所属／時空管理局本部得務部隊兼執務管

役職・階級／時空管理局本部得務部隊、副隊長／執務管

魔法術式／ミッド式

魔導士ランク／総合SS＋ランク

好きな事／読書 音楽鑑賞

嫌いな事／ホラー・ 絶叫系 後輩や先輩の侮辱 上層部の連中

備考

5歳の頃、ある事件のせいで両親を亡くし、伊吹の家に引き取られ

る

そして、伊吹と共に嘱託魔導士になり、10歳で首都航空隊、14歳の時に両親の仇を追う為に執務管になる

ただ、16歳の頃に、先輩であるティード・ランスターを守れなかった事を悔やみ続けて以来、自己犠牲心が強くなり、仲間を助ける為なら自身を投げ出す事をいとわない

ホラー系や絶叫系は最早トラウマレベルで一目散に逃げる程

伊吹とは信頼できる友人関係で、多少彼のトラブルに巻き込まれたり、衝突することもあるが、それ以上に二人の絆は深い

フェイトから見てファランは憧れる先輩で、それ以上に彼に好意を寄せているが、鈍感なのかファランは気付かないでいる

愛機のデバイスであるデスペラードは、両親の数少ない形見の一つでもある

また、希少^{レア}機能持ちで、その能力は底知れ無いが使った所を見た人は伊吹以外おらず、二人も話すつもりはない

デバイス／デスペラード

両大鎌型インテリジェントデバイス

待機状態／鎖に巻かれた紅色のペンダント

備考

性格は忠誠心が強く、広範囲の魔力探知が可能
ファランのこと
はマスターと呼ぶ

扱いこそ難しい武器だが、ファランはこれを簡単に扱う

名前／ジン・クロツグ

性別／男

年齢／16歳

出身地／不明（おそらくミッドチルダだろうが本人は黙してかたらず）

利き腕／右利き

所属／時空管理局本部得務部隊

役職・階級／時空管理局本部得務部隊 部隊員／一等陸士

魔法術式／ミッド式

魔導士ランク／陸戦AAA+ランク

好きな事／静かな場所で一人でいること 星を眺めること オカリ
ナを吹く 甘い物全般

嫌いな事／煩い奴 騒がしい場所 仕事以外の面倒事

備考

基本的に、無口 無表情 無関心の性格の少年

人付き合いが苦手で他人に興味がなく、必要以上に話しかけたりし

ない

過去の経歴は一切語ろうとせず、伊吹達も彼の経歴については何も知らない

ただ知っているのは、驚異的な戦闘経験と射撃の腕で、中でもスナイパーライフルを好んでおり、彼のデバイスであるカタストロフも、基本形状はスナイパーライフルである

きつい物言いと相手に反感を交う事が度々あり、本部の方でも、ジンの評判はかなり悪い（そのせいで六課の評判も最初は悪い印象が強かった）

そんな性格に反して実は大の隠れ甘党で、休暇の日はデザート店に行ってはこっそり食べている。

ただし本人はこの事は他の連中（特に六課の人達）にはバレたくないの、甘い物は苦手といっている

彼も希少^{レアスキル}機能持ちで、能力は某金色の魔物のパートナーと同じ「^{アンサー・トーカー}答えを見出す者」である（ただし、使う魔力が半端ないので、余り乱発はしない）

デバイス／カタストロフ

スナイパーライフル型アームドデバイス

待機状態／紫の宝石を付けたシルバリング

備考

性格はジンに似て余り喋らない

銃口が三つあり、これにより一回の射撃に三発同時に発射することも可能

ジンのことは主と呼び、忠実に従う（だが、己がただの武器という意識が強いため、悪く言えばほとんど反発しない）

名前／リフィア・フローゼル

年齢／18歳

性別／女

出身地／ミッドチルダ首都養護施設

利き腕／右利き

所属／時空管理局本部得務部隊

役職・階級／時空管理局本部得務部隊 部隊員／一等陸士

魔法術式／近代ベルカ式

魔導士ランク／陸戦A+

好きな事／強い奴と戦う（模擬戦）楽しい事（例として祭りやパーティー等）身体を動かす運動

嫌いな事／卑怯な手を使う奴 教会の信教集団（本人の出生の関係上）

備考

良く言えば面倒見のいい姉御肌、悪く言えばガサツで喧嘩っばい性格の少女

常に強い奴と戦う事を夢見る戦闘狂で、六課に来た時にいきなりシグナムに決闘を吹っ掛けるほど（ただ、別に勝敗に関係ない）

エリオと同じ養護施設に育ち、彼から姉さんと呼ばれている

人間離れした怪力の持ち主で、ガジェットの？型なら片手一発で粉砕できる

教会を嫌う理由は、彼女の出生に関わり、深くは言わない

デバイス／グリーヴァ

両手斧型アームドデバイス

待機状態／獣の牙の形をした緑のイヤリング

備考

優しい母親のような性格で、リフィアとはマスターとかではなく、親子のような関係

両手斧のため、かなりの重量級だが、リフィアは片手で軽々と振り回す

常にリフィアのストッパー役でもあり、リフィアもグリーヴァには頭が上がらない

第一話：始まり（前書き）

前に書いた物とは違うものですが、楽しんで頂ければ光栄です！

あと、後書きの方も書いてありますので、よかったら見てください

それでは第一話、始まります

第一話：始まり

俺は、龍崎伊吹

今、俺は愛車『ペカシス』で、異動先の機動六課って所に向かって
いる

どうしてそうなったかって言うと1週間位前に遡る……

………1週間前

伊吹「はい！今なんていったクロノ？」

クロノ「だから、君たち四人には機動六課に異動してもらう
これはもう決定事項だ」

伊吹「ふざけんなテメェ！人の了承無しで勝手に決めるな！！」

この日俺はこの男―クロノ・ハラオウンに呼ばれ、今コイツの仕事部屋にいる

そこで言われたのは機動六課という最近に設立された部隊に異動しろとのこと

しかも、俺の了承無しで勝手に決められたときた

クロノ「確かに、勝手に決めた事はすまないと思ってる。だが、これには理由がある」

伊吹「理由も何も、メンバー表見た限り俺ら特務部隊が行く必要ねえだろうが！」

さっき見たメンバー表によれば、武装隊にいた頃に見覚えがある後輩の顔ある

新人の奴等は知らないが、見た限り将来性のある奴ばかりで、どう考えても俺らが異動す意味が無いように思える

クロノ「ああ、確かにそうだ。だからこれから話す事は機密事項だ。これを聞いて納得してほしい」

伊吹「訳あり…か。

わかった、話をきこう」

そして、俺はクロノに『ある話』を聞いた

……………

クロノ「…以上が君たち四人を異動させる理由だ」

伊吹「なるほど…わかった、あいつらに話しておこう…だが、他の部下の面倒は…」

クロノ「それは僕がみよう

知らない奴に任せるよりましだろ？」

伊吹「そうだな…頼めるか？」

クロノ「ああ、安心しろ。

君の大事な部下は誰一人死なせはしない」

伊吹「当たり前だ！もし誰か一人でも死なせたらテメエをぶった切るからな！」

クロノ「ああ…わかった」

……………

こうして、俺達は機動六課隊舎に向かっている訳だが…

伊吹「…進まなねえ…」

そう…進まないのだ

エンストとかそんなんじゃない

渋滞して動かないんだ！

まったく誰だよこんな時に事故った馬鹿野郎はよく

？「伊吹、原因がわかったぞ」

伊吹「ファランか…大体予想がつくが何だ？」

俺の友人ーファラン・グラフィットが原因を調べてくれたようだ

まあ、執務管の肩書きを持っているから何かあったと思って動いたんだろう

ファラン「この先に衝突事故が発生したらしい
しかもかなり酷い」

伊吹「どれくらい時間がかかる？」

ファラン「あと、二時間はかかるそうだ」

？「二時間！！まだそんなにかかるの！！」

後ろの席に座っている女ーリフィア・フローゼルが俺の代わりに答えた

手には携帯ゲーム機を持って暇を潰していたようだ

リファイア「二時間もこんな所にいられるかー！

こうなったら目の前の車を全部ぶっ飛ばして…」

《やめなさい、リファイア

そんな事したら、事態が更に酷くなるわよ》

リファイア「けどグリーヴァ！」

《諦めなさい。

武力で解決しようとしたって何にもならないでしょう？》

リファイア「うゝゝ」

アイツのデバイス『グリーヴァ』がリファイアの暴走を止めた

あれはもう『相棒』というより『親子』のような関係だからな。
グリーヴァもマスターとか主とは言わず呼び捨てで呼んでいる

まあ、アイツはそういうの嫌いだからなゝ

呼び捨てで呼べっていったのはおそらくアイツだろう

伊吹「そーいや、今何時だファラン？」

？「十時半です。隊長」

伊吹「ん？ああ、ジン起きたのか？」

ファランにいった質問をジン・クロツグがいった

さっきまで寝ていたんだろうか、欠伸している…ん？

伊吹「ちよつとまで？確か予定の到着時間は？」

《十一時だぜ、相棒》

俺の相棒の一つの『神威』（かむい）が教えてくれた

伊吹「ってどう考えても間に合わないじゃねえか！」

《しかたありません伊吹殿、ここは遅れることを連絡したほうが得策かと…》

ファラン「デスペラードのいう通りだ。

伊吹、ここは連絡した方が…」

ファランのデバイス『デスペラード』の案にファランが賛成する

…が

伊吹「悪いがそんなに待たせてやれないな。

ファラン、乗れ！」

ファランにせがませて車に乗せる

ファラン「乗れといったら乗ったが…一体どうする気だ？」
伊吹「なぐに、こんな事もあるうかと、取って置きの機能を付けた
んだよな〜」

（（まさか…！））

俺を除く三人は冷や汗をかいた

ん？どうしたおまえら？

ファラン「お前…まさかこの車に変な機能を付けた訳じゃ…」

伊吹「変とは何だ変とは！
少し近未来の機能を付けたただけだ！」

そういったらフアランとリファイアがそろって降りようとしたので、
バインドで縛っておいた

フアラン「はっ離せ伊吹！
俺はまだ死にたくない！！」

リファイア「タイショ、おろろし〜て〜」

《…諦めろ、二人共》

ジン「そうだな…」

ジンのデバイス『カタストロフ』が二人にそう言うと、ジンもそれに同意した。

伊吹「ようし、システム絶好調、いっくぜ」

フアラン「まっ、待て伊吹！
考え直さ「ペカシス！チェンジ、スカイモード！」オイ！！」

さ〜て、少し説明しようか

俺の車ペカシスは、このように空を飛ぶ機能を付けた
現代社会が夢見る『空飛ぶ車』である

いやぁミッドチルダの魔法技術、最高！

フアラン「お前は、またこんな機能を！！」

伊吹「良いじゃねえか！
これくらいまだ序ノ口だぜ？」

フアラン「まだ何か考えているのか！？」

伊吹「まあな！んじゃ、飛ばして行くぜ！」
こうして、俺達は機動六課の隊舎に向かって飛んで行った

——機動六課side

？「ねえ、はやてちゃん？」

はやて「なんや、なのはちゃん？」

なのは「確か、今日だったよね、新しい部隊員が配属されるって？」

はやて「うん、そうやで」

私、高町なのはと、友達であり機動六課の部隊長でもある八神はやてちゃんと一緒に隊長室でお茶を飲みながら談話しています

…先に釘を刺して言うけどサボりじゃないよ！

そんな事考えていた人にはバインドで縛ってスターライトブレイカーの刑だからね！

（だから、悪魔やら魔王とか言われるじゃん）↑b y作者

はやて「なっ！なのはちゃん何怖い笑みでデバイス発動してんねん！」

なのは「…なんかさっき不快な事言われた気がするんだけど…気の

せい？」

はやて「きつ…気のせい気のせい！（作者の馬鹿く何末恐ろしいこと
と言ってんねん）」

なのは「…そう」

そう言ってなのはちゃんは、デバイスを解除した…あゝ怖かったく
はやて「そつ…それよりなのはちゃん、そろそろ来る頃やと思うか
ら…」

なのは「そうだね、フォワードの皆も呼んでサニールームで待たせて
おくよ。」

はやて「うん、お願いするよ、なのはちゃん。」
なのはちゃんにそうお願いして隊長室を出ていった

side out

伊吹「よーし着いたぞく
皆降りろ」

俺達は、予定の時間より少し早く隊舎に着いた

ファラン「やっと着いたか…デかいな…」

リファイア「なあ、此処って結構強い奴等が集まってるんだろ？

早く戦いてーな♪」

《また、あなたはそんな事…》

リファイア「いーじゃん別に！

アタシは強い奴と戦って自分を高めたいんだ！」

ジン「…戦闘狂め」

リファイア「なんか言ったかジン？」

ジン「…別に」

伊吹「ほら、つたつたってないで部隊長に挨拶しにいくぞ」
こうして、俺達は機動六課隊舎に足を踏み入れた。

そう遠くない未来におこる壮大な戦いに備えて…

第一話：始まり（後書き）

舞台裏コーナー

伊吹「さあ始まりました、このコーナー！

司会は俺、龍崎伊吹と、相方のファラン・グラフアイトです」

ファラン「…何だ？このコーナーは…」

伊吹「ん？単なる暇つぶし？」

ファラン「そのために呼んだのか！

あと、何故疑問系何だ！」

伊吹「良いだろ別に

さて、今日はこのコーナーの説明をしておこうと思います」

ファラン「このコーナーは、なのは達を始め、他の小説のキャラクターを招き入れて談話するコーナーだ」

伊吹「談話に参加したいキャラクターは、感想文に書いてくれ。

その時は、俺の手料理をご馳走してやる」

ファラン「こいつの手料理のウマさは俺が保証する

楽しみにしてくれ」

伊吹「それじゃあ、一通り説明したし、次回予告してとっとと閉めますか」

次回予告

伊吹「機動六課の皆に挨拶を済ます俺達」

ファラン「そして、フォワード達の前で俺達の力を見せつける」

伊吹「次回、魔法少女リリカルなのはStrikeS（聖王の騎士）第二話…実力、特務部隊に」

伊・ファ「スタンバイ・レディ！」

第二話：実力、特務部隊（前書き）

やっと二話目：初めての戦闘シーンは、凄く疲れた：

舞台裏コーナーはページ数の都合上、本文に書かせて頂きました。

それでは第二話、始まります

第二話：実力、特務部隊

はやて「ようこそ、機動六課へ
私が機動六課部隊長の八神はやてです
よろしく願います」

伊吹「知らない仲じゃないんだし、んな畏まらなくても良いだろ？
まあいいや、んじゃ改めて…」

俺達は、制服を正した後、目の前にいる部隊長の八神はやてに敬礼
しながら挨拶する

余談だが、俺達が着用している制服は、FF?のS〇〇D服を模し
ている

伊吹「時空管理局特務部隊・隊長、龍崎伊吹提督」

ファラン「同じく副隊長、ファラン・グラフィット執務管」

リフィア「時空管理局特務部隊・部隊員、リフィア・フローゼル一
等陸士」

ジン「同じく、ジン・クロツグ一等陸士」

伊吹「以上四名、本日漬けで、ここ機動六課の特務部隊として就任いたします」

はやて「はい、よろしくお願いします…と堅苦しい挨拶はもういいとして、お久しぶりです、伊吹提督」

伊吹「提督はやめろはやてくせめてへさんく付けにしてくれ」

ファラン「俺は呼びやすい方で構わないぞ、はやて」

リフィア「アタシも呼び捨てで構わないよ、はやて」

ジン「……アンタの呼びやすい方でいってくれ」

伊吹「リフィア、ジン、お前ら、仮にも部隊長相手に失礼だろく」

はやて「別に、かまへんよ伊吹さん、ファランさんもお久しぶりで
す

後の二人は、初めてやけど、以後よろしくな」

ジン「…ああ」

リファイア「おうよ、大船に乗ったつもりで任せてくれよ！」

ジン「（…調子のいい奴）」

そんな会話をしていると後ろからノックの音が聞こえ、はやてが「どうぞ」というと、サイドポニーの女性と金髪の女性の二人が入ってきた

フェイトside

フェイト「ねえ、なのは？」

なのは「何、フェイトちゃん？」

フェイト「新しく入ってくる人達ってどんな人なの？」

私は、なのはに新しい部隊の人達がどんなのか聞いた

なのは「私も良く聞かされてないな」

ただ、はやてちゃんが「とっても頼りになる強い大先輩が来る」っていつてたけど…」

そんな会話をしている間に部隊長の部屋に着いた

私がノックをすると、はやての声が聞こえ、ドアを開ける

なの・フェ「失礼します」

ドアが開くと、はやての他に四人の男女…性格には、男性が三人、女性一人がそこにいた

side out

伊吹「よう、お二人さん。

元気そうだな」

ファラン「フェイト、なのは、久しぶりだな」

なの・フェ「えっ?…ええええええええ!!!!」

：お前ら、本当に予想通りのリアクションしてくれるよ

ていうか挨拶したんだからお前らもしろよな

なのは「なっ！ なななな何でいいいい伊吹提督が此処に…ふみゅ
！」

なのはが俺にそういった瞬間、俺はなのはの鼻にデコピンした

伊吹「たゝかゝまゝちゝあれほど『提督』言うなって、言っただろうが」

それとも何か？ あれだけ言い聞かせたのに言うのはこの口か

なのは「ひはひゝひはひへふゝひふひへうはい」

俺がなのはの頬を両手でつねると、その状態のままで言い直し、両手を離れた

なのは「ふえええんゝ酷いですよゝ伊吹先輩」

伊吹「やかましい！
だったら『提督』言うな！」

なのは「事実じゃないですか！

だったら何で『提督』の地位に就いたんです！」

伊吹「好きで『提督』になったんじゃないやい！

けどな…上の連中と三提督の爺さん婆さんに無理矢理、就がされたんだよおお！！！！」

そう…あの時、武装隊にいた頃の俺の地位は一等空佐だったが…上の連中に呼ばれたと思ったら、いきなり『提督』になれだって！

もちろん、俺は断った

けど、まさかの三提督の爺さん婆さんが乱入して、彼是と丸め込まれて、気がついたら『提督』なんて要らない地位がついたんだよ！

なのは「でも、それって名誉のあることなんじゃ…」

伊吹「何処が名誉だ！

あの後の仕事の量が半端なかったんだぞ！

何だよあの書類の山は！！

苛めか！苛めなのかこれは！！

あゝゝゝ思い出しただけで腹か立つ！

こうなったら、今すぐ上層部の所に殴り込みに…」

はやて「おっ落ち着いて下さい！伊吹提…じゃなかった伊吹さん」

伊吹「フハハハハは！お前らも牢人形にシテヤロウカ」

はやて「何故に閣下ネタ！！」

なのは「伊吹先輩…

少し、頭冷そうか…」

はやて「ちょっ！待ってなのはちゃん！

頼むから、ここでディバインバスターはやめ…」

この瞬間、俺達の意識は、真っ白になった

最後に覚えているのは、魔王が放つ桜色の砲撃と世にも恐ろしい笑みだけだった

余談だが、ファランとフェイトは俺が暴走したあと、すぐに部屋を出て、愛の逃避行（とフェイトは思っていたらしい）をしていたそうだ

更に余談だが、フアラン達が部屋を出た後ジンも部屋を出てリフィアは巻き込まれ、リインが入れ違いで隊長室に入った時には恐ろしい地獄絵図をみたと泣き喚いていたらしい

そして、あの後、はやてにこっぴどく怒られたのは言うまでもない……

んで、場所は変わってサンルーム

今俺達の目の前には、フォワード陣を始め、バックヤードの人達が並んでいる

俺は、顔には出していないが、身体がギシギシと痛いです ハイ

自業自得なのは分かっているが、後であの悪魔をシメテ殺るとしよう

はやて「それじゃあ、この機動六課に新しい仲間達を紹介したいと思います」

はやてがそう言うと、俺達は前にでて挨拶した

伊吹「時空管理局特務部隊・隊長 龍崎伊吹だ。よろしくな」

ファラン「同じく、副隊長のファラン・グラフィトだ」

リフィア「リフィア・フロゼルだ、この中で強い奴がいたら前に
でろー

そして戦えー！」

いきなり何言ってたコイツー

？「ほう…なかなかの自信家だな」

アイツの言葉に食い付いたのは、ピンク髪のパニーテールの女性で、
名前は確か…

リフィア「アンタ、名は」

シグナム「私は機動六課ライティング隊副隊長にしてヴォルゲン・
リッターの烈火の将シグナムだ」

リフィア「シグナムか…なるほどその気迫、なかなかの
実力者っ
てとこだね

シグナム、アタシと戦え！」

うわぁ…とんでもないこと言いやがったよアイツ…

シグナム「ふっ、良いだろう、その勝負、うけてたつ！」

オイオイオイ！あっちもマジかよ！

はやて「ちよいとまち二人共！
今は紹介が先や！

勝負の話は私が預かるから後にしいや！」

シグナム「主はやてがそう言うなら…」

リフィア「ちえー」

よし、よくやったはやて！

ジン「…もういいか？」

はやて「うん、かまへんよ」

ジン「…ジン・クロツグだ」

こうして、自己紹介は多少トラブルがあったものの、無事に事なきをえた

あの後、フォワード陣達からの質問攻めにあったり、リファイが久しぶりにあった弟分に抱き着いたりと大変だったがな

んでもって、場所は変わりトレーニングルーム

フォワード陣達の練習を見ていたんだが…

なのは「伊吹先輩、よろしければ、特務部隊の練習風景を見せてくれませんか？」

伊吹「はあ、何でまた？」

ファラン「大方、俺達の練習をフォワード陣達に見せたいんだな？」

なのは「にゃははゝ
わかります？」

ファラン「大体予想はついていた

で、どうする、伊吹？」

伊吹「まあ、それなら別に：けど、フォワード陣達には、俺達の練習だけはさせるなよ」

俺達、特務部隊の練習は、殆ど実戦をモチーフにした練習がそうだ
実戦経験の少ないあいつらは、まずついていけない

なのは「はい、分かっています」

伊吹「よし、じゃあ：いくとしますか」

俺達四人は、トレーニングルームの場所に足を踏み入れた

ティアナside

私達は、なのはさんに招集をうけ、今は、トレーニングルームの外側にいる

何でも、特務部隊の練習風景を見せてくれるそうよ

特務部隊は本部からの密命で各地を転々としている特殊部隊で、殆どのメンバーが凄腕のエリートだと聞いたことがある

中でも、伊吹提督（本人はこの呼び方はきらっているけど）と、フアラン執務管は別格で、なのはさんやフェイトさんが先輩と煽っている凄い人達だし…

実際、二人の名前を知らない魔導士は殆どいない

それに：フアラン執務管は、私の兄、ティーダ・ランスターの後輩だった人らしいから：

私の名前を知った後、フアラン執務管は酷く苦い顔をして、「すまなかった」って謝ったのは、凄く驚いたわ。

：話がそれたわね。

でも、特務部隊の練習風景が見れるのはラッキーね。

実戦経験の少ない私達には、これを期に良く憶えておいた方が後々楽に為るから

スバル「ねえティア、伊吹さん達の練習ってどんな感じ？」

ティアナ「特務部隊の練習は実戦をベースにしたのが多いって言うから…それなんじゃない？」

エリオ「それじゃあ、今回はリフィア姉さん達の練習を見て何か覚えろって事ですか？」

ティアナ「そうなるわね」

キャロ「なのはさん、今回の練習は…」

なのは「今回は、バトルロワイアル形式…つまり、まわりが全員敵って事になるね」

まわりが全員敵…か

流石は特務部隊…やる事が半端ないわね

s i d e
o u t

伊吹「んじゃ、今回はバトルロワイアル形式で練習を行う
制限時間は一時間、撃墜されるか時間切れで即座に終了。

いいな！」

フアラン「ああ…」

ジン「…構わない」

リファイア「さっさと始めようよータイシヨー」

伊吹「はいはい…それじゃあ、全員バリアジャケットを展開しろ！」

ファラン「デスペラード！」

リファイア「グリーヴァ！」

ジン「カタストロフ！」

伊吹「神威！」

「「「セット・アップ！」」「」」

俺達の身体が光りに包まれ、バリアジャケットを展開する

俺のジャケットの姿は、TOVのユ○リのような姿、ファランはCのジ○ネシスのような姿、リファイアはTOHのイ○スのような姿、ジンはFF7のヴ○ンセ○トのような姿に変わる

伊吹「それじゃあ全員配置につけ！」

散開！」

そうって、全員離れて配置についた…

さあ…楽しいバトルロワイアルの始まりだ!!

一方、なのは達はモニターで練習を見ていた

なのは「始まった…」

フェイト「なのは!」

シグナム「始まったのか?」

なのは「二人共、どうしたの?」

私は、フェイトちゃん達が来て少し驚いた

ティアナ達は二人が来たと知って敬礼する

シグナム「なに…フローゼルの实力を見ておこうと思ってな」

フェイト「私も…似たような事…かな」

そう言いながら顔を真っ赤にするフェイトちゃん…どうしたの？

シグナム「テストタロッサは、ただ単にグラフィットの戦いをだな…」

フェイト「わわ！シグナム、それ以上は…」

なのは「へえ…そう言えばフェイトちゃん、ファラン先輩のこと…」

フェイト「ちっ！違う！違うの！！違うんだもん！！！」

フェイトちゃん…それじゃあ子供見たいだよ…

エリオ「フェイトさん…顔が赤いけど、体調不良なのかな？」

キャラ「……エリオ君の鈍感！」

エリオ「ええ！きつ、キャロ！どうして怒ってるの！」

スバル「そうだね！

エリオが悪い！」

ティアナ「私もスバルとキャロに同感」

シグナム「女心がまるで分かってないな」

エリオ「シグナム副隊長まで！！」

なのは「にゃはは〜エリオは、そっちのお勉強も必要かな？」

エリオ「そっ…そんなぁ…」

エリオは精神的に9999のダメージを受けた

エリオは凹んだ

リフィア「オラオラオラオラーーーー」

突然、リファイアが大声で走り出し、私達はリファイアが映ってるモニターに目をやった：

リファイア side

アタシは今、目の前にいるガジェットの大群に斬りかかる

タイショー達にはまだ会っていないが、恐らく同じ状況なんだろうね

《リファイア、ガジェットが三体ほど逃げたわ》

リファイア「誰が逃がすかってんだ！」

アタシは横にあるデカイ岩を片手で持ち上げ、ガジェットに向かってぶん投げる

でも、あのガジェットがそう簡単にやられる訳がない

何だっけかなアンチマギングフィールド確かAMF…だっけ？何かそんな厄介なもんついてんだって

まっ、アタシの知った事じゃないね！

アタシはただ、目の前の敵を…

リファイア「倒すだけだあああ！」

ガジェットが投げた岩を破壊すると同時に近づいて、二体同時にグリーヴァで叩き斬る

最後の一体も、逃げようとした所を左手で捕まえ体重をかけて地面に叩きつけた

そしてそのまま…

リファイア「スネーク…バイト!!」

捕まえた左手でガジェットを押し潰し破壊した

リファイア「よし、次！」

アタシは次の敵を探しに走り出した…

s i d e o u t

その光景をモニターで見ていたなのは達は…

なのは「……嘘」

フェイト「……信じられない」

シグナム「ガジェットを……素手で破壊しただと」

酷く驚いていた。

フォワード陣達も目を疑った

まず、信じられない事が二つあった

エリオを除く六人は、これを聞いてびっくりした

片手だけで握力250…つまり、両手で500の握力を持った人間が普通いる筈がない

エリオ「…あの、それより気になったのですが…」

フェイト「?どういうしたのエリオ」

エリオ「いえ…ジンさんが、あの高いビルの上座ったまま動いていないんですが…」

フェイト「えっ?」

エリオがそう言うと、全員がモニターに目をやった

そこには、確かに開始からそのまま動いていないジンが、そこにいた

しかも、気付いていないのか後ろにはガジェットが今まさにジンに不意打ちを仕掛けようとしていた

スバル「あっ！危ない！」

そう言うと同時に、ガジェットは、ジンの頭部にめがけて撃った

…が、彼はソレを見ずに無駄の無い動作で避けた

ティアナ「えっ！」

ティアナはこれを見て驚いた
まるで攻撃がくるのを『知っていた』かのように見えたからだ

そのまま彼は…

ジン「お前…弱いな」

そう呟いた刹那、ガジェットは突然飛来した魔力スフィアによって貫かれ、爆散した

ジン「……話にならないな」

ジンがその場を離れようとした時、ガジェット？型が三体ほど現れる

ジン「…面倒だな」

《随分と余裕だな主》

ジン「…事実だからな
…いくぞ」

《…了解》

ジン「ケルベロス・ファイア…シュート」

《オーライ…ケルベロス・ファイア》

瞬間、カタストロフから魔力弾が三発同時に発射され、ガジェット？型はコレに撃ち抜かれ、爆発した

スバル「つ…強い」

エリオ「ええ…まるで、ガジェットなんて眼中にないって感じです」

スバルとエリオは、そんな感想をもらした

ティアナ「（リファイアといいジンといい…どんだけ強いんだよ!）」

ティアナは、自分の力と彼等の力が、いかに天地の差か思い知らされた

? 「キュクウ」

キャロ「どうしたの? フリード」

キャロの使役竜、フリード・リヒが、ジンの戦いを見て酷く怯えていた

キャロは、ここまで怯えているフリードは見たことなかった

伊吹「はあ ああ ああ」

フアラン「でいいいやああ」

エリオ「あっ！伊吹さんとファランさんが…」

モニターには、伊吹とファランがガジェットと戦いながら激闘している

なのは「凄い激闘だね」

フェイト「うん…二人共、気迫が違う」

シグナム「ああ…寧ろあの二人、まるでこの戦いを楽しんでいる」

ファランside

ファラン「全く、つくづく器用な奴だな！」

伊吹「そりゃ、お前もな！」

俺は、ガジェットと片手間で伊吹と戦っている

互いにぶつかる刃、隙なんて少しも見せられない

そして、互いの背中を合わせて話す

伊吹「なァーファラン？少し手を組まないか？」

ファラン「確かに…ガジェットどもには早々に退場してもらおうか」

伊吹「話が解る奴で助かるよ」

ファラン「何年お前の友人をやっていると誤ってるんだ？」

伊吹「はは…違いねえな…遅れるなよ！」

ファラン「ああ！お前もな！」

俺達はガジェットの大群に斬りかかった

《派手にかませよ、相棒！》

伊吹「おうよ！腹あくくれよ！天浪滅牙あ！」

伊吹は神威でガジェットを斬り倒す

ファラン「デスペラード！カートリッジロード！」

《load cartridge》

俺の立っている場所にミッド式の魔法陣が現れる

ファラン「ムーンライト・ソニック！」

《moonlight sonic》

デスペラードを二回振り下ろし、紅色の斬撃をガジェットに向けて飛ばし、一気に六体ほど斬り飛ばす

ファラン「まだまだ、デスペラード！」

《ダブルサイズ・フォーム》

両鎌が二つの鎌に別れる

ファラン「クレンセント・ウェーブ！」

《クレンセント・ウェーブ》

先ほどの倍以上はある紅色の斬撃をガジェットに向けて飛ばして、次々と倒していく

伊吹「叩き斬る、八刀一閃！！」

伊吹もまた、次々とガジェットを斬り倒していく

伊吹「ファラン！『アレ』をやるぜ！！」

ファラン「ああ！分かった！デスペラード！」

《了解、ソードフォーム》

そういうと、デスペラードは両刃の剣に変わり、二人でガジェットを囲むような位置に着き、自分達のデバイスを地面に突き立てる

伊・ファ「はあああああ！！！！」

すると、ミッド式ともベルカ式とも違う巨大な魔法陣が現れ、そこから出る光りがガジェットを包み、すれ違い様にガジェット達に一撃の入れる

伊・ファ「決める！！」

そして、ガジェットの斜め上に飛び、魔力を溜める

伊吹「見せてやろうぜ！！」

ファラン「喰らえ！！」

《load cartridge》

伊・ファ「武神！！双天破！！！！」

瞬間、二つの衝撃破が螺旋の孤を描くように放たれ、やがて一つの巨大な衝撃破になりガジェット達を襲った

ガジェット達はその巨大な衝撃破に貫かれ、次々と爆散していった

ファラン「我が信念燃え果てるまで!!」

伊吹「この正義、貫き通す!!」

s i d e o u t

なのはs i d e

スバル「か…カッコイイ!」

エリオ「はい!
とても凄かったです!」

スバルとエリオが、先輩達が放った技を見てそう言った

正直言って私も驚いた
特に、ミッド式ともベルカ式とも違う魔法陣が現れたことはびっくりしたよ

キャロとティアナも、先輩達の技を見てかなり驚いていた

フェイトちゃん達は…

フェイト「フアラン先輩…カッコイイです…」

シグナム「なかなかのキレのある合体技だな…手合わせ願いたいものだ…」

……こんな感じですよ

ていうかフェイトちゃん…キャラ変わり過ぎだよ（汗）

「恋をすると人が変わる」って言うけど…これは変わり過ぎだと思
うな…

私も恋をすれば、フェイトちゃんみたいに変われるかな？

でも…ああはなりたくないな…うん（汗）

それで、この後の事を説明すると、あの後リフィアとジンが先輩達と合流したんだけど…その後の戦闘が物凄くて、とても口だけじゃ説明出来なかった

ただ、先輩達も凄かったけど…リフィアとジンもタダ者じゃないと思ったの

魔力付加無しでガジェットを素手で破壊するリフィア

人並み外れた戦闘経験と何処か特別な力を感じさせるジン

この二人については、やっぱり本人達から直接説明してもらおうと思う

そして、練習終了後に先輩達四人を隊長室に来るように頼んだ



舞台裏コーナー

伊吹「さあー今日も始まった舞台裏コーナー！

司会は俺、龍崎伊吹と」

ファラン「ファラン・グラフィイトだ…伊吹？このコーナーは後書

きでやるんじゃない？」

伊吹「後書きだとページ数に問題があるからこっちでやるって」

ファラン「そうか：じゃあゲストを紹介するか

今回のゲストはおなじみのこの三人、高町なのはとフェイト・テスタロッサ・ハラオウン、そして八神はやての三人だ」

三人「こんにちわ」

伊吹「よく来たな、ほら、苺のショートケーキと紅茶だ」

なのは「わぁ〜美味しそう」

フェイト「本当にいいんですか？」

伊吹「ああ、構わないぜ」

はやて「ほな、さっそく、頂きまうす：ん！これは美味しい！！

なのは「本当に美味しいです！

これ、伊吹先輩が作ったんですか！」

伊吹「ああ、そうだぜ」

ファラン「こいつは料理全般に才能があるからな、何度も食べていると舌が贅沢になる」

フェイト「確かに…それにこの紅茶も美味しいですよ」

伊吹「ありがたいな、喜んでくれれば作った甲斐がある」

はやて「じゃあさっそく言いたいことあんねんけど…」

ファラン「何だ？はやて」

はやて「バリアジャケットの設定が適當すぎやないのか？」

伊吹「あゝその事か…正直言っとうちの作者は服の種類とか詳しくないし…はつきり言って面倒臭いからゲームキャラの服にしようってなったんだ」

フェイト「技の方もゲームの方なんですか？」

ファラン「ああ…殆どテイルズオブシリーズの技や呪文がそうだなあと、たまにFFの必殺技もあるな」

伊吹「今回の話は殆ど俺が使っていたが、ファラン達の技や呪文の方もそうだな」

なのは「へえ、そうなんですか」

伊吹「それと、さっき見たが、アクセス数が一万を越えていたぞ」

ファラン「しかも、もうすぐで二万になるかもしれない」

はやて「へえ、凄いやん」

フェイト「作者さんには頑張って貰わないとね」

伊吹「そうだな…さて、そろそろ次回予告して、次の仕込みをするか」

なのは「どういう事ですか？」

ファラン「実は、TODAさんの小説のおまけコーナーにお呼ばれされてな…その為のお礼の料理を作ってるをだ」

伊吹「まっそういう事だから手っ取り早く終わらせるぜ」

次回予告

伊吹「なのは達に呼ばれ、隊長室足を運ぶ俺達」

ファラン「リフィアとジンは、なのは達に質問を迫られる」

なのは「その後、特務部隊の歓迎会を開き、伊吹先輩は皆に手料理を作る」

フェイト「次回、魔法少女リリカルなのはStrikerS」聖王の騎士」

はやて「第三話..質問と歓迎会」

五人「スタンバイ・レディ!!!!」

第三話：質問と歓迎会（前書き）

やつと三話目：

待っていた人もそうでない人も見ていってけると嬉しいです

それでは第三話、始まります

第三話：質問と歓迎会

俺達は練習終了後になのはに呼ばれ、今隊長室の前にいる

伊吹「一体なんの用なんだろうな？」

ファラン「さあな…入るぞ！」

はやて「どうぞ」

ファランが扉を叩き、はやての声が聞こえたを確認した後、部屋に入る

そこで待っていたのはなのは、フェイト、はやての仲良し三人組とヴォルゲンリッターの騎士様方が勢ぞろいしていた

なお、少し空気化されているザフィーラ（狼姿）も一緒にいる

伊吹「それで、呼び出した理由は…」

はやて「それなんやけど、その前にリフィアとジンに話があるんや」

リファイア「アタシは構わないけど…」

ジン「……………」

はやてが二人に話を持ち掛けた

…まあ大体予想がつくけどな…

ジンの奴は無言だったが恐らくアイツなりの肯定だろう

はやて「まず、リファイア、練習風景をなのはちゃんから見せてもらったけど…あの怪力は一体なんや？」

フェイト「見たところ、魔法による肉体強化は使っていないし…」

リファイア「ああ…それ。

グリーンヴァ、説明お願い」

待機状態のグリーンヴァに説明を頼むリファイア

《ハア…貴女って本当に人に物を教える能力皆無ね》
ちから

リフィア「煩いねゝ良いじゃん別に」

《こんな戦闘バカの子に将来貰い手がいるのかしら?》

リフィア「なっ!何言ってんだいアンタは!?!大体、アタシは自分より強い男にしか興味が無いだけだよ!」

《歳上限定でね》

リフィア「喧しい!?!」

はやて「あのゝそろそろ説明してくれへんかなゝ」

はやての奴が呆れた顔をしてリフィア達に言う

なのは達も似たような顔をしていたが:

シグナム「確かに、フローゼルの言う通りだな
男はまず、腕っぷしが強くなくては:」

………なんかシグナムがとんでもない事を言っていたが、聞かなか
った事にしよう

グリーヴァ side

《フェイトさんの言う通り、この子の怪力は魔法による肉体強化はしていません》

私は、自分のマスターであるリフィアのバカ力について説明を始めた

…といっても別に全てを教える訳じゃないけど

ヴィータ「じゃあ、あの怪力は一体なんだよ」

《…この子の母、レミア・フローゼルの指導の基、血の滲むような特別な修行で三年かけて手に入れた力です》

はやて「レミア・フローゼル？誰やその人は？」

《知らないのも無理はありません

レミアは…私のかつてのマスターは、管理局に所属しないフリーの魔導士でしたから》

なのは「でした？…その人は、今何処に？」

《病ですでに…リフィアが八歳の時にです》

なのはさん達はそれを聞いた瞬間に顔をうつ向かせた

…まあ無理もありませんよね、今の発言でリフィアの心の傷がまた開いたかもしれないのだから…

けど…あの子なら…

リフィア「何辛気臭い顔してんだい皆！
アタシは全然気にしてないから」

フェイト「でも…私達は…」

リフィア「ストーップ！
それ以上言うと怒るよ！」

そう言うとなのはさん達は押し黙ってしまいました…全く、この子
ったら

リフィア「そりゃ、母さんが死んだのは哀しいけどさ…いつまでも

そうしてる訳じゃないじゃん
それにアタシは母さんに感謝してるんだ」

なのは「感謝？」

リフィア「そう、アタシを強く育ててくれたこと……そして、この
力で皆を守れることがアタシは嬉しいんだ」

はやて「そうなんか…」

リフィア「そういう事
んじゃ、この話は終わり」

はやて「何か納得いかない終わり方やけど…まあええわ、後でもう
一度聞けばええんやし」

リフィア「ええ！いいよ面倒臭い！？」

《実際説明するのは私何ですけど…》

リフィア「アンタも一々煩いね！
大体グリーヴァはいつも…」

《あら、何よ…》

この後、私とリフィアは親子喧嘩（の様なもの）を繰り広げたわ
…まあ私があの子に口で負ける気は更々ないけど…

ジ
ン
s
i
d
e

はあ…煩い連中だ…

今オレの目の前にはリフィアが愛機のグリーヴァと喧嘩している

大体予想は付く結果だがな

あのバーサーカーが口で勝てるとは到底思えない

そもそも、オレはこの異動には幾つか納得いかない所がある

高町教導管を始め、他の隊長クラスの奴等はオーバーSランクやニアSランクと、言ってしまうえば化物の集まりでしかない

その中でオレ達、特務部隊が四人も派遣されるなど考えられない

伊吹隊長が言うには、知り合いの奴から頼まれたと聞いただけで他は何も言わないし…

あのフアラン副隊長までもわからないと言っている

だとすると……

はやて「あの〜ジン？とりあえず質問ええか？」

ジン「…ああ、構わない」

オレが考え事をしている間に喧嘩が終わり、八神部隊長が質問をしてきた

はやて「まず、このモニターを見てほしいんやけど…」

そういつて見せたモニターは、伊吹隊長達と鉢合わせる少し前の奴で、ガジェットの大群がオレに一斉に攻撃を仕掛けた

…が、オレは目を瞑りそれを全て避ける

その後、オレはクロスファイアでガジェットを一掃し、何事もなかったかのように前に歩いた

ジン「…これがどうかしたか？」

なのは「どうも、この時の君は攻撃がくるのを初めから知っていたかのようにだったの」

ヴィータ「でなきや、目を瞑ったまま避ける事なんて出来ねーからな…なにをしたんだ」

……『その事』か

ジン「……その『解』には答えられるが、それを聞いてどうするんだ？」

はやて「…どういう事や」

ジン「『目を瞑ったまま避ける』という動作は熟練者なら誰でも出来る…そう言ったつもりだが？」

シグナム「確かにそうだが、あの時のお前はそれだけだとは到底思えない」

流石は烈火の将…か

ジン「…『答えを出す者』（アンサー・トーカー）」

ヴィータ「は？」

ジン「それがオレの希少^{レアスキル}機能の名前だ…」

隊長達はレアスキルと聞いただけで驚きが隠せないみたいだ
更にオレはそのまま説明する

ジン「『答えを出す者』は、「どうすれば攻撃が当てられるか」「どこが相手の『弱所』か」という問いを瞬時に答えを導きだす力だ」

なのは「じゃあ、ジンの戦闘スタイルは…」

ジン「相手の『弱所』を見抜き、撃ち抜く…それだけだ…

だが、この力は、ある欠点がある」

はやて「欠点？」

ジン「この力は魔力の消費が激しく、長時間は使用出来ない

また、脳による精神的消耗も激しいから、使用時間は三分、最大回数は三回が限度だ」

フェイト「もし、それ以上使ったら…」

ジン「知れた事…脳がその情報処理についていけず…最悪の場合、精神崩壊するだろう」

これが現実…大きすぎる力はそれ相応の代償がある

この『答えを出す者』の力は初めて開化した時に覚えた『解』だ

人間には大きすぎる力
故に妬み嫌う奴もいる

なのは「…もう一つ質問していいかな？」

ジン「…何だ？」

突然、高町教導管が険しい目で見te質問する
そして、口が開く

なのは「その戦闘技術…誰かに教えてもらった物なの？」

一瞬、オレの眉がピクリと動いた…この女

なるほど…『エースオブエース』の称号は伊達じゃないみたいだな

ジン「……答えるつもりはない」

なのは「えっ!？」

ジン「二度は言わない…悪いが部屋に戻らせてもらう」

ヴィータ「オイ!待ちやがれテメエ!!」

リファイア「ちょっ!ジン待ちなって!」

オレは二人の静止も聞かずに隊長室をでた……

s i d e o u t

ヴィータ「たく、なんだってんだよアイツは!!」

あゝあジンの奴出ていったからヴィータがキレやがった

…でこの場合の怒りの矛先は…

ヴィータ「オイ伊吹!

一体アイツに何教えてんだよ!!」

やっぱ俺だよねえゝ

伊吹「まあそう怒るなって…

リフィア、悪いけど先に出ていってももらえないか?」

リファイア「えっ！ああ…わかったよ」

リファイアを出て行かせた後、俺は本題に入る

伊吹「んで、八神部隊長、何故俺達をお呼びで？」

はやて「はやてでええよゝ意地悪やなあ

まあいろいろあるけど…単刀直入にゆうで
どんな理由で六課にきたんや？」

本当にドンピシャなところ突いてくるよなゝ

…けど

伊吹「need nat to no」

フェイト「なっ！」

伊吹「それが答えだ…」

行くぞファラン」

ファラン「オイ伊吹！
すまない、失礼する」

俺は半ば強引な形で話を切り上げ、ファランと一緒に部屋を出た

ファラン「伊吹！
一体あれはどういう事だ！」

伊吹「どういう事…ていってもなく
あればかりはどうしても答えられないからな…」

ファラン「……『密命』か」

伊吹「……流石だなファラン」

ホント、カンのいい友人だよ全く

俺は内ポケットの中から、ある手紙を取り出す
差出人の名前は『Z』と書かれている…

伊吹「コイツの密命で六課に異動しろ、とのことだ……まあ、もう一つ理由があるがな……」

ファラン「『Z』？」

…けど待て伊吹、異動を決めたのはクロノ提督だろ？」

伊吹「事実上でな…けど他にもいるんだよ」

そう…いくらクロノでもアイツだけで俺ら四人を異動させる事は出来ない

ファラン「どういう事だ？」

伊吹「ちゃんと考えろファラン

まあいい…とりあえずこの手紙を試してみろ」

俺は手紙をファランに渡し目を通す

ファラン「……………!! 伊吹、この差出人はまさか!」

伊吹「そう……『アイツ』からだ」

フアラン「…なるほど納得した
じゃあ異動を決めた人も…」

伊吹「そういうこった」

俺は同意するように首の縦に振った

なのはside

伊吹先輩達が部屋を出た後、皆と話し合いをした

ヴィータ「それにしても、伊吹の奴！
なんであんな事いいやがったんだ！！」

ヴィータちゃんは伊吹先輩の発言が納得出来ないみたい

フェイト「need nat to no…『知る必要の無い事』」

…か」

シグナム「龍崎があのような発言をするとはな…」

はやて「…もしかすると、『密命』関係かもしれへんな」

はやてちゃんの言う事が正しければ、確かに納得がいく

特務部隊は本部からの密命を受けていろんな世界に赴いている組織で、中には危険な任務を受けていると聞く

もし、伊吹先輩達の異動が密命関係だとしたら…

ヴィータ「けど、密命だったってなんでアタシらには言えねーんだ？」

はやて「少なくとも、私らのことを信用していないって事はないやろうな」

フェイト「寧ろそうだとしたら此処に異動して来ないだろうし…」

なのは「…上手く言えないけど…まだ私達には言えないって事かな？」

シグナム「そうかもしれんな…」

皆…頭を悩まされているみたい

はやて「…まあ考えても仕方ないやろ

伊吹さんならそのうち話してくれるやろうしな」

なのは「…うん、そうだねはやてちゃん」

はやて「それじゃあ、伊吹さん達の歓迎会の準備や皆、手伝ってくれへん？」

なのは「うん、勿論だよ」

シグナム「主はやての望みのままに」

私達は隊長室を出て先輩達の歓迎会の準備の手伝いをしにいった

side out

俺は今、自室のベットに横たわっている
そして差出人『Z』と書かれた手紙を見る

伊吹「たく、あの野郎…ホントにろくな任務寄越さねえよな」

手紙の内容はこう書かれてある

『第38管理外世界にて騎士の聖剣を見つけろ』

これだけだ…見つけろっていうけど情報がこれだけだと見つけれ
ねーよ！

伊吹「騎士の聖剣…ねえ、ファランの話じゃあオリフィエルが使っ

ていた聖剣ファルシオンの事だろうって言ってたけど…」

騎士オリフィエル……ベルカ王国時代に活躍した聖王女オリヴィエの近衛騎士隊長

聖剣ファルシオンを手にかくの戦に勝利を導き、他の王達をも実力を認めさせた

だが、ベルカ王国終焉時に聖王と共に死別し、ファルシオンはその際行方が不明と聞いている

そんな物が管理外世界にあるっていうのか？

伊吹「とりあえず、情報係に調べさせてみるか…」

情報の不確定要素が多い為、情報係にメールを送る事にした

？「伊吹さくん、居ますか」

伊吹「ああ、開いてるぜ、入りな」

そう言って入ってきたのは30センチくらいの妖精のような女の子

が現れた

伊吹「ようチビツ子
元気そうだな」

リイン「むっ、チビツ子じゃあないですう！
私にはリインフォース？（ツヴァイ）という由緒ある名前があるの
です！

ちゃんと呼べますう」

このチビツ子……じゃなくてリインフォース？ははやてのユニゾ
ンデバイスで、これでも空曹長という偉い地位についている
はやての補佐役でもある

伊吹「あぁ、ワリイワリイ、んでリイン、一体何のようだ？」

リイン「はやてちゃんが龍崎提督を食堂に来てほしいとの事です」

伊吹「わかったすぐに行く……ってリイン！
お前も提督言うなって言ってるだろうが！！」

リイン「そっちだってチビツ子って言ったからおあいこです！
さぁーはやてちゃん達が待っていますから早くして下さいですう」

伊吹「はあ…了解しました
リン空曹長殿」

リン「はい、他の三人も待っていますですよ」

俺達はファラン達と合流し、食堂に向かった

なのは達「ようこそ！！機動六課へ」

食堂に入った途端、いきなりクラッカーの音が鳴り響き、びっくり
した…

目の前を見ると豪華な料理がズラリと並んでいてその周りになのは
達隊長組とフォワード陣、そしてバックヤードの皆が迎えてくれた

……こいつら、嬉しい事してくれるじゃねえか

リファイア「スッゲ」

何のパーティーこれ！」

ファラン「あれだけの短時間でここまで…
驚いたな」

ジン「リイン空曹長、これは一体…」

リイン「これは特務部隊の皆様の歓迎会ですよ」

ジン「オレ達の…歓迎会？」

ジンの奴…珍しく驚いた顔してんな

はやて「いやあ…皆さんいい驚きっぷりですな」

伊吹「この計画したのお前らか？」

なのは「そうなんですよ
気に入ってくれましたか？」

ファラン「ああ…とても嬉しいよ
皆、ありがとう」

フェイト「喜んで頂いて光栄です」

ジン「……物好きな奴等だ」

リファイア「良いじゃんジン
今日はパーッと楽しもうよ！」

はやて「それじゃあ伊吹さんから一言お願いします」

そう言うてはやての奴からマイクを渡された……どっから持ってきたんだ？

伊吹「えーつと……あんまし長い挨拶は得意じゃないから一言だけ言うぞ

……今夜はパーッと楽しもうぜ……！」

一同「お………！！！！！」

この後皆でドンチャン騒ぎ

スバル「リフィア、どっちが多く食べられるか勝負しない？」

リフィア「面白い…受けて立つよ!!」

エリオ「リフィア姉さん、頑張ってください」

ティアナ「スバル！

無茶するんじゃないわよ！」

キャロ「よい…ドン!!」

キャロの掛け声でスバルとリフィアは大食い競争を始めた

ジンは少し離れて壁に寄り添って飲み物を飲んでいる

なのは達はというと…

シャマル「はやてちゃん
お酒持ってきたわよ」

はやて「でかしたシャマル！
よし皆、今日はとことん飲むで」

ヴィータ「おっ、落ち着けはやて！」

シグナム「そっ、そうです主はやて！
第一主はやてはまだ未成年であって…」

はやて「うるさ〜い！」

なら夜天の書の主が命ずる！
あんたらも飲め〜」

なのは「はやてちゃん！！落ち着いて！！！」

フェイト「待ってなのは！
今はやてに近づいたら…」

……よし、俺は何も見なかった事にしよう

そして、俺とファランはヴァイスとグリフィスと一緒に酒を飲んでいる

ただ、グリフィスとファランは余り飲めないため、少しずつ飲んで

ヴァイス「伊吹のダンナは結構イケる口ですかい？」

伊吹「ああ、それなりに酒は強い方だからな」

ヴァイス「今度、飲み比べしませんか？」

伊吹「ほうう…いいぜ！
そんな時は必ず潰す！」

ファラン「話がついていけないな…」

グリフィス「あはは…（汗）」

ファラン「しかし、この料理本当に美味しいな
誰が作ったんだ？」

グリフィス「八神部隊長ですよ
あと、なのはさん達も手伝ってましたよ（シャル先生以外）」

伊吹「へえ…そーいやあいつら料理出来るって言ってたな
よし、俺も一品作るか」

ヴァイス「ダンナは料理出来るんですかい？」

伊吹「まあな、実家がレストランを経営してるんだ
今日は簡単な物しか作れないが腕は自信あるぜ」

ヴァイス「そりゃ楽しみッスね

おい、食卓一つ空けろ

ダンナが一品作るそうだぞ」

スバル「ふえ、ふおふうふおふうふえふうふあ」

ティアナ「スバル！！

食べるか喋るかどっちかにしなさい！！」

スバル「ん！ゴクン…

伊吹さんは料理出来るんですか！」

伊吹「ああ、今日は簡単にピラフにしようかと思ってるんだが…」

ヴィータ「伊吹！アイスも作れるか？」

伊吹「ん？ああ、材料があれば…」

ヴィータ「なら作れ！」

なのは「あつ、じゃあ私も」

フェイト「なら、私も…」

はやて「ていうかもう面倒だから全員分作ればええやん」

伊吹「作るの俺なんですけど!？」

ヴィータ「いいから早く作れ！」

伊吹「わかった！」

わかったからアイゼンをしまえヴィータ!？」

ジン「(あれだけ食べてまだ食うのか…太ると思うが…)」

この後俺は六課の皆にピラフとアイスをご馳走した

感想を言うと、フォワード陣：特にスバルは「美味しいぞ〜」とデカイ声で叫んだり、エリオとキャロとティアナも美味しいそうに食べている

んで隊長陣はというと：

なのはとフェイトとはやての三人は、作ったピラフに何か隠し味がないか調べている

あいつらが彼処まで必死になるとはな…まあ俺も教えるつもりはな
いけどな、禁則事項だ

ヴィータは、ピラフを平らげた後すぐにアイスに手を出す…そんなに好きなのか？

シグナムとシャマルとザフィーラも、どうやら気に入ってもらえた
ようだ

結局あの後殆どの連中が酒に潰れてしまい（エリオとキャロとジンは別）

俺とかろうじて生き残ったファラン以外は二日酔いで頭痛にあった
事は言うまでもない…………



舞台裏コーナー

伊吹「どうもー今日もきましたこのコーナー！」

司会はおなじみ龍崎伊吹とファラン・グラフィイトだー」

ファラン「今日は初めての他の小説からの紹介をするぞ……って伊吹？」

そいつらは今何処に……」

その時！突如飛来してきた巨大な黒い機体が！！

ファラン「へ？」

ズドオオオオン！！！！！！

ファラン「なっ！！」

何なんだこれは！！」

? 1 「何だかんだと聞かれたら…」

? 2 「答えて上げるが世の情け…」

ファラン「何処かで聞いたことのあるセリフだな…（汗）」

? 1 「自然の破壊を防ぐ為…」

? 2 「自然の平和を守る為…」

? 1 「愛と真実と正義を貫く」

? 2 「世界最強の陰陽師！」

隆浩「阿部隆浩！」

晶彦「阿部晶彦！」

隆浩「世界をかける、我ら兄弟の二人には！」

晶彦「ブラックホール、黒い明日が待ってるぜ☆」

《Y A ー ー ー H A ー ー ー ー》

その時にバーン！と戦隊モノで良く使われる爆発が起きた

ファラン「……………（啞然）

隆浩「決まったぜーーー☆」

晶彦「かっこよく決まってよかったね兄ちゃん」

ファラン「…………おい」

伊吹「良く来たな、二人共」→無視

隆浩「遊びに来たぜオヤビン☆」

晶彦「約束通りにこの1／1ガウェインとストラ○クガン○ムの武装パーツ全部あげちゃうよ！

あと、兄ちゃんと一緒に作ったケーキがあるんだけど、食べる？」

伊吹「おう、頂くぜ

あと、ガウェインと武装パーツはその転送テレポーターにおいといてくれ

俺の秘密倉庫に繋がっているから」

隆浩「了解しやしたー」

ファラン「……おい（怒）」

伊吹「という訳で今回のゲストは『なのはSS・freedom』から阿部隆浩、晶彦兄弟だ」→再び無視

二人「よろしくお願いしまゝす」

ファラン「お前ら人の話を聞けー（怒）」

伊吹「どうしたファラン？そんなに怒ると血圧上がるぞ」

ファラン「誰のせいだ！！」

あと、一体なんだったんだアレは！！」

隆浩「何ってガウエインですけど？」

ファラン「そういう事じゃない！？

何であんなデかい兵器持ってくるんだ！？」

晶彦「お世話になった伊吹お兄ちゃんのプレゼントだよ」

伊吹「そういう事だ」

ファラン「そういう事じゃないだろ！！」

伊吹「……ファラン、少し黙っていようか？」

ファラン「はい？」

伊吹「隆浩、頼む」

隆浩「ういーッスんじゃ【禁】！」

ファラン「なっ！何だ！体が動かない！」

隆浩「秋月、カートリッジロード！」

《Y A ー ー H A ー ー ー 派手に殺ってやるゼー ー ー》

隆浩「ジガディラス・ウル・ザケルガ！」

ファラン「まっ！待て！

ジガディラスだけはやめ……………ウボア ー ー ー ！……………！」

遠くから見ていた伊吹と晶彦は……

晶彦「伊吹お兄ちゃんケーキ美味しい？」

伊吹「ああ、美味しいよ

晶彦も食うか？」

晶彦「うん！」

呑気に貰ったケーキを食べていた

———30分後

伊吹「終わったか？隆浩？」

隆浩「はい、彼処で少し眠っています」

ファラン「……………」

返事がない…ただの屍のようだ…（笑）

隆浩「けどよかったんすか？」

相手は伊吹殿の友人で執務管ですよ？」

伊吹「俺だから許せるが……フェイトが見てたら殺されるかもな……」

晶彦「そりやもう十七分割じゃ済まない位怖いね、きつと……」

伊吹「ああ……今なら某鈍女の如く『あははははは☆』って笑いながらザンパーフォームのバルディッシュを振り回す姿が想像出来るな……」

隆浩「コワッ！！」

ていうか、おいらか弱い子羊よ！

そんな姿見たら全力で逃げるよ！！！」

伊吹「……………そうだな、アレとお前らの師匠に比べたら確にか弱い子羊だよお前は……」

隆浩「そう言ってくれるのは伊吹殿だけですよ……」

伊吹「んじゃ今回の話について話すとするか」

隆浩「ハイハイイ吹殿、『Z』って誰ッスか？」

伊吹「いきなりそれか!!」

うーん：強いて言うなら俺が魔導士になる切っ掛けをくれた人で、俺とファランの師匠だ」

晶彦「ええ！そうなんですか！」

伊吹「ああ：どんな人かは追々話にでると思うからこの話はおしまいい

次は何だ？」

晶彦「ジンお兄ちゃんの『答えを出す者』は少しチートじゃない？」

伊吹「そうか？少なくとも常時『答えを出す者』状態の○ユフォーより規制したつもりだぜ？」

隆浩「まあそうっすけど：やっぱ反則ですよアレ」

伊吹「はは…確かに…
後、リフィアの怪力にも欠点があるぞ」

晶彦「どんな？」

伊吹「あのバカ力は腕に負担がかなりあるんだ
下手するとその腕が使い物にならなくなる

だから極力使わずやれって言ってんだが…

アイツ、血の気が多いから……」

二人「ああ…納得…」

伊吹「まあこんな所かな？」

隆浩「提督…こんなコメが届いています…」

伊吹「提督言うな！」

えーっと…緋雨ヒウさんからか…

こんな駄文にコメ頂きありがとうございます
つきましてはこの助言の基、改新しようと思います
これからも応援よろしく願います」

ファラン「う……うーん……」

伊吹「いよ！今起きたのか」

ファラン「ああ……まだ身体中痛いかな……」

隆浩「あはは……」

伊吹「そうだ隆浩、これやるよ」

伊吹は隆浩に紙袋を渡す

隆浩「……これは？」

伊吹「真珠のネックレスだよ

これをお前からはやての奴に渡してくれ」

隆浩「☆♂♀∞±×▼▽※▲□ななななんでおおおおいらがあらんな狸に渡さなきゃならんだ……！」

伊吹「あのなあ、流石に告白しろとまでは言わない…だが少しは素直になって行動くらいしろ!!」
好きな女にプレゼントする、それだけで嬉しいもんだよ…」

隆浩「……………そんなもんですか？」

伊吹「おう、だからお前も頑張れ！
上手くいけばアイツのハートをゲットだ」

隆浩「……………おう」

晶彦「伊吹お兄ちゃん凄い事言ってる…」

ファラン「アイツも許嫁がいるからな…
隆浩の奴にも頑張ってほしいんだろ」

晶彦「そうなんだ…
ところでその許嫁って誰？」

ファラン「俺からじゃ言えない…まあいずれ解るさ」

伊吹「さてと、そろそろお開きの時間だな

二人共、来てくれてありがとな」

ファラン「また何時でも遊びにきてくれ……今度は普通にな」

隆浩「あはは…じゃあ次回予告しますか」

次回予告

ファラン「なのは達は任務でオークション会場が開かれるホテル・アグスタの警護にあたる」

伊吹「だか俺は『密命』でなのは達とは別に、一人で38管理外世界に赴く」

隆浩「そして、ホテル・アグスタにて事件が起きる」

晶彦「次回、魔法少女リリカルなのはStrikeS（聖王の騎士）第四話..『ホテル・アグスタ（伊吹、管理外世界へ）』」

阿部兄弟「さあ、お前の罪を数えろ！」

伊吹「違うだろ!？」

伊・ファ「スタンバイ・レディ！」

第四話…ホテル・アグスタ〜伊吹、管理外世界へ（前書き）

更新大変遅くなり申し訳ございません！！

理由は家庭内の事情で書く暇がなく、結果的にこの様な駄文に…

伊吹「終わりにする！！」

全てを斬りさく！！！獣破轟翔斬！！」

ぎやあああああ……（バタリ）

伊吹「まったく、これで少し反省しろ！

それじゃ第四話、はじまるぜ！」

第四話…ホテル・アグスタ…伊吹、管理外世界へ

歓迎会から1週間後のこと…

伊吹「ああ…わかった…じゃあ明日にでも…ああ…それじゃ…」

そう言って俺は電話を切って一息つく

伊吹「明日…か」

電話の内容は『密命』関係で、先ほど情報係から連絡があった

どうやら、騎士の聖剣ファルシオンがあるのはほぼ間違いないらしい

ただ、その聖剣を守っているゲートキーパー的なモノがいてこれ以上調べる事が出来ないとの事だ

そこで特務部隊の出番って訳だが…

はてさて、どうした事か…

次の日：

フアラン side

俺達は今日、任務でホテル・アグスタの警護につく事になった

なのは達はヘリで、俺達三人は伊吹の車で向かっている

少し距離があるため、仕方なく秘密機能の飛行形態に変形したら、当然の如くあいつらは驚いた……まあ、わかっていた事だが……

ただ、エリオとキャロとスバルは声を揃えて「カッコイイ」やら「乗ってみたい」やら言ってきたので、仕方なく終わったら乗せてやると言っておいた

……で、伊吹はというと……

リファイア「じゃあ、タイショールは一人で管理外世界に行ったのかい？」

ファラン「まあ…そうなるな」

ジン「……『密命』ですか？」

ファラン「ああ…こんな手紙を残してな」
そう言ってジンに伊吹が残した手紙を渡す

手紙の内容は

「ちよっくら『密命』で38管理外世界に行ってくる
土産は期待するなよ

あと、あいつら（なのは達）にも今日のアグスタの任務は行けない
と言っておいてくれ」

との事だ……全く！

コレのせいでなのは達にいらん小言を受けたんだからな

ジン「ファラン副隊長、この手紙…まだ続きます」

ファラン「はあ？ 見せてみる」

手紙をよく見ると確かに続きがある

「P・S、お姫様達のエスコート、任せたぜフアラン」

……グシャ

俺は無性に手紙を握りつぶした

フアラン「あの野郎……実は単にあいつらの面倒がイヤなだけじゃなからうな（怒）」

そんな苛立ちを憶えながらもホテル・アグスタに向かう俺達だった
…

アグスタに着いたらいきなりシャルさんに呼び止められた

俺はなのはとフェイトとはやての三人と一緒にホテル内の警護をやってもらいたいのだが、特務部隊の制服では目立つとの事で用意し

た服に着替えてほしいんだそうだ

なのは達はパーティー用のドレスで、俺は執事服の様なものに着替える

………ん？

ファラン「ちょっと待て、何故に執事服なんだ？」
はやて「そりゃ、美女が三人もおると不安もあるやろ？」

だから警護兼ボディガードや」

なのは「それに、よく似合ってますよファラン先輩」

はあ…エスコートしろっていうのはこう言う意味か…ん？

ファラン「フェイト？どうしたんだ、顔が赤いぞ？

熱でもあるのか？」

フェイトの顔が以上なまでに赤いので様子を伺った

フェイト「えっ！だっ大丈夫です！平気です問題ありません、ハイ！」

そう言って両手を振りながら否定しているが、やはり不安は絶えない

ファラン「：はやて、悪いが俺はフェイトと一緒に警護にあたっているのか？

やはり心配はあるし：」

はやて「そうやなあゝ途中で倒れたらあかんし：わかった、フェイトちゃんのこと任せるわ」

フェイト「えっ！はやて何を言って：」

なのは「うん、私もファラン先輩ならフェイトちゃんを任せても良いと思うな」

フェイト「ちょっ！なのはまで！？」

ファラン「安心しろフェイト、何かあったらちゃんと守ってやる
それとも…俺じゃ不安か？」

フェイト「えっ!？」

いや別にそんなこと……ないです…」

ファラン「そうか…それじゃ先に会場内に入ってる

さて、参りましょうか、お嬢様？」

フェイト「!?!……………はい」

俺は執事になりきり、フェイトの手を繋ぎホテル内にエスコートし
た…

なのはside

いやゝ良いのを見せてもらっちゃったなゝ

特にフェイトちゃんってばファラン先輩と手を繋いだ時に本人に気付かれないように小さくガッツポーズしてたし…

スバル達は口がポカーンと開いたまま驚いていたし…

スバル「あの…なのはさん、フェイトさんってやっぱりファランさんのこと…」

なのは「うん！大好きだよ」

はやて「ていうかあれはもうベタ惚れやなあ」

ティアナ「薄々感ずいていましたけど……やっぱりフェイトさんも女性なんですね」

キャロ「けどフェイトさんとファランさんならお似合いだと思います！」

はやて「そうやな」

もし、あの二人が結婚したらエリオとキャロはファランさんのこと『お父さん』て呼ぶかもしれんな」

エリオ「父さん…かあ…確かにフアランさんなら…」

キャロ「うん…良いかも…」

にやははゝ二人共、案外まんざらでもなさそうだね

シャル「はい皆さん恋バナもいいけど、今は任務が先よ

ジン君も先に見張り場に行っちゃったし…」

七人「……………あっ！」

そうだった！今は任務が先だったね

私はすぐに自分達の持ち場に着いた

リファイア side

アタシはライトニング隊と一緒に駐車場付近の警護をしている

シグナム「そっちはどうだフローゼル」

リファイア「以上無しッス、シグナムの姐さん！」

シグナム「……フローゼル、頼むから『姐さん』と呼ぶのやめてくれないか？」

リファイア「えっ、何で？」

良いじゃん姐さんって」

《諦めて下さい騎士シグナム、これは彼女なりの親しい呼び方ですから》

シグナム「そうか…しかし最初にあった時は呼び捨てだったが…？」

《まあ…出会い頭あの発言でしたから…》

シグナム「…なるほどな」

何かシグナムの姐さんが凄く納得したって顔しているけど……なん
でさ

《貴女と騎士シグナムの性格は似た様なものですから》

シグナム「待て！それは納得いかないぞ！

私は騎士として常に高みを目指して…」

《つまり、強い人と戦ってボコメキョするのが好きなバトルマニア
って事ですよね》

シグナム「うっ…」

あゝあシグナムの姐さんってばグリーヴァに押し負けしてるよ…

まあ…アタシもグリーヴァには悔しいけど口で勝てた試しがないからねゝ

シグナム「そう言えばフローゼル、お前達の密命は私達には言えない事か？」

リファイア「……正直言つて、今回の密命はアタシもジンも良く聞かされていない」

例え知っていたとしても、多分……教えられない」

シグナム「……そうか」

リファイア「ごめん……アタシじゃあ上手く説明出来ないけど……特務部隊ってそういう所だから……」

アタシら特務部隊は結構秘密事が多い部隊で、同じ仲間の過去について知らない事がある

……もつとも、ウチのタイショーは相手の過去なんて興味ないらしいけどね

シグナム「……わかった、そこまで言うなら無理には聞かない……けど、もし話す時がきたら……」

リファイア「ああ、ちゃんと話すよ……絶対に」

アタシはシグナムの姐さんとそう約束した……

ジン side

オレはホテル内のロビー付近をスターズと一緒に警護している

ヴィータ「へオイ、ジン！<」

ジン「へああ…アンタか…念話で話だして何の様だ<」

ヴィータ「へウルセー、オメーには聞きたい事が山ほどあるんだ！<」

ジン「へ…拒否権は？<」

ヴィータ「へ無いに決まってるだろ！？<」

そう言われてため息を溢す

これでは『話し合い』ではなく『尋問』に近い

ジン「へ……内容による……一体なんだ？」

ヴィータ「へまず、あの時なのは質問に答えなかったやつからだ
」

ジン「へその事か……なら聞くんが、オレの狙撃を見て何を思った」

ヴィータ「へ質問を質問で返すのは感心しねえけど……はっきり言
って、オメーの狙撃は人を確実に殺す

それも躊躇なくだ」

ジン「へ……ああ、その通りだ」

ヴィータ副隊長の言う通り、オレの狙撃は人を確実に殺すモノで、
対人だったら頭か左胸（つまり心臓）を確実に狙い撃つ

つまり…

ヴィータ「へつまりテメェに戦闘技術を教えた奴は人を殺す事に長けている人物：ちがうか？」

ジン「へ…いや」

ヴィータ「へそいつは誰だ！

答えろ！？」

ジン「へ断る」

ヴィータ「へ何！？」

オレはその質問の否定し、即答した

ヴィータ「へどういう事だ！説明しやがれ！？」

ジン「へその『答え』を言ってもアンタには何の利益もない

ましてや、ソイツはもうこの世にはいない」

ヴィータ「へふざけんな！？
そんな理由になるか！？」

それとも、仲間のアタシらにも隠し事する気か！？」

ジン「仲間……愚問だな」

ヴィータ「へんだと！！」

ジン「仲間だから隠し事はしない……それは間違いだ

仲間であっても『言いたくない』、『話したくない』事だってある

もし、お前の言う仲間が『隠し事をしない』事だと言うなら……オレはアンタを……いやアンタ達を仲間だと思わないし思いたくもない」

ヴィータ「へっ！？」

ジン「へ……話しは終わりだ、悪いが切るぞ」

ヴィータ「へ！？待て……」

オレは逃げる様に念話を切って、一息つく

ジン「（仲間……か

オレには無縁だと思うがな）」

実際、オレは伊吹隊長達のことは『上司と部下』とか『仕事場の同期』位しか思っていないし…

『心許せる仲間』という存在は殆どいない

それに…

ジン「(オレは…)」

スバル「ジン、おい」

ジン「(…煩い奴…登場か…)」

オレに話しかけた煩い女…スバル・ナガシマが呼びかけて来た

ジン「…一体なんの样だナガシマ」

スバル「むう…『ナガシマ』じゃなくて『スバル』って呼んでよ」

ジン「その煩い口を閉じたら考えてやる」

スバル「うゝゝ：そう言えばジン、ヴィータさんと喧嘩でもした？
何かジンの事凄く怒ってて……」

ジン「…別に、少し揉めただけだ」

スバル「駄目だよジン！
仲間なんだから喧嘩なんてしちゃ」

ジン「（また、『仲間』か…）」

正直言って迷惑だ
今のオレに『仲間』なんて…

ジン「仲間なんて…オレには必要ない…」

スバル「えっ！」

ジン「オレに仲間なんていない…
一人の方がまだマシだ」

スバル「そんな…どうして…」

ジン「オレは…『道具』だからだ」

そう言ってオレはアイツ（スバル）から離れた

フアランside

ホテル内のオークション会場、俺とフェイトはペアで、少し離れた場所になのはとはやてがいる

フアラン「へなのは、そっちはどうだ？」

なのは「へ以上はありません」

フアラン「へはやての方は？」

はやて「へこっちも以上は無いで〜」

ファラン「へ：はやて、お前楽しんでないか?」

はやて「へそんな事あらへんよ!

それより、ファランさんの方は?」

ファラン「へ問題無い：が、油断はするなよ!」

二人「へ了解!」

そう言って念話を切り、周囲を見渡す

ファラン「（やはり人が多いな：もしかしたらこの人混みに紛れている可能性も：いや、離れた場所からガジェットで来る事も考えられる：）」

《マスター、とりあえず一般人を迅速に避難出来るルートを探り出しましょうか?》

ファラン「そうだな、頼めるかデスペラード」

《了解しました、マスター》

これだけの人の数だ…俺達四人で安全に避難させなければ、一般人を守りながら戦う事になる

それだけは絶対に避けなければならない

理由は至極単純、あのガジェット相手に多くの一般人を守りながら戦うのは、明らかにこちらが不利だ

フアラン「（それでも…俺はもう二度と…）」

フェイト「先輩、どうしたんですか？」

フアラン「フェイト？」

…ああ、何でもない

少し昔の事を思い出していただけた」

フェイト「昔の事？」

そういえば先輩の過去の事について余り知らないんですけど…」

フアラン「話してないからな…」

まあ…言ってもお前には関係無いと思うが…」

そう言うと、フェイトは顔をうつ向かせた…少し軽率な言い方だったか…

でも…これは俺だけの問題だ

フェイトや他の仲間達まで巻き込む訳にはいかない

といっても、この事は伊吹しか知らないがな
アイツは本当の意味で信頼出来る友人だからな

フフラン「けど…いつか話してやるさ

余り良い過去じゃないがな」

フェイト「はい！」

どうやら、フェイトに笑顔が戻った様だ
やっぱりコイツは笑顔が良く似合っている

それに、フェイトはエリオとキャロの保護責任者で、言ってしまう
ば二人の母親でもある
この一週間、度々様子を見せて貰ったが、なかなか板についている
様に思える

まあ…少し（いや、かなりか？）過保護のように思えるが…！

ファラン「話しは終わりだ、ここからは別々に行動して…」

《マスター、シャル嬢のクラーヴイントからガジェットの反応が出たと》

ファラン「どうやら、あっちからお出ましの様だな
デスペラード、脱出するルートは出たか！」

《はい、先ほどなのは嬢とはやて嬢にルートのデータを転送しました》

ファラン「そうか…」

フェイト「私のバルディッシュには？」

《お二人が話している間に転送しました》

フェイト「あ…ありがとう」

《いえ、当然の事です》

ファラン「へなのは、はやて！デスペラードから脱出ルートのデー

タが送られたか?」

なのは「へはい、送られました」

ファラン「へその各ルートで一般人達を誘導してくれ!

だが絶対安全とは限らないから敵がきたら速攻に倒せ、いいな!」

二人「へ了解!」

俺はなのは達の念話を切り、次にリフィアとジンに念話を繋ぐ

ファラン「へリフィア、ジン! ガジェットが現れた

至急迎撃にあたってくれ!」

リフィア「へあいよ!」

ジン「へ了解: ガジェットの殲滅を開始する」

俺は念話を切り、隣にいるフェイトに話しかける

ファラン「フェイト、俺達も行くぞ!」

フェイト「はい！」

ファラン「デスペラード！」

フェイト「バルディッシュ・アサルト！」

二人「セットアップ！！」

金色と紅色が輝き、俺達はバリアジャケットを装着する

それと同時に爆音と共にガジェットが会場内に侵入してくる

ファラン「これ以上進ませるか！

デスペラード、ブラッド・チェーン！」

《ブラッド・チェーン》

瞬間、ガジェットの周りに紅色の鎖が現れ、動きを止める

だが…それだけでは終わらない

フェイト「プラズマランサー、シュート！」

《プラズマランサー、ファイア》

フェイトが放つ金色の槍が飛び、ガジェット達を貫き爆発する

ファラン「よし、次の奴が来るまで一般人を避難させるぞ」

フェイト「了解しました」

俺達は急いで一般人を誘導した……

スカリエッティ・アジト

？「スカリエッティ様」

スカリエッティ「どうしたのかねウーノ君」

ウーノ「機動六課の連中の中に見慣れない人物が三人ほどいますが？」

スカリエッティ「見せてくれ」

白衣の男：ジェイル・スカリエッティがモニターに目をやる

映し出されたのは二人の男性と一人の女性だ

そしてスカリエッティは一人の男に目をやる

スカリエッティ「ほう：ファラン・グラフアイトか：龍崎伊吹がいないと見ると彼は別行動かな」

ウーノ「龍崎伊吹、及びファラン・グラフアイトは管理局本部の特務部隊の隊長と副隊長です」

スカリエッティ「知っているさ、あの二人には度々と僕の邪魔をしていたからね」

まあ、おかげで彼等の戦闘データも録れるというモノだが：」

スカリエッティは不気味な笑みを溢す

？「やあマッド、また自慢の玩具で女子供と遊んでいるのかい？」

スカリエッティの背後に現れたのは灰色の長髪の男性で、何処か独特のオーラを漂わせている

スカリエッティ「ああ君か…見ての通りだよ

他の二人は？」

？「自室に込もっているよ

あと、あの煩い奴が居ないみたいだけど…」

ウーノ「あの人は任務で別世界に行っています」

？「ふーん…まあ居ない方が僕は清々するけど…

誰か新しい遊び相手でも見つかったのかい？」

スカリエッティ「ああ見つかったよ…この三人、本来は四人だと思うが今は一人欠けている」

？「へえ…そうなんだ

ところで、君はその三人の中で気になる子はいるのかい？」

男は、さも興味なさそうな物言いですカリエッティに質問する

スカリエッティ「そうだな…この女、リフィア・フローゼルだったかな？」

彼女は僕の玩具を魔力付加無しで素手で壊してくれたよ

実に興味深い研究対象だ」

？「ワオ、相変わらずの発言

流石マッドサイエンティストのジェイル・スカリエッティ様だね」

スカリエッティ「誉め言葉としてとっておくよ」

？「ふん、まあいいさ…

それよりも僕は『彼』との再開がとても待ち遠しいよ」

男はそう言ってモニターに目をやる

スカリエッティ「ほう…君は『彼』に興味があるのかい？」

？「ああ…ジン・クロツグ…『今』はその呼び名で通しているみたいだね」

ウーノ「貴方は彼の事をよくご存知の様ですね」

？「ああ、知っているとも…ジンは僕と同じ…戦う為だけの『道具』なのだから…
フフ、フハハハハハ…」

男は笑いながら部屋を出た

ティアナside

キャロ「遠隔召喚、来ます！」

ティアナ「皆、迎撃行くわよ！」

三人「おう!!」

私達は今、召喚されたガジェット達と交戦している

ただ、動きが有人操作に変わった為か、私達フォワード陣は苦戦を強いている

エリオ「スバルさん！
後ろ!!」

スバル「えっ!!」

スバルの後ろにガジェットの？型が攻撃してきた

私もクロスミラージュで助けようとするが間に合わない

その時……

リフィア「はあああああ!!」

リフィアがグリーヴァを盾にし、ガジェットの攻撃をスバルから守

った

リフィア「グリーヴァ、カートリッジロード！」

《load cartridge》

リフィア「戦斧…一閃！」

リフィアがグリーヴァを縦に大きく振りおろすと、真空の刃が現れ、ガジェットを真つ二つに裂いた

リフィア「スバル大丈夫かい！」

スバル「はい！
おかげで助かりました」

リフィア「良いつて事だよ

仲間を助けるのは当然…つつ！」

スバル「リフィア！
どうしたの！」

リファイアが右腕を抑え片膝をつく

よく見ると右腕には酷い傷があった

ティアナ「アンタ…その傷…」

リファイア「ああ…ちょっと無茶しちゃってね…アタシの怪力って結構腕に負担がかかるからよくあるんだよ」

キャロ「待って下さい、すぐに治療します」

キャロがリファイアの右腕に触れ、治療術で傷を癒す

リファイア「ありかとねキャロ、おかげで痛みが退いたよ」

キャロ「けど無茶はしないで下さい…私の治療術じゃシャマルさんのように上手く治せませんので…」

リファイア「ああ…分かってる」

その時、銃声と爆発音が聞こえ、振り向いて見るとジンが一人でガジェットの大群に挑んでいて、今？型を相手にしている

ジン「コレは少し厄介だな…」

《主、あの手のモノは射撃ではなく、近接的な攻撃が有効かと…》

ジン「となると、アレを使う事になるか…不本意だがやるぞ」

《了解…ガン・ブレードフォーム》

ジンのデバイス『カタストロフ』が、ライフルから銃の機構が付いた変わった剣になる

ジン「一気に決める、ブレイク・ファング！」

《ブレイク・ファング》

瞬間、ジンは一気にガジェットの懐に入り斬りつける

その時にジンは斬りつける瞬間にトリガーを引くと斬った所が爆発し、それを連続で行なっている

そして、最後にガジェットを突き刺し、切り上げると爆発して動かなくなった

ジン「フン、他愛無い」

スバル「スゴ〜イ、射撃だけじゃなくて剣技も出来るなんて…」

ホント、スバルの言う通り…まさか射撃だけじゃなくて剣技にも長けているなんて反則じゃない!!

隊長達といい、特務部隊といい、やっぱり凡人は私だけって事ね…

ティアナ「私達もやるわよ!!」

スバル、クロスシフト行くわよ!」

スバル「おう!」

そうだ…立ち止まってなんかいられない

いつも通り証明するんだ

私の弾は…“ランスターの弾はどんな敵も撃ち貫けるんだ”って事

をね!!

ジン side

オレはガジェットをあらかた倒し、一息つく

リフィア「流石だね、ジン」

ジン「そうでもない…いつも通りだ」

そう言ってまわりを見るとスバルとティアナに目をやる

どうやらクロスシフトを行おうとしているが…

ジン「（アイツら、頭が悪いな…理はあるが今のアイツらじゃ失敗するのがオチだ）」

ヴィータ「ティアナ、無茶するな!!」

ティアナ「大丈夫です
行けます!!」

カートリッジを4発も消費するとなると恐らくクロスファイアを撃とうとしているのだろうか？

だが、いまのアイツに撃てるかどうか…

ティアナ「クロスファイアーシュート!!!!」

ティアナのまわりにある10ほどの魔力弾が一斉にガジェットに向かって、次々と貫いていく……だが

ジン「(ダメだな、一発逸れる)」

しかも逸れた先にはスバルがいる……恐らくあのバカは気付いていない

その瞬間、一つの言葉が頭の中によぎる…

自分の上司…龍崎伊吹隊長の言葉を…

伊吹『いつかお前にも、身体を張ってでも守りたい仲間が出来ると思うぜ、ジン』

ジン「（身体を張ってでも守りたい仲間…か）」

正直言って、今でもそんな奴はいない…

ジン「（だけど…）」

オレは何も考えず、スバルの方に向かっていった

ヴィータside

ティアナの撃った魔力弾は次々とガジェットを貫いていく

嫌な予感がしたが、それが的中した

なんとあろうことか魔力弾が一発逸れてスバルの方に向かっていやがったのだ

ヴィータ「チィ!!」

アタシは舌打ちをしながらアイゼンで叩き落とそうとするが間に合わない

ヴィータ「（またアタシは、誰も守れねーのか!!）」

そう後悔しながら思っていると、一人の男が魔力弾からスバルを守った

その男は……ジン・クロツグだった

ジンはバリアジャケットの一部であるマントでスバルを守ったのだ
アイツの右腕にはしっかりとスバルを抱き抱えている

スバル「えっ? ジン?」

ジン「……怪我はないか？」

スバル「うっうん、私は平気だよ」

ジン「……そうか」

ヴィータ「ジン！ワリィ助かった…ティアナ！無茶した上に味方まで撃ってどーすんだ！！」

ティアナは魔法陣を展開したまま啞然としていやがる

まるで自分の失敗が信じられないと言わんばかりに…

スバル「あっあのヴィータ副隊長、これもコンビネーションの内です…」

ジン「頭が悪いなオマエ、今のをどう見ればコンビネーションになるんだ」

直撃コースにも気づけなかったオマエもそうだが、今のは明らかにランスターのミスだ」

スバル「違います！今のは私が間違えて…」

ヴィータ「ウルセー馬鹿ども！」

このままじゃきりがねーからスバルを一端黙らせた

ヴィータ「もういい！後はアタシらだけでやる！

二人共すっこんでろ！！」

スバル達を無理やり下がらせて、ジンに話しかける

ヴィータ「ジン、さっきはホントにアリガトな」

ジン「……別に、任務に支障を生じたくなかったただけだ…それよりもあの様な下がらせ方をしてよかったのか？」

ヴィータ「いいんだよ。アイツらには、あれくらい 言っておいた方が」

ジン「そうか……そういえば、オレの秘密を知りたいんだったな」

突然の事にアタシは言葉を失った

ヴィータ「どういう事だ…」

ジン「気が変わった…隊舎に戻ったら隊長室にフォワード陣とフアラ副隊長達以外、全員集めろ。

そこでオレの秘密を全て明かしてやる」

ヴィータ「スバル達を省いた理由は…」

ジン「アイツらに明かすには、まだ早いと思ったただけだ…それと秘密を知った後、オレをどう思うかはアンタ達の勝手だ」

ヴィータ「わかった…コイツらを片づけて戻ったら、オメーの事について聞いてやる…だからまず…」

ジン「ああ…とつとあのガラクタを片づける」

そう言ってジンは別の方に向かっていき、アタシもガジェットを潰しに向かった

side out

伊吹「ここに来るのは…随分と久しぶりだなあ」

俺はこの38管理外世界『エフィネア』に着いた

さっきも言った通り、俺がここに来るのは決して初めてではない
何度かここに来ている

だから、ここに聖剣ファルシオンがあるっていうのは信じられなかった

伊吹「さて、まずは情報係の奴に会おうとしますか」

俺は情報係との待ち合わせしている場所に向かった

——舞台裏コーナー——

伊吹「どうも、年明けてから少し遅れているがそんなの関係ねー龍崎伊吹です！」

フアラン「お前なく年明けても余り変わっていない友人に頭が痛いフアラン・グラフィイトです」

伊吹「今回、全然出番がなかったので適当にやらせていただきます」

ヴィータ「ふざけんなコラー」

シグナム「真面目にやらんかー」

伊吹「チィ、えー今回はその年齢詐欺師の騎士を迎えてお送り致します」↑棒読み

ヴィータ「オイコラテメエ、年齢詐欺とはどういう事だー」

伊吹「事実だろーが！

ホントの事言われて一々怒るなー」

ファラン「落ち着け伊吹！

ほら、ヴィータもアイゼンをしまえ！」

シグナム「全く二人共修行がたらんな」

ファラン「そう言うアンタもレヴァンティンをしまえ！危ないだろ
！！」

――10分後――

伊吹「んじゃ今回のおさらいをいってみよー」↑棒読み

ファラン「いい加減に棒読み止めれ！

今回はホテル・アグスタ編にそって話を進めた訳だが…」

シグナム「やはりスカリエッティ側にも敵が増えたな」

伊吹「まあ、そりゃそうだろう」

ヴィータ「何か鳥肌の立つ奴だったな…」

ファラン「伊吹、TODAさんからのコメだぞ」

伊吹「どうも〜TODAさん、この駄文なんかに隆浩達を出演させていただきありがとうございます！」

ファラン「あと、そちらの小説に出演させてもらい、感謝します」

シグナム「ところで、フローゼル達はその事を知っているのか？」

伊吹「知らねー
っていうか教えてねー」

ファラン「ジンはともかく、リフィアに話したら煩いからな」

シグナム「うむ、確かに…」

伊吹「んじゃそろそろ次回予告するか」

―次回予告―

伊吹「38管理外世界『エフィネア』に着いた俺は待ち合わせ場所に俺とファランの師匠、ゼクス・クォールズに出会う」

ファラン「そして、泊まり場所である『ある人』の別荘に足を運ぶ」

ヴィータ「次回、魔法少女リリカルなのはStrikerSの聖王の騎士の第五話」

シグナム「『師匠×少年×騎士の剣・前編』に」

四人「スタンバイ・レディ！」

第五話：師匠×少年×騎士の剣・前編（前書き）

今回は伊吹達の師匠が初登場！

それともう一人登場します

それでは、第五話、始まります

第五話：師匠×少年×騎士の剣・前編

38 管理外世界『エフィネア』——そこは魔法文明とは無縁の自然の緑溢れる豊かな世界：だが、そこに一つの伝説があった：

獅子、鷲、鮫、牛、虎の光輝く五匹の獣達が一本の剣を携え、この地の丘：通称『獣ヶ丘』と云われる場所に降りたったという

恐らく、その一本の剣というのが聖剣ファルシオンだと思われる

伝説に現れる五匹の獣も、その昔騎士オリフィエルが従えていたとされるモノらしい：

確証はないが、まさか剣を守っているゲートキーパー的なモノってその五匹の獣って訳じゃなからうな……だとしたら今回の任務はちと骨が折れそうだな：

そう思いながらも、俺——龍崎伊吹は一本のデカイ木の前にいる

伊吹「どうやら、此处が待ち合わせ場所に間違いな」

にしても相変わらずデカイ木だなあ

昔、歌に出てた『この木何の木？』に出てた奴に似ている様な…

？「おせーぞ！馬鹿弟子！！」

伊吹「へっ！その声…まさかゼクス師匠！！」

ゼクス「おう、久しぶりだなあ馬鹿弟子！」

本に寄り添いながら話しかけたのは、俺が魔導士になるきっかけ作
った人で、俺とファランの師匠とも言える人物……ゼクス・クォー
ルズ元帥だった

伊吹「なんで師匠がここに…ていうか元帥がこんな所にいていいの
かよ！」

ゼクス「ああ！んな事どうだって良いだろ！
それが久しぶりに会った師匠に言う言葉かよ！」

どうだって良いって……良い訳ないから言ってるんだが…

ゼクス「ああ…頭の堅い連中の糞どもならちゃんと『お話し』して
きたぜ……コイツを使ってな」

そう言っで見せたのは、黒いノートに赤い字で『悪魔手帳』と書かれている……これで納得してしまう自分が恐ろしい！

伊吹「それで師匠、此处に来ているはずの情報係は？」

ゼクス「ソイツなら俺様がやっておくから帰っていいと言って置いた」

伊吹「はっ…はぁ？」

ゼクス「はぁ？っじゃねえよ！
オラ、さっさと行くぞ！」

伊吹「行くぞって…
今から行く所って分かりますか？」

ゼクス「ああ！今日泊まりに行く場所だろ？」

伊吹「ええそうです…けど、道はそっちじゃありません！」

目的地の反対方向に行こうとしている師匠を呼び止め、道案内をする

伊吹「それにしても、師匠の命令で機動六課に異動させられた時は驚きましたよ…」

ゼクス「ガハハ、どうだ、そっちは？」

伊吹「まあ…楽しくやっていますよ一応」

ゼクス「誰か良い女はいなかったか？
ベッピンのカワイコちゃんは？」

伊吹「師匠…それホント勘弁してくださいマジで！
訴えますよ本気で!？」

ゼクス「良いじゃねーかよ！
酒と女は俺様の宝だ!？
野郎はどうでも良いがな」

俺はため息を一つ溢す
はあ…こんな性格じゃなかったら尊敬出来る師匠で留まるんだが…
俺の師匠…ゼクス・クォールズ元帥は、その圧倒的過ぎる魔力量と
破滅的破壊力の攻撃力のデカさに、『管理局の大魔神』と云われて

おり、また、管理局員なのに質量武器のしこたま使いまくって、クビにさせられてもおかしくない位の数の反省文を書かされていた規律違反の常習犯でもある

そんな奴が未だに管理局に居るのかというと、検挙率が高いのもそうだが、一番の理由は先ほど出た『悪魔手帳』によって上層部の連中を牛耳っているからである

内容は……読者の皆さんに任せるとしよう！

ゼクス「それよりも、泊まる場所って一体どういう所だ？」

伊吹「知り合いの人の別荘です」

あと師匠、『アイツら』はいるんですか？」

ゼクス「ああいるぜ！
出てきな、オメーら！」

？1「ヤッホー伊吹ちゃん！元気い？」

？2「嫌いぞフラム！
…久しぶりだな、伊吹」

師匠の肩から30?位の赤い髪の女の子と青い髪の女の子の二人が現れた

伊吹「ああ、久しぶりだなフラム、フェン」

コイツらは師匠のユニゾンデバイスで、赤い髪の方はフラムベルク、青い髪の方はフェンシウスという名前である

基となった奴はフラムベルクは炎の魔剣『フランベルジュ』

フェンシウスは氷の魔剣『ヴォーパルコフィン』の化身である

……この師匠は二機のユニゾンデバイスを同時に扱うとんでも無い人で、俺とフランの二人がかりでも勝てた試しが未だに無い

なのはの奴が『白い悪魔』とか言われるが、ウチの師匠に比べたらまだ可愛げがある

フラム「んー?どったの伊吹ちゃん
そんな遠い目をして?」

伊吹「いや、何でもない…師匠、情報係の言っていた事は本当なんですか?」

俺は確認の為、師匠に問いかける

ゼクス「騎士の剣のありかについてはほぼ間違いない…が、問題は
その剣を守っているゲートキーパーだ」

伊吹「そんなに危険な奴なんですか？」

ゼクス「正確には“奴等”だ…情報係から聞いた話しじゃ、伝説と
同じ五匹の獣だそうだ」

伊吹「マジかよ…それじゃあやはり…」

ゼクス「ああ…一通り準備しといた方がいいって訳だ」

やれやれ…やっぱ今回の任務はかなり疲れちまいそうだぜ

??? side

？「此処が…そうなの？」

10歳位の少年が森の奥にある村に着いた

村といっても人っ子一人も居らず、村の背景もすでにボロボロである

少年は“誰か”と話している様だが少年以外は誰一人としていない

？「……うん、わかった、この奥の丘に行けばいいんだね」

それでも少年は“誰か”と話して、奥の方にある丘の入り口に向かって歩き出した

？「もうすぐ…君の大切な物が戻って来るよ……『オリフィエル』

そう、騎士の名前を呟きながら……

s i d e o u t

ゼクス「やっと着いたな…此処がその別荘か？」

伊吹「ええそうです…変わってないな此処も…」

俺達は海辺の近くある草原に建っている白い別荘の入り口前にいる
その左側にはガーデンルームがあり、いろんな花が多く咲いている

伊吹「（アイツの花好きは相変わらず…か）」

そう思いながらもドアノブに手を出そうとすると、勝手にドアが開
いて、目の前には空色のワンピースを着たピンク色のロングヘヤー
の女性が立っていた

俺は、この女性を知っている

いや、知らない訳がなかった

伊吹「リーシャ…なのか？」

リーシャ「はい！お久しぶりです伊吹」

そう言って抱きついて来た女性―リーシャ・クラインは、誰もが見とれるその笑顔で俺達を迎えてくれる

伊吹「ああ、久しぶりだな…ってお前仕事はどうしたよ？」

リーシャ「今日から一週間は休暇を貰いましたので問題ありませんわ」

伊吹「そうかい…元氣そうで何よりだ」

リーシャ「はい！伊吹こそ、お変わりなく元氣そうで何よりですわ」

本当に…何一つ変わっていないなコイツは…
まあ…だからこそ、俺はそのリーシャの事が…

ゼクス「コラー、なに俺様を省いて二人の世界作ってるんだよ！

嫌がらせかこれは…！」

伊吹「……………あっ！」

しまったあああああ！！！！

すっかり忘れてた師匠の存在!!

ゼクス「テンメー、幾ら久しぶりに許嫁に会ったからってイチャイチャしてんじゃねーぞコラ（怒）」

伊吹「イチャイチャって…そこまでしてねーよ!？」

リーシャ「…／／／／」

俺は師匠の言葉を全力で否定し、リーシャは顔を真っ赤にして黙りこんでいる

さっき師匠が言っていたが、俺とリーシャは欲に言う『親同士（＋師匠）が決めた許嫁』って奴だ

……えっ、そこまで聞いてない
フツ氣にするな、俺は気にしない

フラム「ムフフアツアツだねえ〜お二人さん♪」

フェン「全く…少しは場所をわきまえろ」

伊吹「二人共茶化すな」

ところでリーシャ、シルバさんは？」

リーシャ「お父様でしたら、この別荘の自室にいらっしゃいますわ」

伊吹「わかった、じゃあシルバさんに挨拶した後、獣ヶ丘に行く準備をしましょう、師匠」

ゼクス「そうだな…って言いてえが…ちと厄介な事があってな

できれば獣ヶ丘に行くのは明日にしてくれねーか？」

伊吹「どういう事ですか？」

俺は師匠が言った厄介な事について質問した

確かに此処からだと獣ヶ丘に着くには時間がかかるが、飛んで行けば問題無いはずだ

ゼクス「それが丘の入り口前に強力な結界があつてな…ソイツをぶっ壊す装置を作ろうと思ってるんだ」

伊吹「結界なんて：師匠の砲撃でぶっ壊せるでしょ？」

ゼクス「だーれがんな面倒臭い事しなきゃならねーんだ!？」

いや、装置作る方が面倒臭いんだが…」

ゼクス「つー訳でリーシャちゃん。

今日は一泊してから獣ヶ丘に行くからメシの用意お願いするわ」

リーシャ「はい！わかりましたわゼクスさん」

伊吹「すまない、後で俺も手伝うよ」

リーシャ「構いませんわ、伊吹も此方にくるまで疲れましてでしょう？

ゼクスさんのお手伝いをしながら、お待ちになってくださいな♪」

伊吹「悪い、じゃあそうさせて貰うよ」

リーシャ「それでは、お茶を用意致しますから、お二人共上がってくださいな」

伊吹「ああ…わかった」

ゼクス「おっ邪魔します」

こうして、俺達は別荘に泊まる事になった

次の日の予想もしない奴との再開があるとも知らずに……

―舞台裏コーナー―

伊吹「ヤッホー、今日も舞台裏コーナーの始まりだ」

ファラン「やけにテンションが高いな……」

司会の龍崎伊吹とファラン・グラフィットだ」

伊吹「そして今日は、今回この話に出てきた我らの師匠、ゼクス・クォールズと俺の許嫁であるリーシャ・クラインの二人に来て頂きました」

ゼクス「ガハハ」全国世界の女性の俺様ファンの皆様こんにちは、ゼクス・クォールズと申します」

リーシャ「初めまして、リーシャ・クラインと申しますわ」

ファラン「リーシャさんはともかく、ゼクス元帥には会いたくなかった……」

ゼクス「冷てーなファラン、あと、元帥言うな！

次言ったら殺すぞ！」

伊吹「師匠：殺しは犯罪ですので止めてください」

リーシャ「皆さーん、紅茶とケーキをお持ち致しましたわ」

伊吹「サンキュー、リーシャ

さて、まずは二人のプロファイルを見て貰いましょう

名前／ゼクス・クォールズ

性別／男

年齢／本人は30代前半だといはる

利き腕／右利き

出身地／不明（恐らくミットチルダだと思われる）

所属／時空管理局本部上層部

階級／元帥

魔法術式／古代ベルカ式

魔導士ランク／総合SSSS＋オーバー

好きな事（物）／綺麗な女、ナンパ、酒、タバコ

嫌いな事（物）／男（伊吹、ファランを除く）面倒な事、上層部の連中の小言、弟子の悪口

備考／管理局上層部の元帥の一人にして伊吹とファランの師匠

本編でも語られたが、圧倒的過ぎる魔力量と破滅的破壊力のある戦闘力の持ち主で、同じ上層部からも危険視されているほど

また、今はそうでも無いが昔はかなり質量武器をしこたま使っては、普通では考えられない程の反省文や始末書を書かされていた規律違反の常習犯でもある

彼の最大の謎は『どうやって元帥の地位についたか』であるが、恐らく、ゼクスが所持している『悪魔手帳』によって上層部の連中を牛耳っているからだと思われるが真相は定かではない

また、無類の女好きで、誰かれ構わず口説きにいくため、伊吹とファランもこの性格には頭を抱えている

ただ、『師匠』と呼ばれてる所を見ると二人にはそれなりに尊敬されてるらしく、ゼクス本人も二人の弟子として誇らしいと思ってい

る

伊吹「師匠……少しいいですか？」

ゼクス「ああ！んだよ！」

伊吹「総合SSSS＋オーバーは明らかにチート過ぎます！！！」

ゼクス「良いじゃねーかよ！」

俺様は史上最強の大魔導士様だぜ？これくらいあって当然なんだよ！？」

フアラン「良くねーよ！」

「つたく、次はリーシャさんのプロフィールです」

名前／リーシャ・クライン

性格／女

利き腕／右利き

出身地／ミットチルダ首都

職業／歌手

好きな事（物）／花の世話、歌を歌う、伊吹と一緒にいる事、料理
（主にお菓子）

嫌いな事（物）／G（台所の悪魔）、他人を平然と傷つける人又は
馬鹿にする人

備考／ミットチルダ首都が誇る大手企業社『クライン・カンパニー』
の令嬢で、『世界の歌姫』と称されている程の歌手であり、そして
伊吹の許嫁でもある

彼女の歌は聞いている人達の心を癒し、男性のみならず女性にも人
気を誇っている

リーシャの母も有名な歌手だったが、病で引退して、8歳の頃に亡くなっている

彼女が14歳の頃、『ある事件』の際に当時16歳の伊吹とファランに出会い、伊吹の心に惹かれ彼に好意を抱き、その2年後に、父シルバ・クラインと伊吹の両親、たまたま居合わせていたゼクスの話し合いの結果で許嫁になる

もつとも、リーシャは『ある事件』の際に伊吹から告白されて既に恋仲になっており、この話を聞いた二人はかなり喜んだらしい

リーシャ「こんな所でしょうか？」

伊吹「まあ、リーシャは魔導士じゃねーからな」

ゼクス「なあ？前から思ってたんだが伊吹のヤローにどんな告白されたんだ？」

伊吹「なっ！！ かつ関係ねーだろそれは！？」

ファラン「実は…俺も気になっていたんだ」

伊吹「お前もかよ！」

リーシャ「ふふ、あの時は確か…」

伊吹「リーシャ！言わんでいい！？」

ファラン「ゼクス師匠、フラムとフェンの説明はどうします？」

ゼクス「それは次回な、今はアイツら居ないし…」

ファラン「わかりました……それじゃあコメ返しとするか」

U. Tさんへ

伊吹「初めましてU・Tさん
今回コメしてくださってありがとうございます！」

ファラン「ジンの性格が獅子の心を持つ某傭兵みたい…か

まあ、ガン・ブレードフォームでその様に見えたのか…あながち間
違いではないが…」

ゼクス「そういや伊吹の技の中にセフィロスの八刀一閃があつたな」

伊吹「あれって結構使い勝手がいいからな

多分、本編でも多く使うと思う」

リーシャ「クラウドさんの『超究武神覇斬』という技は使えるんですの？」

伊吹「ああーアレか…使えないが…今思うと本人の許可なく使
って良いものかし…」

ゼクス「セフィロスの技だって勝手に使ってるんだから良いだろ別
に？」

それか『スーパードヴァ』も使えば良いじゃん」

伊吹「待て待て、『超新星爆発』なんて使ったら一気に魔力が空になるわ!？」

てか、そんな危ないモノ使えるか!？」

リーシャ「宜しければクラウドさん、どうか此方に遊びに来てくださいな

美味しい紅茶を用意致しますわ」

伊吹「そいつは良いな

俺も料理をご馳走するぜ」

ゼクス「けどよくどくせならカワイイ子も連れて来てくれれば…」

ファラン「アンタは黙れ!？」

村正さんへ

ファラン「初めまして

村正さん今回コメしてくださってありがとうございます！」

伊吹「一真のことはちゃんと覚えてるぜ

けど、フェイトの恋の成就是難しいぞ」

あの鈍感バカを落とすには時間がかかるしな」

ファラン「??? どうした伊吹? フェイトがどうかしたのか?」

リーシャ「…確かに大変ですわね」

ゼクス「此処まで鈍感だと直球勝負しかないぞアレは」

伊吹「問題はフェイトにその勇気があるかだがな…」

ファラン「?????」

伊吹「話しは変わるが千歳…だったか?

同じ歳なのに主人公の一真より強いヒロインってどうよ…」

リーシャ「あらゝ強い女性というのはとても憧れますわよゝ

私も千歳ちゃんみたいに強くなりたいですわ」

伊吹「いや、リーシャは今のままでいい」

ゼクス「ああいう女性も中々いいと思うけどなゝ」

ファラン「アンタが言うのと犯罪にしかみえないよ!？」

伊吹「さてと、そろそろ次回予告しないとな」

ファラン「今回は本編が少し短かったのにこの舞台裏コーナーが長く感じたな…」

伊吹「それは言うな!
じゃあ行くぞ!」

次回予告

伊吹「俺と師匠が別荘に着いたその頃、ガジェットを殲滅したファラン達」

ゼクス「だが、突如現れた謎の敵が襲いかかり、ファランは、仲間を守る為、自身の希少機能^{レアスキル}を発動させる

ファラン「そして伊吹達は本来いるはずのない奴と再開してしまう」

リーシャ「次回、魔法少女リリカルなのはStrikerS〜聖王の騎士〜第六話…『師匠×少年×騎士の剣・中編』に」

四人「スタンバイ・レディ！」

第六話：師匠×少年×騎士の剣・中編（前書き）

更新が遅くなり申し訳ありません！！

理由は学校のテスト期間で中々書けなかったのです

相変わらずの駄文ですがどうか楽しんでください

それじゃ第六話、始まります

第六話：師匠×少年×騎士の剣・中編

フアラン side

客人達を避難させ、ガジェットを殲滅させた俺達

ただ、有人操作にした奴等は捕まえる事ができず、今は被害状況を調べている

フアラン「（被害はこれといって大した事じゃ無かったが…犯人を捕らえられなかった事は痛いな…）」

やはり、執務管として犯人の逮捕ができなかったのは、正直悔しい

フェイト「フアラン先輩、そちらはどうですか？」

フアラン「いや、これといって特に…隣の人？」

俺はメガネをかけた茶髪の男性に目をやる

ユーノ「初めまして、貴方がファラン・グラフィイトさんですね

僕はユーノ・スクライアと申します」

ファラン「貴方がユーノ・スクライアですか！

初めまして、ファラン・グラフィイトです

お会い出来て光栄ですユーノさん」

ユーノ「ユーノで構いません

此方こそ、貴方の話しは伊吹さんから良く聞いております」

ここで伊吹の名前が出たから驚いた

ユーノ・スクライアと言えば無限書庫の管理をしている司書長を勤め、考古学にも精通している人物

俺も名前くらいしか聞いていないから実際こうして会うのは初めてだ

ただ、先ほどの話しによると、彼は一度伊吹に会っているらしい

ファラン「アイツとはどういう…」

ユーノ「3日前にお会いしたんです
何でも調べてほしい事があると…」

ファラン「内容は？」

ユーノ「それが…その件について、出来れば聞かれて欲しくない内容でして…」

ユーノは隣にいるフェイトを困った様な顔で見ても内容の意味がわかった

ファラン「特務部隊の密命関係ですか？」

ユーノ「ええ、そうです」

ファラン「…解りました
では、その内容についてはまた…」

ユーノ「ええ…しかし、本当に伊吹さんの言った通りですね」

フアラン「？アイツは俺の事を何て…」

ユーノ「仲間思いで、仕事熱心で、融通が聞かなくて、それでも信頼出来る大切な友人ときいています」

…アイツ、そんな事を言っていたのか

しかし、途中聞き捨てならない言葉を聞いた様な…

ユーノ「あと、多くの女性を墜とした女性キラーと…」

フアラン「はあ!？」

アイツは一体何言ってるんだ！
そんな事記憶にないぞ!？」

フェイト「へえ…そうなんですか…」

フアラン「!?!?（フェイトからもの凄い殺気が!?!?
俺は何かアイツを怒らせる様な事をしたか?）」

身に憶えのない殺気を向けられ、困惑する俺…
少なくとも俺はフェイトを怒らせる様な事はしていない……………

はずだ

フェイト「ねえユーノ、その事について詳しく聞いてる？
もしかかったら教えて欲しいんだけど？」

ユーノ「えっ！！う、うん…（フェイト…顔は笑ってるけど、目が笑ってないよ）」

ファラン「お、落ち着けフェイト「先輩は黙っててください！！」
はい…」

すまん、ユーノ…今の俺じゃフェイトは止められない」

今状況を説明すれば、俺はフェイトに首元をバルディッシュで突き
付けられてる…

目付きも某鈍女のように睨みつけている…………正直言って怖い

リファイア「ファランのアニキそっちは…………どうしたんすか？」

フェイト「……………チッ」

リファイア「アレ…フェイトの姐さん、何で舌打ちしたの？ねえ！」

ファラン「すまん、リファイア！」

見ての通りだ……ってお前その腕！」

リファイア「ふえ？ああコレ？大丈夫ダイジョーブ、キャロに少し治して貰ったから」

リファイアの右腕を見ると、酷い傷があった
キャロに治して貰ったと言うが、今のキャロにはリファイアの右腕の
傷が完治出来なかったらしく、傷跡も残っている

ユーノ「ちょっと見せて！」

リファイア「へっ！アンタは…」

ユーノ「いいから、早く！」

リファイア「はっ、はい！」

リファイアはユーノに言われた様に右腕を見せる

ユーノはリファイアの右腕に自分の手を当てる

すると、彼の足下に魔法陣が現れ、手が光る
そしたら、リフィアの右腕の傷が瞬く間に治っていった

驚いたな…彼は治癒術も使えるのか…

ユーノ「……はい、終わり
次からは無茶しない様にね」

リフィア「えっ！ああーうん……アリガト…」

ユーノが笑顔でそう言うと、リフィアが顔を赤くにして礼を言った

ファラン「おいリフィア、顔が赤いぞ？どうしたんだ？」

リフィア「えっ！だ、だだだだだダイジョーブ大丈夫だよ？」

ファラン「（何故に疑問形？）」

そう思っていた瞬間、フェイトが再びバルディッシュを向けた
しかも今度はユーノに

ファラン「ってオイ！
何やってるんだフェイト！！」

ユーノ「フェイト！

何でバルディッシュを僕に向けてるの!!」

フェイト「へユーノ…貴方には“なのは”という想い人がいるのに『な・ん・で』リフィアに手を出してるのかな?……………かな?」

ユーノ「へヒィィィィ!

フェイト…さん?目を単色にしながら某鈍女のセリフを言わないでください!」

ファラン「(何故だろうか…今フェイトに逆らえば『※される』気がするし)」

俺がそう思っていた時、救世主が現れた

なのは「皆、どうかしたの?」

フェイト「あっ!なのは、何でもないよ」

ユ・ファ「(いや、さっきまでデバイスを向けてた人が言セリフじゃ無いよね、ソレし)」

なのは「そうなんだ?」

ユ・ファ「(あっさり信じた!!!)」

なのは! お前は少し疑う事を知れ!!

イヤ確かに仲間を疑う事はいけない事だが……

などと思っていた瞬間、突如爆発音が響いた

ドオオオオン!!!!

フララン「なっ! 何だ一体!!」

リファイア「見ろ! ホテルの近くに煙がたってる!!」

フェイト「皆、早く向かおう!!」

ユーノ「僕も行くよ!」

なのは「ユーノ君!

危険だよ!!」

ユーノ「大丈夫! 無茶はしない

それに、怪我人の治療する人は一人でも多い方が良好いだろう?」

なのは「……………わかった、でも無茶はしないでね?」

ユーノ「その言葉、そのまま返すよ……………もう、あの時の様な無茶はしないでくれよ」

なのは「…うん、わかってる」

ファラン「皆、急ぐぞ!」

四人「了解!!!!!!」

俺達は急いで爆発のあった場所に向かった

ジン side

爆発があつた少し前：

ジン「何故：あんな事を言つたんだろうな…」

オレは、ホテルから少し離れた場所に一人でいる

必要以上に連中と関わらずにいるのがオレの普段の行動だ

先ほど、オレが粒やいた内容は、自身の過去について……

今まで隠してきた事を、隊舎に戻ったら隊長達（特務部隊の連中とフォワード陣は除くが…）に話さないといけない……

ただ、この話をした後、彼等は恐らくオレを避ける様になる……

何故なら………

ジン「（オレは……）」

？「まだ自身の存在理由について自問自答しているのかい？」『ジル

フィード』」

ジン「!?!?」

突然、オレの…かつての名前で呼ばれ声のした方を振り向く

其処にいたのは、独特な雰囲気をもった長い銀髪の男

この世に…この世界でその名前で呼ぶ奴は一人しかいない

ジン「…生きてまた会う事になるとはな…『シェラード』」

コウ「今はその名で呼ばないで欲しい

『コウ・アスカ』だ

出来れば『コウ』と呼んで欲しいな」

オレは無言でシェラード……コウ・アスカを睨み付ける

コウ「相変わらず、怖い目付きだねシルフィード……いや、ジン・クロツグと呼べば良いかな？」

ジン「どっちでもいい……それより、何故今になってオレに会いに来た」

コウ「君が自分の存在理由を見つけたか見に来たんだが…どうやらまだみたいだね」

ジン「…そういうお前はどうかんだ？世界を見て周り、お前はどんな『答え』を見出した」

コウ「僕の答え…か」

僕はね、『人は生きていく価値のない者』と思ったんだ」

ジン「……どういう事だ？」

オレが問いだした事に、コウは不気味な笑みを浮かべながら言った

コウ「彼等人間は、己の欲望の為に多くの命を奪っていく…その方法は多種多様、クビリ…バラし…斬り…殺し…撲殺して、刺殺して、圧殺して…薬殺して、突き殺し…射殺して…殴殺する」

ジン「……………」

オレは何も喋らず、コウは尚も言い出す

コウ「この様に、人間は一つの感情に支配され、互いを殺し合う

人は生きていること事態が『罪』であり、存在その物が『罰』だと思わないかな？ジン」

ジン「…確かに、お前の言う事もあながち間違いではない…だが、それがお前の答えとどう関係がある…」

コウ「僕の答え……それは……」

その時、突如爆発の音が聞こえた

ドオオオオン！！！！！！

ジン「なっ！！？」

コウ「時間だ……さあ、早く行くがいい

君のお仲間がピンチかも知れないよ…フッフ」

ジン「……………チッ」

オレは舌打ちをして、
爆発のあった場所に向かった

コウ「忘れないでくれ
ジルフィード、君はどんなに足掻いても日の当たる場所には居られない……」

君は僕と同じ、一生底知れない闇の中でしか生きられない『道具』
なのだから………」

フアランside

フアラン「これは……！」

フェイト「シグナム！
ヴィータ！」

俺達が爆発した場所に着いた時にはシグナムとヴィータが片膝をつ

いて倒れかかっている、シャルが二人を治療術で治している、は
やとザフィーラが目の前にいる一人の男性を警戒している

フアラン「大丈夫か！
二人とも！！」

シグナム「ああ…問題無い」

ヴィータ「少し…油断しただけだ…」

？「ケツ、たった一回ぶっぱなしただけでグロッキーな奴が何言い
やがる！」

ヴィータ「なんだと！？」

フアラン「落ち着けヴィータ！

……お前は誰だ！」

俺は紫の小さいサングラスをかけた黒髪の男を睨み付けて言う

ヴァン「オレはヴァン・ガロードだ
まあ、テメエーらの敵である事は確かだな」

なのは「敵って…どうして私達と敵対するの？」

ヴァン「ハッ、敵対するのに理由がいるのか？」

管理局の連中は、揃いも揃ってアマチャンだらけみたいだな！」

ヴィータ「テメェー！」

フェイト「！ヴィータ、待って！」

フェイトの静止も聞かず、ヴィータは自分のデバイス『グラーフアイゼン』で叩きつけようとする

ヴィータ「ぶっ潰れろおお！！」

アイゼンはヴァンに向かって振り下ろされ、煙が立ち上がる

だが……

ヴァン「……おせーよ」

ヴィータ「なっ！がはっ！！」

ヴァンは、ヴィータの攻撃を避け、思いっきり殴り飛ばした

ヴィータは壁に向かってふっ飛んだが、その場に居たリフィアに助けられ、激突する事はなかった

リフィア「つつ、大丈夫ツスカヴィータの姐さん？」

ヴィータ「ああ…大丈夫だ…それよりアイツ、以外と強いぞ」

フフラン「（確かに…デバイスを使わないであの強さだ…手強い相手になりかねない）」

アイツ：ヴァン・ガロードは、服装から言えば裾の短い白のYシャツに黒のジーンズを着ている

少なくとも、あれがバリアジャケットだとは言い難いし、デバイスを装備している所もみられない

それに、身体リミッターを付けているとはいえ、あのヴィータを殴り飛ばしたんだ…

油断したら、こっちが殺られる

そう思っていた最中、ジンとフォワードの皆が遅れて駆けつけてきた

エリオ「皆さん、ご無事ですか！」

フェイト「ええ、今の所は…」

ジン達が俺達の方に駆けよった時に、ヴァンがニタアと笑っていた
ああいう笑いをしている奴は何か企んでいる事が多いが…

ヴァン「全員揃ったみてーだな……居るんだろ？出てこいよ」

ヴァンの隣に魔法陣が現れ、銀髪の男性が姿を現した

ファラン「（今のは…転移魔法か？）」

ジン「……コウ！」

はやて「ジン君、アイツの事知っとるん？」

ジン「……ああ」

コウ「やあ…また会ったね、ジン」

スバル「また…って、どういう事？」

スバルの問いにコウが不適な笑みで答える

コウ「彼……ジンとは昔からの知り合いでね…さっき森の中で再開したんだよ」

ファラン「ジン…本当か？」

これに対し、ジンは黙秘した……恐らく、アイツなりの肯定だろうが…

リファイア「ジンの知り合い……ねえ

にしちゃ〜随分と趣味の悪い奴と知り合ったんじゃないし」

ジン「……好きで知り合った訳じゃ無い」

コウ「酷いなくジンは……それに、君みたいなセンスの欠片も無い野生児には言われたくないな」

リファイア「んだとゝカラー！」

《言われたわね…本音》

リファイア「なっ！アンタはどっちの味方だいグリーンヴァ！」

《一応、貴女の味方よ》

リファイア「一応って何さ一応って！！」

ジン「無駄話はするな…アイツの強さは本物だ、油断してると死ぬぞ」

ジンの言葉で全員が戦闘体制に入る

コウ「そんなに警戒しなくてもいいよ

用があるのは…ファラン・グラフアイト君一人だけだ」

ファラン「俺……どういう事だ？

俺はお前に会うのは初めてのはずだが？」

コウ「僕じゃ無いよ………っと、ご本人が来たみたいだ」

現れたのは、全身に黒と青のラインが入った甲冑と顔を隠した兜を装着して、右手に西洋の黒の剣を持った騎士がこっちに向かって歩いて来た

ファラン「(?! 何だアイツは!! ……魔力量もそうだが、身に纏っている気配がタダ者じゃ無い!!」

……それに…何故か初めて会った気がしない…なぜだ?)

コウ「やあ黒騎士、少し遅かったね」

黒騎士と呼ばれた者はただ無言で俺を睨み付けていた

コウ「確か……ファラン・グラフィートと一騎討ちが望みだったね」

黒騎士は無言で首を縦に振った

コウ「聞いたかい? ファラン・グラフィート……これは宿命だ
君とこの黒騎士は、戦う運命さだめなんだよ」

ヴィータ「待てよ！さっきから聞いてりゃ意味解んねー事…」

ヴァン「オイオイ…タイマンはるのに意味なんてねーだろうよ
んで、ファランさんよ…このタイマンを受ける気は…」

ファラン「……いいだろう
……ただし、他の仲間達に手を出すな！」

そう言って俺は黒騎士の前に立つ

フェイト「本当に良かったのかな？先輩を一人で戦わせて…」

シグナム「少なくとも、あの黒騎士はグラフィットとの一対一の決闘を挑んでいるのは嘘偽りではない…なら、私達が手を出すのは野暮というものだ

それに…お前がもっとも信頼している先輩が、そう簡単に負けると
思えるか？」

フェイト「それは……」

なのは「信じようフェイトちゃん、ファラン先輩の事を…」

フェイト「なのは……うん！」

コウ「ヴァン、念のために、奴等が邪魔立てしない様に見張って欲しい」

ヴァン「オレに命令するな…って言いたいが、了解したよ

まあ、連中はそんな気はねー見てーだけど…」

俺はデバイス『デスペラード』を構え、戦闘体制に入る

ファラン「いくぞ、黒騎士！」

黒騎士は、未だ無言で剣を構える

俺と黒騎士は、同時に地を蹴り、武器を振るう

ファラン「はああああ」

何度か刃と刃が打ち合い、火花が散る

俺は一度、黒騎士から距離を置く

ファラン「デスペラード、ソード・フォーム！」

《ソード・フォーム》

デスペラードのフォームを両刃の片手剣に変え、魔法陣を展開する

ファラン「波動…一閃!!」

剣に魔力が帯び、身体を捻りながらそれを横一線に振り、紅い斬撃を飛ばす

だが、敵も馬鹿ではないみたいで、俺が距離を離れた時には既に魔法陣が展開されていたらしく、同じ様に黒の斬撃を飛ばす

二つの斬撃がぶつかり、爆発して煙が撒く

ファラン「（あの黒騎士…やはり何処かで…）」

黒騎士「敵を目の前にして考え事か？
随分と余裕だな！」

ファラン「くっ!!」

煙の中から黒騎士が現れ、剣で首を跳ねようとし、俺は直ぐにデバイスで防いだ

それと、黒騎士が此処に来て初めて喋ったが、声のトーンからして女じゃ無いかと思った

黒騎士「さあ、〔玩具の武器〕はしまうんだ!」

ファラン「何!!」

黒騎士「使え、〔心剣〕を!」

ファラン「なっ!!」

心臓が一気に跳ねる様な感覚に襲われた気がした

何故アイツがソレを知ってるんだ!?

シグナム「シンケン?...聞かない名の武器だな?」

コウ「今に解るよ、客人は黙って舞台を見ていればいい」

ジン「…どういう事だ？

コウ「お前は一体何を知っている…」

黒騎士「どうした！？

早く心剣を使え！」

ファラン「何故貴様がソレを知っている！

何が目的でその力を使わせようとする！？」

話をしながらも、再び打ち合いになりなる

だが、黒騎士の方が若干押してきている

黒騎士「答えるつもりは無い…：どうしても使わないというなら…
：貴様を倒した後、後ろの仲間達を一人残らず：殺す！」

ファラン「！！待てよ！仲間には手を出すなど言っただろ！？」

黒騎士「ならば使え！

貴様の本当の武器を！？」

ファラン「…クッ！？」

俺は再び、黒騎士から距離を離れる…そして…

ファラン「デスペラード…モード・リリース」

《宜しいのですか？マスター？》

ファラン「ああ……すまない、デスペラード…」

《いえ…ご武運を、マスター》

そう言って、デスペラードは待機状態に戻り、バリアジャケットを展開したままの状態になる

ファラン「（本当は使うつもりはなかったし…アイツらに説明するのも面倒だったが…仕方ない！）」

深呼吸を一回行い、心を落ち着かせる…そして

ファラン「我が心、今こそ剣つるぎとなりて、紅き光と共に具現せよ！！

心剣招来しんけんしょうらい！！」

術式を展開させ、俺の身体から、剣の柄が現れ、迷いなくソレを引き抜く

そして、現れたのは紅い刀身が輝く剣が、俺の右手に収まっていた

ファラン「これが、俺の心剣、『紅剣ブラッドゲイン』だ!!」

フェイトside

私達は、今見た現状に驚きを隠せずにいた

ファラン先輩が、突然デバイスを待機状態にし、術式を展開させて、先輩の身体から紅い剣が、引き抜かれたのだ

ヴィータ「何だよ…アレ？」

なのは「解らない…ただ、ファラン先輩の身体から剣が出てきた事しか…」

ジン「……まさか、あれがファラン副隊長の……」

リファイア「…レアスキル希少機能」

スバル「えっ！ファランさんって希少機能持ちだったをですか！」

ジンとリフィアの二人が溢した言葉に、スバルは驚いた
他のフォワード達や私達もそうだが……

ジン「オレ達も噂ぐらいしか聞いていないから、実際に見るのは初めてなんだ」

リフィア「けど……まさかこんな形で見れるとはね……」

フェイト「（確かに……ファラン先輩の噂話にそんな内容があったよ
うな気が……）」

噂の内容は『ファラン・グラフアイトには、特異的な力がある』と
聞いた事がある

ただし、あくまで噂で、見た人は一人もおらず、本人と同期である
伊吹先輩はその件に関して黙して語らずだった

黒騎士「ようやく心剣を抜いたか……」

ファラン「リクエストに応えたんだ……第2ラウンドといこうか」

再び二人は剣を構える

フェイト「（けど…何故か二人を戦わせてはいけない…そう思うのはどうして…？）」

私は、内に秘めたこの嫌な予感を抱えながらも、今は見守るしかなかった…

伊吹side

今俺がいる世界『エフィニア』の時間は午後7時過ぎ、リーシャの父シルバさんに挨拶を済ませ、俺は用意してくれた部屋でデバイスの調整をして、ゼクス師匠は別の部屋で結界を壊す装置を作っている

言い忘れたが、この世界『エフィニア』はミットチルダと違い、時差がかなりあり、こっちで3日暮らしていたとしてもミットでは、やっと1日経つくらいだ

つまり、今回のリーシャの休み期間があっちで一週間であるから、こっちで4週間ちよつと、まあ、大体1ヶ月とちよい位休めるって事だ

もっと解り易く言えば、夏休みの宿題をこっちで1ヶ月やってもミ

ットでは一週間弱で宿題が片付く訳だ

《相棒、そんな例えはどうでも良いから早くメンテを終わらせてくれ》

伊吹「あのなあ、神威、人の心をよまないでくれ」

………つと終わり！

後は………」

《お館様……某も早くメンテを御願いしたいで御座る……》

《ウルサイですわよこのポンコツ！！

さあマスター、次は私の番ですわよ！！！》

《マスター……私も早く………》

《ええ……次はボクだよねマスター♪

答えは聞いてない♪》

《お前達少しは落ち着かんか！

これ以上煩くなると……》

伊吹「お前ら全員黙れ〜〜〜!!!!!!」

《あゝあ、相棒がキレた》

《だから言わんこっちゃないし》

さて、面倒だけど簡単に説明するぞ

上から順に、二槍型デバイスの『朱羅』

杖型デバイスの『リュシエール』

アームリスト型デバイスの『ソフィエル』

2丁拳銃型デバイスの『ブロウニング』

投剣型デバイスの『煉牙』

以上のこの5機は神威と同じ、俺の大事な相棒達である………んだけど〜し

伊吹「お前らな〜し

ちゃんとメンテしてやるから騒ぐな〜し」

《ですがお館様、ここ最近まで神威殿しか使われていないのも事実。次の戦場にて、どうかこの朱羅をお使いくださいませ!! お館様〜

伊吹「あゝゝゝもうウルセーな！！

《有難うございます！！お館様~~~~！！！！！！》

まあ、お陰で退屈はしないけどな♪

この後リーシャが飯の用意が出来たと連絡しに来たのでメンテは中断、優雅に夕食を満喫した

ゼクス「この森の奥には、今は誰も住んで居ない村があつて、更に

その奥に獣ヶ丘の入り口がある」

伊吹「どうするンですか師匠？」

ゼクス「歩くのタリィから入り口前まで飛んでいく……フラム！」

フラム「ホーイ♪んじゃ、いっくぞ〜」

師匠の肩から現れたフラムベルクことフラムは、両腕を左側にビシッとポーズをした

フラム「変〜身！とう〜！」

そのまま初代仮●ラ●ダーの様な変身ポーズをキメ、ジャンプすると光に包まれ、収まった時にはあら不思議、身長が164cm位のフラムがいたのだ………姿は変わって無いから変身とは言わな
いが気にしないで欲しい

フラム「それじゃあ〜いっくよ〜♪」

そう言って俺と師匠の首根っこをムンズつと掴む

……………嫌な予感！

伊吹「おいフラム…お前まさか……し」

フラム「人間ロケット、ファイア〜♪」

伊吹「やっぱりかチキショー……！！！！！！」

そのまま俺達はフラムに投げ飛ばされた

ゼクス「ご苦労さんフラム、あとで褒美を遣わしてやる」

フラム「やた〜♪」

伊吹「たく……少しは……加減……しろよな……」

フェン「全くだ……フラム！投げ飛ばされる私達の身にも考えろ！！」

師匠のもう一つの相棒、フェンシウスことフェンは、さっき投げ飛ばされた際酔ったらしく顔色も良くない

フラムはええ〜と言っているが、今回はフェンの言う通りだ

ゼクス「たく、こんなんで酔ってんじゃねえよ

ほら、いくぞ」

伊吹「いくぞ…ってこの先は結界があるんじゃ…」

なんか目の前に触っただけでグロッキーになりかねない結界があるんだが、師匠は関係ねえと言わんばかりな顔で言った

ゼクス「それをぶっ壊す装置がこれだ

といっても、即席で作ったモンだから大した威力はねえが入れば問題ねえ」

そう言って取り出したのは、爆弾のような形をしたモノ

威力は大した事無いと言うが、あの師匠が作ったモンだ…不安が絶えない

ゼクス「んじゃ、いくぞ！」

師匠はそのまま結界破壊爆弾（古典的だが今命名）を投げつけ、爆発した

そして結界は、投げつけられた所だけ決られたかのような大きな穴があった

ゼクス「即席じゃこの程度か……

ま……通れる分問題ねえな」

伊吹「（即席で彼処までの威力が出せるのもどうかと……し）待ってください師匠……ん？」

俺が師匠の下に行こうとした時、裾が引っ張られたので見てみると10歳くらいの男の子がいつの間にかいた

髪は右側に跳ねたショートヘヤーで、目は右が空色、左が紫のオツドアイ、服装はボロ布の様なTシャツ（元は白の色だったかも知れないが酷く汚れている）と短パンを身に纏って、靴はおろか靴下まで履いていない

よく見れば両足の裏にできてたマメらしきあとがあり、それが破けて、酷い傷跡がある

伊吹「君、どうしたの？」

どうして此処に？」

少年「……………僕は…」

ゼクス「どうした伊吹…ってこのガキがどうしたんだよ

ってかなんで人気の無い所にこんなガキが居るんだ？」

伊吹「知りませんよそんなの……………けど、放って置けない事は確かですし……………それに…」

ゼクス「ああ…さっきから嫌な気配がプンプンすんだよね…」

伊吹「君、お兄さん達の後ろに隠れてて！」

男の子を後ろに隠れさせ、いつでもデバイスを出せる様にする

？「ケケケ、久しぶりだなあ…リュウザキ…」

俺の名字で呼ぶ男の声……………全身に悪寒をさせるような感覚、俺は今目の前にいる奴の存在を否定しなかった……………

伊吹「なんで……………お前が……………『あの時』お前は確かに…！」

？「言った筈だぜリユウザキ…『必ず帰ってくる』ってな…」

伊吹「……滝川…秀鬼！！」

俺は奴……タキガワヒデキ滝川秀鬼との再開してしまった事を……認めたくなかった…

―舞台裏コーナー―

伊吹「ども…龍崎伊吹です…」

ファラン「おい、どうしたんだそんなやる気の無い声は！！」

伊吹「だってよく今回はスッゲー嫌な奴に会ったんだぞ！！」

ファラン「滝川秀鬼…か」

確かに嫌な奴だが、今は気分を変えたらどうだ？

今回は客人も来てるんだし」

フラム「そうだぞ伊吹ちゃん、さあテンション上げていこ」

フェン「紹介するぞ、『魔法少女リリカルなのは』片翼の天使の導いた世界」の主人公のクラウド・ストライフだ」

クラウド「……クラウドだ」

フラム「うわ！こっちも暗いよ」

クラウド「……別に暗くはない……こういう性格なんだ」

フラム「もうちょっと明るい方がモテるよ？」

クラウド「……興味ないね」

フラム「うぐーそんならこれをクラウドちゃんに着せちゃうぞ！！」

フラムが取り出したのは、あのクラウドにとってトラウマ的もので

ある『クラウドちゃん（女装）セット』

クラウド「……………何故貴様がそれを持っているし」

フラム「禁則事項でゝす♪」

クラウド「……………わかった、出来る限り努力するからソレをしまえし」

フラム「ほゝい♪」

リーシャ「クラウドさん、紅茶とケーキを用意致しましたわ」

クラウド「有難う…後で頂く……………さて、伊吹」

伊吹「ああ、お願いするぜクラウド」

伊吹とクラウドは別の部屋に移動した

ファラン「それじゃあ二人が戻るまでフラムとフェンの紹介を済ますか」

名前／フラムベルク

性別／女

髪／セミロング

髪の色／赤

備考／ゼクスが扱うユニゾンデバイス

性格は子どもの様な陽気で悪く言えば煩い奴

フェンシウスとは姉妹機にあたり、フラムは妹の方になる

属性は炎で、ゼクスが使うデバイス『フランベルジュ』の化身

名前／フェンシウス

性別／女

髪／ロングヘヤー

髪の色／青

備考／ゼクスが使うユニゾンデバイス

性格はフラムと正反対で落ち着きがある大人の女性を絵にした性格である

フラムベルクとは姉妹機にあたり、フェンは姉の方になる

属性は氷で、ゼクスが使うデバイス『ヴォーパルコフィン』の化身

上記で紹介した二機は単体でもそれなりに力がでるが、フラムとフェンの二機を同時にユニゾンする『ダブル・ユニゾン』をすることで脅威的な力が発揮される

フラム「以上がアタシらの説明だよーん」

ファラン「ユニゾン二機を同時につて…あの人のチート力って一体…」

フェン「まあ、驚くのは仕方ない

ただでさえ、融合特性がなければユニゾン出来ないし、出来たとしても融合事故をおこしてしまう事もあるからな…」

ファラン「二機同時にユニゾンして事故った所なんて見たくねえ」

フェン「残念ながら奴がダブル・ユニゾンして事故った事は一度もない」

ファラン「ないのか！
ていうか何で残念がるんだ！」

伊吹「戻ったぞ」

クラウド「…今戻った」

リーシャ「お二人がお戻りなさいましたのでコメントを返しませう」

U・Tさんへ

伊吹「やっぱり師匠の強さは異常でしかねえよな」

フアラン「全くだ」

まあ、お陰で強くなれたがな」

クラウド「どんな修行だった？」

伊吹「9歳の時、どっかの管理外世界のジャングルで上空20mからヘリでパラシュート無しのカゴ無しのバンジーされて2ヶ月放置プレイさせられた事からが始まりだった……」

フアラン「巨大アナコンダと死闘を繰り広げたり…水を飲もうとして、ピラニアに喰われかけたり……採った茸が毒茸で生死の堺を3日くらい迷ったりな……」

クラウド「……よく生き残れたな」

フラム「2ヶ月経った頃には見事に野生化してたよね♪」

フェン「そのお陰で肉体は丈夫になったが…」

伊・ファ「全然記憶にないんだけどソレ!!!!!!」

フェン「ときにクラウド、さっき伊吹と何してたんだ？」

クラウド「俺の『超究武新覇斬』をはじめ、いろんな技を教えた」

伊吹「アリガトなクラウド、お前の技、役に立たせて貰うぜ！」

クラウド「…ああ」

村正さんへ

伊吹「村正さん、『一真の部屋』に出演させて頂き有難うございます!!」

クラウド「……大丈夫だったのか？彼処に行ったゲストは必ず一回は逝くはずだが……」

伊吹「ああ、危うく獄龍波ぶっぱなされるところだったけど……」

フアラン「どうやって切り抜けた？」

伊吹「俺を殺したら美味しいモンはやらんって言ったらおさまった」

フラム「流石、伊吹ちゃんのカカア天下は健在だね♪」

伊吹「そんな天下とった記憶ねえよ」

リーシャ「獄龍波という技はどういうのですか？」

伊吹「話に聞く限りじゃアレで町一つは破壊できるってよ」

フアラン「アイツはそんな危険な技を人に向かって放っているのか
！！」

フラム「でもそれを跳ね返す千歳ちゃんも凄いけどね」

クラウド「…リーシャ、一真は椎茸が大好きらしいから、世話になった伊吹の変わりに送ってやってくれ」

リーシャ「はい！解りましたわ♪」

伊吹「…クラウド、俺が聞いた話じゃアイツは椎茸はおろか茸全般ダメだった筈だが…」

クラウド「…クッククク…：絶望に溺れ苦しむがいい一真…」

フアラン「ちょ！クラウド、セリフがセフィロスになってるぞ！！」

クラウド「…：ハッ！

俺は今まで何を！！」

フェン「…随分古典的なセリフがでたな」

クラウド「クッ！セフィロスめ、俺を操って一真に酷い事を…」

伊吹「嘘言え!!」

クラウド「…うつ…頭が痛い…記憶喪失の様だ…」

フアラン「随分と都合の良い記憶喪失だなオイ!!」

あと、かなり懐かしいネタできたな!!」

リーシャ「皆さん、どうしたんですか？」

伊吹「いや、なんでもない……そういや、千歳やアリスには何送った？」

リーシャ「お二人には安眠抱き枕（一真の全身プリント付き）ですわ」

伊吹「そっかあ、喜ぶと良いな（一真以外）」

リーシャ「はい♪」

伊吹「（後で一真に謝罪メール送っておこう）」

TODAさんへ

伊吹「そういや、アイツらの師匠さんもとんでもねえ人なんだよな
し」

クラウド「?どういう人だ」

伊吹「聞いた話じゃ人間を武器として扱うある意味最強の人だ」

クラウド「……そいつは本当に人間なのか?」

フラム「うちのマスターは人間を脅して奴隷にするけどね♪」

クラウド「……それは人としてどうかと思うが…」

フェン「勘違いするなクラウド、アレは人の皮を被った正真正銘の悪魔だ」

ファラン「ある意味でなのはより質が悪い悪魔だがな」

フラム「砲撃もなのはちゃんよりも凄いいしね♪

なんせきよ…」

伊吹「こらフラム！

ネタばれになるからそれ以上は言うな！！」

フラム「エヘッ、ごみくんに♪」

伊吹「それと隆浩、リーシャが某種の歌姫に似ているって事だが…
あながち間違いではねえぞ…ただ、別に特殊な力が無いだけだが…」

伊吹「んじゃ、コメも返したし…クラウドともこれでお別れになっちまう訳だか…」

リーシャ「また遊びに来て下さいな♪」

それと、これをクラウドさんに…」

クラウドは、リーシャから一輪の花を貰った

クラウド「……これは？」

リーシャ「彼方の世界へのお土産…ですね」

よかったら誰かに差し上げてはどうでしょう」

クラウド「……有難う」

ファラン「それじゃ、次回予告をさくつと終わらせるか」

―次回予告―

ファラン「伊吹とゼクス師匠が出会った男…滝川秀鬼、かつて伊吹と俺を苦しめた犯罪者だった」

クラウド「ゼクスは伊吹と謎の少年を丘の頂上に向かわせ、滝川と対峙する」

伊吹「そして、アグスタの方では、ファランと黒騎士との決着が着こうとしていた」

リーシャ「次回、魔法少女リリカルなのはS t r i k e r S 聖王の騎士」

フェン・フラム「第七話…師匠×少年×騎士の剣・後編に」

六人「スタンバイ・レディ!!」

オマケ……

フェン「フラム、何をしている?」

フラム「U. Tさんの所にクラウドちゃんセットを送ったの」

フェン「お前という奴は……後でどうなっても知らないぞ？」

終わり

第六話：師匠×少年×騎士の剣・中編（後書き）

U・Tさん、クラウドの出演有難うございます！

：少し（いや、かなり？）カオスになってしまいましたけどどうだったでしょうか？

何か思う所があったら言って下さい

これからも応援宜しくお願いします！

それじゃ

第七話：師匠×少年×騎士の剣・後編（前書き）

まず、最初に更新が遅くなってしまうました事をお詫び致します

すいませんでしたあああああ！！！！（土下座）

伊吹「反省してんなら更新速度上げろよ！」

本当にすいません！

言い訳かもしれませんが、此処にきてスランプに陥ってしまい…

伊吹「現実の時間帯も結構忙しい日々らしいしな…」

そして舞台裏コーナーではとんでも無い事に……」

伊吹「あれは当然の報いだ！」

とにかく、こんな駄作者が書いた駄文で楽しんで頂ければ幸いです
！！

伊吹「んじゃ、そろそろ第七話：始まるぜ！！！」

第七話：師匠×少年×騎士の剣・後編

伊吹「滝川……」

秀鬼「オイオイ、いきなりそんな殺気を向けんなよ」

知らない仲じゃ無いんだ、ゆっくり話し合おうぜリユウザキ」

ゼクス「おい伊吹、あのイカレ野郎はお前の知り合いか？」

伊吹「断じて違います！」

全然関係ねえと言えは嘘になるが…

この男……滝川秀鬼は、かつて俺とファランが担当していた事件の
際出会ってしまったS級犯罪者

性格は血が見ただけに人を殺す快楽主義者で、相手が女子ども、
管理局関係無く本能のまま『飢え』を満たせる為に殺していったと
んでもねえイカレ野郎だ

そして……

秀鬼「ツレねえ事言うなよりユウザキ…さあ、『あの時』の続きと
いこうじゃねえか

いや、ファランが居ねえが良いだろ？

殺り合うのに理由はいらない、どっちが多くの血が流れて死ぬかだ
そうだろ？リユウザキイイイ！！！！」

伊吹「相変わらずの性格だなあテメエーは！！

いいぜえ…何でテメエが居るかは関係ねえ！

もう一度地獄に突き墜としてやるよ、滝川！」

いい加減にアイツの戯言を聞くのが嫌になったので、デバイスをセ
ットアップしようとした時に師匠に止められる

ゼクス「待て伊吹、あのイカレ野郎が気に入らなねえのは賛同する
が、今は任務が優先だ」

伊吹「しかし！！」

ゼクス「しかもカカシもねえ！！

癪に障るがあのクズは俺様が相手してやる！

だからテメエは後ろにいるガキ連れて早く行け！！」

伊吹「師匠……すいません、此処は任せます！」

ゼクス「おう、任された！」

俺は後ろに隠れていた少年を抱えて全力で走った

ゼクス side

ゼクス「行ったか……さてと……」

馬鹿弟子を見送った後、俺様は氣に入らねえ目付きをした糞野郎……
…滝川秀鬼を睨み付ける

秀鬼「なんだ…オメエが相手してくれんのか？

いいぜえ…俺の『飢え』を満たせるなら誰でもいい！！

さあ、早く殺り会おうぜエエエ！！！」

ゼクス「なるほどな……アイツでなくても好きにはなれねえなありや……フラム！」

フラム「ホーイ、殺っちゃう？ マスター♪」

ゼクス「おうよ、フラムベルク！」

ユニゾン・イン！！」

融合機フラムベルクとユニゾンした今の俺様の姿は目と髪が赤くなり、全身に炎が身に纏った様なバリアジャケットの格好になる
そして右手には片刃の片手剣フランベルジュが握られていた

ゼクス「光栄に思えよ、男嫌いの俺様が相手してやるんだからな！」

秀鬼「ケケケ……ビルゾルデイ、セットアップ」

あっちもデバイスを取り出しバリアジャケットを展開させる

奴のバリアジャケットの姿は上下共に白のコートにジーンズという
気持ちワリイ姿だ

んで、野郎の右手にはチェーンソーの様な刃をした大剣を持っている

ゼクス「随分と悪趣味な格好と武器だなオイ…」

秀鬼「白には結構こだわってるんだぜ？」

なんせ、斬りつけた相手の赤い返り血が目立ってるんだからなあ」

ゼクス「ケツ、本当に悪趣味な切り裂きジャックだなテメエは…」

良いぜ、来な!!」

秀鬼「ケケケ……さあ、派手に殺り合おうぜええええ!!」

怒声に近い声を上げて野郎が猛烈な勢いで近づいてきた

伊吹side

師匠の基からだいぶ離れて、丁度丘の中間地点に辿りついた時には
猛烈な爆音が響いた

伊吹「派手にやってるな……まあ、あの師匠があんなイカレ野郎に負けるなんて微塵もねえけど…」

そう言って俺は抱えている少年を一旦降ろして、同じ目線になる様に座って話しかける

伊吹「なあ、君の名前は何て言うのかな？」

いつまでも名前を知らないというのもなんなのでとりあえず聞いてみた

ラムダ「……ラムダ」

伊吹「ラムダ……か
いい名前だな」

ラムダ「……お兄ちゃんは？」

伊吹「俺は龍崎伊吹、伊吹って呼んでくれ」

ラムダ「イブキお兄ちゃん…」

伊吹「うん…なあラムダ、どうして此処に来たんだい？」

少年——ラムダは、黙って丘の山頂を指に指した

伊吹「あの山頂に行きたかったの？」

ラムダ「…うん、大事な物があるから…取りに行かなきゃいけない…」

伊吹「（この子…まさかファルシオンを？…でも、どうして…）」

伊吹「イブキお兄ちゃんは…どうして此処に居るの？」

伊吹「お仕事でちょっとね…ラムダと同じ山頂を目指してたんだ」

ラムダ「お兄ちゃんも、あっちに行くの？」

伊吹「ああ、一緒に行くか？
その足じゃ辛いだろ」

ラムダ「…いいの？」

伊吹「勿論、一緒に行こうぜ、ラムダ！」

俺は右手を差し出し、ラムダは黙って右手を握る

伊吹「よし、そうと決まれば、とつとこの丘をひとつ飛びだ！
捕まってるラムダ！」

ラムダは「うん」と言って俺の腰をしがみつく

伊吹「朱羅、約束通りオメーを先に使ってやる」

《有り難き幸せで御座います！お館様~~~~！！！！》

伊吹「ウルセーな！早くしろ！！」

セツトアップ！」

《はっ！》

腰にぶら下げてあるリングチェーンから赤い宝石が埋め込まれている指輪―朱羅を取り出し右の中指につけて発動させ、光につつまれる

光が消えた時には、俺の姿は赤い鉢巻きを頭に縛って、上が胸元が開いてある赤いジャケットと小手、下は白のズボンといった姿のバリアジャケットに変わる

そして、両手には三又の二つの槍が握られていた

そのまま俺はラムダを抱えながら丘の山頂に向かって飛び出した

ゼクス side

秀鬼「ヒヤヒヤヒヤ」

最高だぜオマエ！さあ、もっと登り詰めようぜ～～～～！！！！！！」

ゼクス「ルセーよタコ！

野郎にんな事言われても嬉しくねーよ！！！」

フラム『マスター、とつとこのキモイ野郎を殺っちゃいましょうよ』

ゼクス「その物騒な発言は俺様も賛同してーけどよ」

それやるとなると後が面倒なんだよ！！！」

たくっ、魔力量とか大した事ねえ野郎だが、コイツの斬撃は無茶苦茶重いし、武器形状がチェーンソーだから刃の回る音がウルセーし、

スッゲー苛つく野郎だぜ

全く、伊吹の奴が嫌う訳だぜこりゃ

秀鬼「オラァァァ!!」

そのまま野郎が俺様に向かって突っ込んで来やがった

しかも今度は奴の左手の機械腕オートメイルに搭載されてるとんでもねえ銃機を
乱射しながらだ

ゼクス「ちっ!! フェン!!」

フェン「了解した!

アイシクルウォール!」

俺様のもう一騎のユニゾンデバイス『フェンシウス』が作り出した
氷の壁で銃弾を弾く

たくっ、質量武器を使って良いのは俺様だけだっつーの!!

フェン「いや、普通は

駄目だろう」

ゼクス「人の心を勝手に読むなよフェン
フラム、炎熱上げるぞ！」

フラム『了解で〜す♪炎熱上昇!!』

俺様はフランベルジュを逆手に持ち、炎を灯らせる

ゼクス「ふっ飛びな!!
サーベイジファング!!」

そのまま地面を削るように剣を突き刺し、自分の周りに巨大な炎を
発生させる

秀鬼「ぐおおおおお」

奴は突然現れた巨大な炎に焼かれて真上に吹っ飛ぶ

ゼクス「オラ、もういつちよいくぞ
ナパームデス!!」

その後すぐに全身に炎を纏い、滝川に向かって体当たりを咬ます

勿論、空中に飛ばされた奴は当然避ける事が出来ず、モロに喰い、
岩壁に激突する

ゼクス「殺ったか？」

フラム『非殺傷だから死んでないよ〜♪』

フェン「そういう問題じゃ無いんだが……見ろ！」

滝川を吹っ飛ばした方向を見ると、バリアジャケットこそボロボロだが未だに戦闘体制でいやがる

ただ、ダメージがデかい為に、少し振らついている

秀鬼「ケケケ……今のは効いたぜ……もっとだ……もっと殺り合おうぜええ、なあ!!」

ゼクス「たくっ! どんだけタフな野郎だアイツは!」

フラム『ぶ〜、コイツしつこすぎ!!』

マスター、此処はアレで吹っ飛ばしましょう』

フェン「待て、此処で『アレ』を使ったら……」

ゼクス「フラムに賛同だ! こい、フェン!!」

フェン「つゝゝわかった！もうこの際ヤケだ！！」

フラム『お一人様、いらっしやい♪』

ゼクス「ヴォーパルコフィン、セットアップ！

フェンシウス！

ユニゾン・イン！

コード…ダブル・ユニゾン！！」

フラ・フェ「おう！！」

そう叫んだと同時にフラムとユニゾンしたままの状態でフェンとユニゾンした

今の俺様の姿は右目が赤、左目が青でバリアジャケットも右側が炎を彩った赤に左側は氷を彩った青のアシンメトリーで髪は殆どが青で髪の前っちょが赤になっている

そして、右手にフランベルジュ、左手には氷の剣のストレージデバイス『ヴォーパルコフィン』が握られている

これが俺様——ゼクス・クォールズの本気形態、ダブル・ユニゾンである

ゼクス「一瞬だ…一瞬で片を着けてやる」

秀鬼「なんだ…何をしてくれるんだ？」

ゼクス「まあそう焦るなよ、黙ってみている…アイシクルバインド！」

瞬間、奴は突然現れた氷壁に囲まれ、身動きが取れなくなった

ゼクス「良く見てろよ

フラム、フェン、充電開始だ！」

フラム『オーケー、炎熱上昇！』

フェン『了解した、氷結上昇！』

二つの剣に赤と青の光が輝き、フランベルジュには炎が灯り、ヴォーパルコフィンには冷気が纏う

フラム『出力はどんくらい上げる？』

ゼクス「この程度の野郎なら40%で充分だ！」

フェン『了解、出力レベルを40%で固定！』

ゼクス「よし、それじゃスパークさせるぞ！
良いな！」

フラム『いつでも良いよ♪』

フェン『思いっきりやれ！』

ゼクス「おっしゃ！
いくぜ、俺様だけが使える極大消滅砲撃魔法！！」

二つの剣を頭上に上げ、魔力をスパークさせる
その瞬間、奴に駆けたバインドが切れかける
だが、もうオセエ！

ゼクス「消し飛べ！
極大消滅！！ガンマレイメドローア！！」

フランベルジュとヴォーパルコフィン、二つの剣を一斉に振り下ろした刹那、超巨大な紫色の砲撃が滝川に向かって放たれた

秀鬼「ぐっ！グオオオアアア！！！！」

そしてそのまま野郎に直撃し空の彼方まで吹っ飛ばした

光が収まって時には、先ほどまであった岩壁は微塵もなく、巨大な穴と地面が抉られた跡があった

ゼクス「ちよいと化かしやり過ぎたか？」

フラム『さっすがマスター♪』

見事な破壊っぷり♪』

フェン『…もう少し威力を抑えた方がよかったらのでは？』

ゼクス「問題ねえだろ？

非殺傷だからな」

そう言って俺様は懐のポケットからタバコを取り出し一服しながら空を見上げた

s i d e o u t

伊吹「とぅうちやく♪」

どうだった、少しだけの空の旅は？」

ラムダ「うん、凄く気持ち良かった♪」

ラムダは笑顔でそう言った…うん、やっぱり子どもは笑顔でなきやな

まあ、なんだかんだで山頂に到着した訳だが……

伊吹「（此処にファルシオンが…でもソレらしい物が見当たらないな……）」

見た所、剣が納めてあるような物は見られないし、ゲートキーパーも見当たらない

伊吹「（ハズレ……か？
けど結界も有ったし…それに、只ならない気配がする…）」

ラムダ「ねえ、アレは？」

伊吹「ん？」

ラムダが指を指した方向を良く見ると五式の獣が象った像が一つ携わっていた

伊吹「（何だアレは…」

あの像から只ならない魔力を感じる…もしかして！）」

俺は像の近くまで行き、ラムダもその後に着いて行く

伊吹「見た所変わった像だが、やはりこの像から魔力を感じる…恐らくこの中に聖剣が…！！オイ、待てラムダ！！」

その時、ラムダが不意に像を触った瞬間、目映い光が放たれた

伊吹「うっ、何だ！眩しい！」

突然の出来事に思わず目を瞑る

その時、像にピシリとヒビがはいり崩れる

その中から光輝く剣が目についた

伊吹「これが…聖剣ファルシオン…300年以上経っているのに刃こぼれ処か錆び一つ無い…」

？「どうやら、封印が解かれたみたいだな？」

伊吹「っ！！誰だ!？」

突然、上空から声がしたかと思えば背後から気配がした

振り向くと、そこには金の鬣をした黒い獅子と黄色の体に銀の翼の鷹、赤い体の鋸鰻に黒の体に金の角がある牛、そして、白い虎が目の前にいた

そして、黒獅子が前に出て念話で語りかける

ソル「我はソル、問おう…封印を解いたのはその子どもか？」

伊吹「ラムダをどうする気だ!」

ソル「別に悪い様にはしない…武器を下ろせ」

《お館様！！これは敵の策かもしれませぬ！！
信用しては……》

伊吹「……………わかった」

《！？お館様！！？何を考えて…》

伊吹「朱羅…頼む…」

《お館様がそう仰るのなら……》

朱羅を言い聞かせ、デバイスを解除する

ラムダは鞘に納めた聖剣を両手で抱える様に持ち、ソルに近づく

ソル「なるほど……その眼を見れば見る程、我が主に似ている…霧
囲気も、身を包むその優しさも…主にそっくりだ…」

伊吹「（主……もしかして、アイツらの主って）」

ラムダ「この剣…貰って良いかな？
どうしても、この剣を必要なんだ…」

ソル「…うむ、構わん、それは元々お主の物、誰も異論は有るまい」

ラムダ「…ありがとう」

ソル「だが、まだその剣を振るう時ではない…その人間」

伊吹「なんだ…それと、俺は龍崎伊吹って名前があるんだ、そっちで呼んでくれ」

ソル「龍崎伊吹…暫くはこの剣と少年を預ける」

伊吹「良いのか？今日会った人間をそう簡単に信じて？」

ソル「お主には邪気や悪意は感じぬ、信用出来るに値する…それに」

伊吹「…それに？」

ソル「お主とて、初めて会った我の言葉を迷いなく信用した…それ」

だけだ」

伊吹「……わかった
お前達の頼み、確かに聞いたぜ」

ソル「我らはまだこの地を離れる訳にはいかない…頼んだぞ」

ソルはそのまま後ろの獣達と一緒に天へと駆け上がっていった…

とりあえず任務完了………かな？

伊吹「なあラムダ？

俺と一緒に暮らすか？」

ラムダ「……うん！」

この少年……ラムダとの出会いは、この物語の鍵とう事はまだ俺は知らない

ファラン side

ファラン「はあ…はあ…」

黒騎士「流石は心剣使い、中々の腕だ」

どれくらい打ち合っただろうか…バリアジャケットもボロボロになり、魔力も殆どない

黒騎士も身に着けている鎧が同じくらいボロボロになっている

黒騎士「ダークランサー…ファイア…！」

奴の周りには槍状の黒い魔力弾を五つ飛ばす

ファラン「吸い高まれ！ブラッドゲイン…！」

心剣を盾にする様に持ち、射ってきた魔力弾を受ける

だが、魔力弾は剣に吸い込まれる様に消えていった

黒騎士「ほう、魔力弾を吸収する能力か…」

その後すぐに心剣を振り上げると紅い魔力光が心剣に宿る

フアラン「喰らえ！紅牙斬翔剣！！（こうがざんしょうけん）」

無数の紅い斬撃を飛ばし、それに続く様に黒騎士に接近する

黒騎士「くっ！！」

黒騎士はそのまま斬撃を浴び、接近した俺に斬りつけられ、俺は黒騎士の背後を取った後すぐに再び黒騎士を斬り、そのまま奴は片膝をついた

フアラン「はあ……はあ……くっ！」

フェイト「フアラン先輩！」

肉体が限界に達したのか、俺も片膝をつき右手に握られていた心剣も光となって消えた

その後フェイトが声を上げこっちに近づき、他の奴等も跡に続いて来る

コウ「勝負あり、か…満足したかい黒騎士」

黒騎士「…ああ、充分だ」

黒騎士は立ち上がり俺を睨み付ける

黒騎士「ファラン・グラフィット…中々の腕だが、まだ心剣の力を完全に引き出せていないみたいだな？」

ファラン「……………」

黒騎士「次に会う時には、もう少し力を引き出せる様になって欲しいものだな…去らばだ」

ファラン「!?! 待て! お前は一体…」

黒騎士は答える事なく、転移魔法でこの場を去る

コウ「さてと…ヴァン、いつまで寝ているつもりだい? 置いていくよ?」

ヴァン「ふわぁ…ん? ……もう終わったのか?」

コウ「君が爆睡している間にね」

ヴァン「ああん！ルセーよ、んじゃ先に戻って寝るから転移魔法よろしく」

コウは「やれやれ」と言いながら魔法陣を展開する

コウ「処でジン、君はいつまで其処の偽善者達と一緒に居る気だい？
どう考えても、君には居心地が悪い所だろ？」

ジン「……………貴様には関係ない」

コウ「関係なくないさ
これでも君を心配しているんだよ」

ジン「なら要らない心配だな」

コウ「はたしてそうかな？」

『君が多くの人間を殺した暗殺者』 っと言っても、彼等は今までの様に接してくれると思うかい？」

その瞬間、なのは達は驚いた顔をしてジンを見た

俺やリフィアも今はなのは達と同じ反応をしてるだろうが、ジンの反応は至って変わりが無い

コウ「おや？その様子ではジンから何も聞かされないみたいだね
では教えよう。僕とジンは……」

かつて『リュクロス』という犯罪組織に育てられた『道具』さ」

――舞台裏コーナー――

ゼクス「オイオイオイオイ何でこんな形で終わるんだよ？

ただでさえ、あの作者は更新速度が遅いっつーのにどんだけだよ！
？」

ファラン「確かにそうですが、何でもここに来てスランプ気味らしくて……現実の時間でも忙しい日々みたいです……」

ゼクス「ケッ、だらしねえ野郎だ！

んなもん気合いで乗り切れ！？」

ファラン「んな無茶苦茶な……し」

伊吹「……おい、早く始めるぞ、今日もゲストが来てるんだからな」

ファラン「あ……ああ、って伊吹……なんでいきなり神威をセットアップしてるんだ？」

伊吹「……気にするな、続けろ」

ファラン「わっ……わかった（何か今日の伊吹……怖いな）」

ゼクス「んじゃ紹介すっぞー」

『魔法少女リリカルなのは七つの大罪』

から、珍獣主人公こと神童一真とその珍獣に使われてる可哀想なデバイスの神無ちゃんです」

一真「誰が珍獣だゴルァー」

神無《事実でしょ？何怒ってるのよ》

一真「嬉しい！！神無、セットアップ！
ついでに【罪】解放！！」

ファラン「オイオイ、あいつまさか……し」

ゼクス「やる気だな……獄龍波を、しかも【罪】解放状態だから威力はダンチだろうよ」

一真「死にやがれ屑共が！獄龍波！！」

一真は獄龍波を放った！！

伊吹「……二人とも、下がってろ」

ファラン「伊吹……何をするきだ？」

伊吹「こうするんだ……エターナル・インフィニティ！！」

伊吹は、神威を思いっきり振り下ろすと光の壁が姿を現した

そして、あろう事か獄龍波が光の壁に当たった瞬間、獄龍波を打ち消したのだ

一真「バツ……馬鹿な!!」

【罪】解放状態の獄龍波を打ち消しただと!!」

神無《それだけじゃ無いわよ!!」

伊吹の魔力数値が上昇……嘘!!」測定不能!!」》

一真「ハァ!？」

伊吹「……覚悟しろ」

伊吹は常人ではあり得ないスピードで一真に近づき、手刀で神無を叩き落とす

伊吹「……いくぞ、神威」

神威《良いぜ、派手に殺りますか!!」》

伊吹「魔神剣! 裂壊桜! クライムハザード! 雷斬衝! 崩雷殺! 凶斬り! 八刀一閃! 魔王炎撃波! 裂空刃! 葬刃! メテオレイン! 天浪滅

牙！超究武神霸斬！！」

一真「ギャアアアア！！！！」

ファラン「うわぁ……見事なまでの鬼連撃……」

ゼクス「神無ちゃん、よほどの事が無い限りアイツは彼処までキレないけど……あの珍獣にしたのよ？」

神無《あの馬鹿はよりにもよってリーシャさんを斬ろうとしたらしくて……》

ファラン「原因ソレだろ！！」

ゼクス「良く見ておけよ神無ちゃん、人の女を斬ろうとした哀れな珍獣の最後を」

神無《ええ……しっかり記録しておくわ》

伊吹「終わらせてやる！！全てを斬りさく！！
獣破！！轟衝斬！！」

一真「ぐわぁぁぁぁ！！！！」

伊吹「まだまだ！煌めく刃は勝利の証！！白夜殲滅剣！！」

一真「まっ待て！もう……ギャアアアア！！！！」

伊吹「終わりだ！遠慮はしない………決めてやる！！
斬空刃…無塵衝オオオオ！！！」

一真「み……認めんぞオオオオ！！！！！」

次々と繰り出された伊吹の技に一真は地に伏せた

伊吹「ふん……さて、とつとコメントを返すぞ」

TODAさんへ

伊吹「隆浩達も辛い修行生活を送ってたんだな…」

ファラン「今ならあの二人と語り合えそうだな」

ゼクス「あれの何処が辛い修行だ！」

あんなのまだ序ノ口だぞ？」

ファラン「どこがだ!？」

神無《毒茸は流石に同情するわね…一真だったら即死だもの…》

ファラン「処で伊吹…番外編で隆浩が出るって本当か？」

伊吹「ああ、本人も土下座してお願いしてきたからな……」

ゼクス「あのD A★F O Xが土下座するとはな…よほどの事だろうな」

U. Tさんへ

ゼクス「そーいや、家の馬鹿弟子共があっちで世話になったみたいだな…」

伊吹「ん…ああ、まあな…」

ファラン「中々楽しかったぞ」

神無《そう、良かったわね…こっちは一真が酷い目にあう以外は何も無かったし》

ファラン「リーシャがあげた花は誰にやるんだろうな？」

伊吹「さあな……それはクラウドが決める事だ」

村正さんへ

ファラン「相当喜んでたな……あの二人は！」

神無《二人共アレが送られて来てかは毎日使っているわよ

…特にアリスが……」

伊吹「ん？どうした」

神無《いえ…何でも無いわ》

ゼクス「気になるな」

ま…必要以上に女性の秘密を知りたがると嫌われるから止めるわ」

一真「その前にテメェら全員抹殺してやんよ！！？」

ゼクス「あつ生きてたんだ、あのまま一線越えちまえば良かったのに…」

一真「ルセー！！それより、俺に茸を送り付けたあの糞女は何処だ！！？」

伊吹「糞女……？」↑プツン

ファラン「それって…まさか……？」

一真「アアン！？リーシャに決まってんだろ！！？」

伊吹「……………」↑プツン！

一真「あの糞ミソカス女あ!!
見つけ次第に獄龍波をぶちかましてやんよ!!!!?」

伊吹「……………」↑ブツチン!!!!?

ファラン「…死んだな」

ゼクス「……………ああ」

……………そうね
神無

一真「ああ?何言って……………る…んだ…」

一真が後ろを振り向くと……………一真の時間が止まった

伊吹「……………ふん!」

一真「ふござお!」

伊吹は一真に鳩尾を蹴り、怯んだ所を首根っこを掴まれ別の部屋に連れていかれる

そして……

ドカツ！ バキッ！ グシャ！ザシュ！ベコッ！

ゼクス「……さて、次のコメントを返すぞ」

Nakiさんへ

フアラン「この人は初めての方だな」

ゼクス「カオスになったら…か、考えただけで恐ろしいな」

伊吹「フハハハハ、

見ろ！人がゴミのようだリュシエール！」

リュシ《ええ！ゴミは消し飛ばすのが常識ですわ！》

一真「誰がゴミだー」

リュシ《アラ、生意気にもまだ生きていますわねえ……マスター！》

伊吹「おう！天光満つる所我はあり、黄泉よみの門開く所汝あり。出でよ、神の雷……」

一真「！！何！それは……！」

伊吹「これで最後だ！
インディグネイション！！」

一真「そんな……そんな馬鹿な……！」

グオオオアアア！！！！」

隣の部屋から超巨大な雷が落ちた音がした

神無《……自業自得とは言え、流石に命の心配はした方がいいのかしら！》

伊吹「虚無の彼方に儚く散れ……ラスト・ヴァニッシャー！！」

一真「まつ待て!!それは流石に死ぬ……………ギャアアア!!
!!腕が!足がああああ!!!!!!」

ファラン「……その前に無事に帰れるのか?」

ゼクス「いや、もう手遅れだろ?なんだか伊吹の事を某種の優柔不断な赤服野郎だって言うが、あれじゃ腹黒版の某スーパーコーディネーターだろアレ?」

神無《そんな事より、こんなアドバイスが来てるけど…》

ゼクス「人名は一度出した奴は一文字で良い…か。確かに、スカリエッデイみたいな無駄に名前の長いのは面倒だからな」

ファ「そうですね…次回からそうしましょうか」

神無《既に貴方がなってるけど…》

ゼクス「さて、伊吹のお仕置きが終わるまで、ファランの希少機能と俺様が使った砲撃魔法の説明をするぞ

まず、ファランからだ」

心剣招来
しんけんしょうらい

ファラン・グラフィートの希少機能
レアスキル

自身の心を剣として具現化させる能力

ファランの心が具現化した剣の名前は『紅剣ブラッドゲイン』

紅い色をした刃が目立った心剣で、能力は相手が放った魔力弾や砲撃を吸収し、自分の力に変える。

ただし、相手から直接魔力を吸収する事はできない

この希少機能レアスキルは、ファランに心を許した者ならば、ファランがその者の心を具現化させ、心剣にする事が出来る。（ただし魔導士限定）だが、当人は相手の心を武器として戦う事はしたくないうえ、能力

自体は、よほどの事が無い限り発動する事はない

神無《この能力は少しチートすぎない？》

ファ「砲撃の吸収は良くてなのはのディバインバスター位で、流石にスターライトブレイカーは吸収出来ないがな」

神無《それだけでもチートだと思うけど…》

ゼクス「次に俺様の砲撃魔法を教えるぜ！」

極大消滅砲撃魔法

ガンマレイメドローア

威力——SSS以上

射程——SSSS

発動速度――D～F

追加効果――物質消滅

ゼクスが放つ最強砲撃魔法

単純な破壊力ならなのはのスターライトブレイカーを遥かに凌駕する

炎と氷といった正と負の魔力エネルギーをスパークさせる事で、あらゆる物質を分子レベルにまで消滅する力をゼクスはこれに眼をつけ、砲撃魔法として組み込んだ

勿論、殺傷設定でコレを撃てば骨の一片も残らない為、上層部から禁止魔法とされているが、当人は平然と使っている（理由は非殺傷だからと自分がその上層部の人間だから）↑本人談

正と負の魔力エネルギーの出力レベルを全く同じしなければ暴発し、良くて魔力エンプティ、最悪の場合は自身の存在を消滅しかねないのでサポートするフラムベルクとフェンシウスの存在は必要不可欠で、ダブル・ユニゾン出来るゼクスのみこの砲撃が撃てる

神無《ちょっと！これどんだけよ》

ゼクス「それが俺様クオリティ」↑親指をビシッ！

ファ「捨てちまえ！そんなチートクオリティ！！」

神無《獄龍波より質が悪いわよアレは！》

ゼクス「？似たようなもんだろ？」

ファ「いや、師匠の砲撃が質が悪いですから」

伊吹「いやゝスッキリしたゝ♪」

龍崎伊吹が現れた！

伊吹「ドラ●エ！！」

ファ「それより一真はどうした？」

伊吹「彼処だけど？」

伊吹が指を指した方向を見ると、黒焦げ十全身キズだらけの一真が横たわっていた

一真「ご免なさいご免なさいご免なさいご免なさいご免なさいご免なさい
なさいゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメン
ナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナ……」

ファ「うわぁ……………奈落し」

ゼクス「相当まいってやがるなアレ……」

神無「一真……なんと哀れな姿に……」

伊吹「やっぱ最後にブルーアースまでの派生魔法をやったのはまず
ったか？」

ファ「原因ソレだろ絶対……!？」

ゼクス「んじゃ、とつと次回予告しますか」

―次回予告―

ファ「語られるはジンの過去…それはなのは達には辛すぎる衝撃的な物だった…」

伊吹「ジンはその後自ら仲間達と距離をとり、壁を作ってしまう」

ゼクス「そしてティアナも、自分の力を認めさせる為に無茶なトレーニングを続けていく……」

神無《次回、魔法少女リリカルなのはStrikerS―聖王の騎士―第八話…少年の過去、少女の思い》

伊・ファ・ゼ・神「《次回に向かって…スタンバイ・レディ!》」

一真「ご免なさいご免なさいゴメンナサイゴメンナサイ…」

オマケ……

伊吹「って次回予告したは良いけど、番外編を二話位書く予定だから本編は進まないんだよな」

ファ「そうなのか？」

伊吹「ついでに言うとな師匠、次回の本編が終わったら暫くは出番は無いってよ」

ゼクス「（□；）！！」

伊吹「いや顔文字で表現されても……し」

第七話：師匠×少年×騎士の剣・後編（後書き）

村正さん、一真と神無の出演有難うございます！

そしてすいませんでしたああああ（土下座）

もし至らなかった所がありましたら遠慮なく言っして下さい

そしてこれからも応援宜しくお願いします！

でわ！

番外編第一話..とある狐の恋悩み相談(前書き)

遅くなりました

今回はある小説のキャラが特別出演しています

上手く出来ているかは不安ですが読んでくれると嬉しいです！

それでは番外編第一話、始まります

番外編第一話…とある狐の恋悩み相談

俺、龍崎伊吹は、ミットの自宅にて、リーシャ、ファランの三人で一人の客人の相談を受けている

伊吹「それで隆浩、俺に相談って一体何だよ？」

隆浩「いやあ……その…あの…」

この少年―阿部隆浩は

囑託魔導士で、あの大陰陽師、安倍清明の子孫である

こいつに初めて会った時は武装隊にいた頃に担当していたテロ組織のアジトを潰す際に出会った

しかもあの時は右手にロケラン、左手にマシンガンとその他諸々の質量武器をしこたま使っていた事は今でも覚えている

こいつの事で

詳しく知りたい読者は

『なのはSS・freedom』という小説を読む事をオススメする

……さて、話が脱線してしまったが…そんな彼が俺の自宅に訪問して今に至る

伊吹「…………つまり、弟の晶彦やその他の連中から『とつとはやてに告白しろこのヘタレ駄狐チビ助野郎』と言われ腹を立てて『其処まで言うなら告白してやろうじゃねえか!』つと大見得きつて言ったのは良いものの、いざ行かんとした矢先にどう告白すれば良いのか分らず、結局俺の家に来たと…」

隆浩「……はい、そうです

どうかオイラに策を下さい伊吹の旦那あああ!!」

うわぁ…見事なまでの綺麗な土下座…相当プライドを捨てて来てるな!

伊吹「まあ、別に構わないが参考になるか分からないぞ?それに、俺以外にもお前の知り合いに彼女持ちの奴くらい居るだろ?」

隆浩「おいらの知り合いはフラグ乱立しまくってる奴やヘタレばかりで、奴等じゃあ参考の『さ』の字にもならないんすよ!」

ファ「そっ…そうなのか?」

隆浩「ソーナンス!!」

ファ「ポケ●ン!!」

隆浩「だから、惚れた女一人を一途に愛し守ると誓った伊吹の旦那なら相談出来ると振んで馳せ参じました!」

伊吹「なっ…なるほど」

フラグ乱立する奴は……まあ、聞いた話はあるがヘタレは人の事言えないだろ隆浩よ」

——隆浩side

何を仰います伊吹の旦那！

おいらはヘタレじゃありませんよ

ただ、人より少し臆病なだけです

ファ「それを世間一般ではヘタレと言うんだろうが！！」

隆浩「万年モテ期な執務管なアンタに言われたくねえわヴォケがあー！！」

ファ「だから！

それは誤解だって言ってるだろう！！」

隆浩「何が誤解だ!!」

本局の女性局員や執務管の殆どがテメエのファンクラブの会員だつて伊吹殿から聞いたぞ!!」

ファ「なんだよソレ!

伊吹!でたらめを教えるな!!」

伊吹「残念ながら事実だ。

それにオメエ、中学の時にだって美人な先輩や後輩にモテモテだったじゃねえかよ」

そう言われてため息をついて黙ってしまったファラン殿

おいらだつて学校で女性陣に告られる処か、追いかけられた事だつて無いのに……全く羨まし……じゃなくて憎たらしい奴め!!

何時の日か奴を悪・即・斬の名の下に斬り刻んでくれる!!

伊吹「まあ、この際ファランのモテ期なんて関係ない!!」

ファ「なっ!!」

リー「ですわね

今は隆浩君にはやてさんを告白する策を考えなくては!!」

ファ「リーシャさんまで……」

肩を落として沈んでいるファラン殿を無視して、伊吹殿とリーシャ

さんは顎を手にしたせて首を捻りながら考えている

伊吹「うゝん……あっ！　そういや隆浩、お前にプレゼント用にあげた真珠のネックレス、あれまだ渡してなかったな？」

（※真珠のネックレスについては本編三話の舞台裏コーナーにて参照）

隆浩「……………テへ☆」

伊吹「やっぱり渡してないだろお前！」

隆浩「スイヤセンデシタアアア……！！！」

伊吹「いや、土下座されても！」

んゝゝこりや告白以前にプレゼントを渡す事を考えないとな」

リー「でしたら、はやてさんをデートに誘うのはどうでしょうか？」

リー「シャさんのその一言で私たちの一つの思考がよぎった

デート？

誘う？

おいらが？

はやてに？

伊吹「良いなそれ！」

ファ「確かに…それならプレゼントを渡す機会があるし…」

リー「上手くいけば告白に繋がるかもしれませんわ♪」

隆浩「無理無理無理ムリムリムリムリ！ぜってームリだって！？
大体、なんでおいらがはやてにデートを誘わなきゃならんだ！？」

伊吹「あのなあゝやる前から諦める様な事を言うなあ！
…いいか隆浩よく聞け！只でさえ歳の近い男性と付き合った事が
微塵と言っても良いくらい無いあの狸娘が、遠回しな発言で気持ち
が伝わると思うか！？」

隆浩「断じて無い！」

おいらは伊吹殿の質問を即答した

……今遠くから「誰が狸娘じゃー！」と声が聞こえた気がしたが幻
聴だという事にしよう

伊吹「もし、この機会を逃せば二度と告白のチャンスが無いかもし

れないんだ！

それに、下手したらお前より先に晶彦が彼女持ちになるかもしれないし、最悪結婚まで弟に遅れをとる事だってあるんだぞ！！

兄としてそれはどう思っているんだ隆浩！」

隆浩「そっ……それは………うう…嫌だああ！！晶彦！そんな○キ○リを見下す様な目でおいらを置いて行かないでくれえええ！！」

おいらの脳内で成長した晶彦が見知らぬ女を連れておいらを見下した様な目で見た後、何処かに行ってしまうというエピソードが描かれてしまい、絶叫してしまう

しかも、脳内で描かれた晶彦はおいらより身長がデかいというオマケ付き……生意気な！

伊吹「そうなりたくなかったら、今から課せる三つの課題を言い渡す。

一つは『はやてをデートに誘う』、コレが出来なきゃ話にならない。

二つ目は『はやてにプレゼントを渡す』事だ。だが、わかっていると思うが、ただ渡せば良いという訳ではない！

古典的な前提条件で言えば綺麗な夜景が見える所で二人きりになったら渡してみたらどうだろな

後はそのプレゼントをお前がはやてに着けてやるんだ」

隆浩「なっ…なるほど…」

伊吹「そして、最後に三つ目の『はやてに告白する』事だが……………」

なにやら伊吹殿はおいらを見つめながら黙ってしまった…………何々、
一体何だよ？

伊吹「はっきり言ってこればかりは直接アイツの目を逸らさず見て、
『好きだ、愛している、おいらと付き合ってください』って言う以外
俺から言える事は無い！」

隆浩「ハァ！？それだけかよ！」

伊吹「その『それだけ』を今まで一度も本気で実行してなかったお
前が言える事なのか！」

うぐっ！それを言われると何も言えない…

伊吹「まあ、他に方法があるなら…『後ろからギュッと抱きしめて
耳元で低い声で『好きだよ』って言えば一発なんだが…………お前の性
格上、多分…というかゼツテ無理に近いんだが…………出来るか？」

おいらがその内容を想像したら、顔から火が出てるんじゃないかっ
て言うくらい熱くなるのがわかった

確かに…効果はあると思うが…ソレをやると精神補正上、おいらが危うい

伊吹「とにかく、俺から言える事はそれだけだ

デート場所はどうするか考えているか？」

隆浩「……………」

伊吹「考えてねえなこりゃ……ほら、ミットで人気のある遊園地のチケツトだ！」

隆浩「えっ！良いんですか！貰って」

伊吹「こうでもしねえといつまで経ってもデートに誘えないだろ？あと、その後3日が期限だから今日中に誘えよ！」

隆浩「みつ…3日あー！！」

ちよっ！！いきなり過ぎです伊吹殿！

それに、アイツだって仕事があるかも…

伊吹「それに関しては問題無い！

その日はやては1日有給休暇だから♪」

隆浩「……ほっ…」

伊吹「デート当日はお前がリードしろよ」

あと最後に言っておく事がある」

突然、真剣な眼差しで伊吹殿はおいらを睨む

伊吹「後悔はするな」

どうせするなら言わないで後悔するより、言ってから後悔しろ」

隆浩「??? どう言う事っすか」

伊吹「ようは気持ちを言わないで一生後悔するより、気持ちを言っ
てフラレてから後悔しろって事だ!」

隆浩「フラレる事前提っすか!?!」

伊吹「必ずアイツが『はい』と答える訳ないだろ」

もしかすると『ゴメンナサイ』って言われるかもしれないからな」

うう…ソレを言われると告白する勇気が……

伊吹「けど、お前だってはやてが好きだって事は自覚してんだろ?
だったら簡単だ、その好きだって気持ちをはやて向かってぶつけ
れば良いんだ」

一回で伝わらなかったら十回、十回で伝わらなかったら百回、百回で伝わらなかったら千回伝えろ!!

『オイラが愛した女は八神はやて只一人だ!!』ってな!」

隆浩「っ!!!」?

伊吹「わかったらさっさと行きな! 時間は待ってちゃくれねえぞ。」

隆浩「ああ、アドバイス真に有難うございました!」

おいらは伊吹殿達にお礼を言って、龍崎家を跡にした

伊吹 side

隆浩を見送った後、俺はソファ―に座り一息つく

リーシャ「隆浩君の恋、実るとよいですね♪」

伊吹「そうだな……言いたい事は言ったし、後はアイツ次第だな」

俺はリーシャが淹れた紅茶を飲む

ファラン「そういや伊吹、前にも似たような相談をされたって話に聞いたが…」

伊吹「ああ…確か2週間くらい前だったかな」

あの時はヴァイスが『どうすればモテモテになれるか』って聞いてきたな！(その時は適当に答えて帰って貰ったが)

伊吹「それ言うならファラン、お前もそろそろ彼女つくれよ」

ファラン「そんな暇が有るわけ無いだろ！」

伊吹「女と仕事の両立くらいしてみせろよ」

ファラン「リーシャさんとデートしたいが為に会議をサボタージュするお前が言うな！」

伊吹「いやあ〜それほどでもございませんよ♪」

ファ「誉めてない!!」

まあそんなんで今回の自宅休暇は狸娘に恋したか弱い子狐の相談だった訳で、実際にアイツらがどうなったかは隆浩の頑張り次第だな
応援してるぜ！隆浩！

―舞台裏コーナー―

伊吹「さて、今回の舞台裏コーナーはこの番外編に特別出演した阿部隆浩と、我がバグキャラ師匠ゼクス・クォールズの対決を送り致します」

フア「なあ……止めた方が良くないか？」

伊吹「気持ちは解らなくないが……もう決まった事だし……」

隆浩「死ねえええバグキャラオヤジイイ！！！！」

隆浩はありったけの暗器（一部暗器に見えない物もあるが……）を乱射した

ゼクス「質量武器でこの俺様に挑むか！笑止！！」

ゼクスもありったけの質量武器を持ち出し、隆浩めがけてぶちかます

ファ「……俺は戦争を見ているのか？」

伊吹「そこはツツコミを入れない方向で…さて、この戦いを見ながらコメントを返しをしますか」

村正さんへ

ファ「一真、頼むから第二段階の【罪】解放状態で来るのは辞めてくれ」

伊吹「しかし、あの抱き枕に肌ツヤ効果があるとは…」

ファ「あの二人限定だろうがな…」

ゼクス「とつととくたばりやがれ駄狐野郎があああ」

隆浩「誰が駄狐野郎だゴルアアアア!!」

Nakiさんへ

伊吹「あの師匠と友達になりたい変わり者……いや、デバイスが
ようとはな」

ファ「しかも、かなり気が合うみたいだから……次回の舞台裏コ
ーナーにはラディとセラフイム(T・N・ver)が来るんだよな
？」

伊吹「ああ……想像しただけでカオスになってきたし」

ファ「しかし、師匠の砲撃は本当に出鱈目だなし」

伊吹「アレはその気になれば島一つは消し飛ばすからな……」

隆浩「ミーティア機動う！！くたばりやがれえええ！！ハイマツトフルバーストオオオオ！！」

ゼクス「なんのお！！」

A・T・フィールド展開！！」

ズドオオオオオン！！！！

ゼクス「ガハハハ！！
どうした！手の内は終いか！！」

隆浩「なんの！まだまだああ！！」

その頃ゼクスと隆浩が戦ってるフィールドは火の海が広がっていた

ファ「だから…何処の戦争をしてるんだあの二人は…」

TOUDAさんへ

伊吹「なあ、うちの師匠と阿部兄弟の師匠が戦ったらどっちが勝つ？」

ファ「考えたくないな……恐らく世界が崩壊するまで戦ってるだろうし……何よりあの二人を会わせてはいけない気がする！」

隆浩「陰陽御劍流奧義！！疾風怒濤！！」

ゼクス「無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄あああ!!!」

U.
Tさんへ

伊吹「安心してクラウド、あの後アイツに大量の椎茸を口に突っ込んで置いたから♪」

「……鬼畜な奴」

伊吹「何言うか！人の女を侮辱する奴は、例え相手がセフィロスだろうと斬り捨てる！！」

ファ「（本気で殺りそうだな…アイツならし）」

伊吹「しかしあのゲームを知っていたとはな…」

ファ「知らない人がいるかもしれないから伏せていたんだが…けど『タイランレイブ』はともかく『ドラゴンインストール』は…」

伊吹「チート過ぎだろうな…しかも『セカンド』や『殺界』なんて使ったら…」

ファ「……………考えたくないな」

伊吹「さて、あの二人の戦いはどうなっているのやら」

ゼクス「はっ！どうしたチビ狐！その程度か？」

隆浩 「なわけねえだろ!？」

それと誰が小さ過ぎて目に入らないミニマムドチビだゴルアアアア
「!!!!!!」

ゼクス「テメエに言っただこのへタレドチビ狐が！」

へタレ呼ばわりされなくなきや、さっさと八神はやてをベッドに押し倒して『自主規制』しやがれ!!」

隆浩 「■△★○▼◎□◆※×÷±—+∞¥℃ なっ
なななななな！
!!!!!!!!!!!!

」

隆浩、突然の言葉に顔がトマトになる

伊吹「師匠……」

「貴方という人は……」

弟子二人も顔を真っ赤にしてかなり呆れている

ゼクス「おんやあゝ未来の大陰陽師様は好きな女に『自主規制』も出来ないんですか？

全く情けない！それで良く大陰陽師になるとかほざいてるよな。ええ」

隆浩「うっうっうっうるせえ！！あああアンタはどどどどうな
んだよ！！」

ゼクス「俺様は経験豊富だからな！良かったらテクを教えやろうか
？」

隆浩「えっ！！」

隆浩は一瞬、ゼクスの言葉に動揺したが：

ゼクス「ウ・ソ♪」

隆浩「テメエエエエ！！！！」

騙されたと知った隆浩は顔を真っ赤にしぶちギレして、フルドライ
ブ形態『月光』になる

隆浩「テオサケル！！ジャウロ・ザケルガ！！エクセレス・ザケル
ガ！！ジガディラス・ウル・ザケルガアア！！」

もはや怒りに任せて次々と雷の大剣や砲撃が放たれた

恐らくそのせいで気づけなかったのだろう

ゼクスが、今まさに極大消滅の砲撃を撃とうとしているのに……

ゼクス「消し飛べ!!」

極大消滅!!ガンマレイメドローア!!」

瞬間、紫色の超巨大な砲撃が無数の雷を消し飛ばし、そのまま隆浩に直撃する

隆浩「ギャアアア!!」

そのまま隆浩は星の彼方まで吹っ飛んだ

ゼクス「阿部隆浩……テメエは確かに強かった…だが、俺様の方がテメエより強かっただけの話だ」

伊吹「何カッコよく閉めようとしてんだよ!」

ファ「あんな事を言って…少しは羞恥心というものを持って下さい
!!」

ゼクス「それより、俺様からあるお知らせがある。心して聞け!」

伊・ファ「スルーされた!!」

ゼクス「この俺様と戦いたい奴を募集する！
ただし、条件は男限定だ！俺様は女とはベッド以外は戦わない主義だからな」

ファ「何とんでも無い案を募集してるんですか！！そして何恥ずかしい事を言ってるんですか！！？」

ゼクス「武器はデバイスだけじゃなく質量武器を持って来ても構わない！

なんなら、この俺様を殺しに来ても良いんだぜ！」

ファ「無視すんなやゴルアアア！！！」

ゼクス「んで、次回なんだが、何でも伊吹とファランが高町達と初めて会う話だったな」

伊吹「ああ、そういうそんな話を書いて作者が言ってたな」

ファ「ゼエ…ゼエ…」

ゼクス「そんじゃ次回に向けて…」

伊・ゼ「スタンバイ・レディ！」

フアラン「だから無視すんなって言ってるだろうがああああああ！！！！」

番外編第一話..とある狐の恋悩み相談(後書き)

ええ、TODAさんいかがでしたでしょうか？

自分なりには頑張った方ですが、悪い所があったら遠慮なく言っ
て下さい

今回の隆浩の特別出演有難うございました。

これからも応援宜しくお願いします！

番外編第二話：初めての出会い、波乱万丈の模擬戦（前書き）

大変お待たせしました！！

少々変な設定になってしまった：けど悔いはない！！……多分^{オイ}

それでは番外編第二話、始まります

番外編第二話：初めての出会い、波乱万丈の模擬戦

これは、二人の青年と三人の少女達が初めて会う物語……

伊吹

「なあ、ファラン」

ファラン

「なんだ？」

伊吹

「やっぱ帰って良いか？」

ファラン

「お前なくし今回の依頼はクロノ提督からのだからちゃんと引き受けるのが義務だろ！」

伊吹

「アイツが一方的に仕事を押し付けたんだろぅが！？」

龍崎伊吹

フアラン・グラフィイト

この当時共に16歳で、今はクロノ・ハラウンに呼び出され、時空管理局本部にて彼のいる部屋に向かっている

フアラン

「それだけ俺達を信頼してるって事だろ？
そうでない奴に仕事なんて与えないし」

伊吹

「だとしても、疲れが溜まって俺達に仕事を押し付けるってどんだけ鬼畜なんだよアイツは！」

フアラン

「まあ…魔導士の人数不足で仕方ないとはいえ、確かに厳しいな…
…」

伊吹

「奴に会ったら真っ先に斬り捨てて殺ろうか…」

フアラン

「オイオイ、会って直ぐに喧嘩は止めてくれし」

この二人は、ロストログア関連の調査だったり、犯罪組織のアジト潰しだったりとかかなりオーバーワークであった為、暫く有給をとって休もうかと本気で思っていたりした所、クロノに呼び出されたのである

伊吹

「ファラン、いくらクロノが執務管の先輩だからって躊躇する事ないぞ」

ファラン

「何をだ！っと着いたぞ」

二人は目的の場所に着き、ドアの前に立ちノックする

伊吹

「おい、クロノいるか？いないなら帰るぞ」

クロノ

「残念ながらいるよ
入ってくれ」

伊吹「…ちっ！

んじゃ、お邪魔します」

伊吹は舌打ちをした後、軽い態度で部屋に入り、ファランも「失礼します」と言っ後続けて部屋に入る

クロノ

「全く、仮にも提督の部屋に入る様な態度には見えない伊吹！」

クロノがそう言う伊吹は「喧しい！」と答えた

ファラン

「クロノ提督、お久しぶりです」

クロノ

「ああ、久しぶりだなファラン。
しかし、君も苦勞が絶えないな」

ファラン

「慣れていますから」

伊吹

「テメエら……後で覚えてろよ（怒）
……んで、今回の任務って一体何だよ？」

クロノ

「任務……ていうより“お願い”に近いかな？」

ファラン

「お願い……ですか？」

伊吹とファランは目を丸くして驚いていた

他ならぬクロノ提督から“お願い”されるとは思ってもみなかった
からだろう

伊吹

「テメエが俺らにお願いとは以外だな…内容はなんだ？」

クロノ

「いや何、実はある友人達から模擬戦を頼まれたんだが…その友人達がもう僕一人では相手に出来ない程強くてな
助っ人として君達を呼んだんだが…頼めるか？」

伊吹

「へえ、クロノの奴が手こずる程の友人…かあ
って！どんな奴なんだよそのチート野郎は！」

二人はクロノの強さを理解している積もりだ
そのクロノが手こずる程の友人相手と一緒に戦ってほしいと言われたのだ。驚くのも仕方ない

伊吹

「ていうか、クロノにも友達がいたんだな…」

クロノ

「……君が僕の事をどう思っていたかは解ったよ」

伊吹

「冗談だ…それで、模擬戦内容は？」

クロノ

「引き受けてくれるのか？」

伊吹「お前が手こずる程の友人達に興味があるからな
一度拝んで置こうかと」

フアラン

「自分もクロノ提督が一目置いてる友人に興味があります」

クロノ

「有難う、模擬戦内容は三対三のチームで戦うルールだ」

伊吹

「了解、理解した…処で相手は誰だよ？」

クロノ

「直ぐにわかる」

クロノは二人にそう言うと、タイミング良くドアがノックされた

クロノ

「来たみたいだな……入って良いぞ」

?
1

「はーい」

?
2

「失礼します」

?
3

「お邪魔するでークロノ君♪」

ドアから入って来たのは上から順に茶髪のサイドポニーの娘と金色

のロングヘヤーの娘、そして、セミロングの栗毛の娘の三人で、見た目からして、まだ中学生ではないかと思われる

伊吹とファランは、声にこそ出していなかったが、かなり驚いていた
何せ、自分達との歳の差が余り無い女の子達が今回模擬戦する相手
：しかも、あのクロノ・ハラウンが認める程の実力者達だと言う
のだから尚更だ

これが……龍崎伊吹とファラン・グラフアイトによる

管理局きつての

「エース・オブ・エース」高町なのは

その友人にして、クロノ・ハラウンの義妹である「金色の雷神」
フェイトⅡ^{デスタロツサ}TⅡハラウン

そして

「最後の夜天の書の主」八神はやて

この三人との初めての出会いである

なのはside

クロノの部屋に入る少し前の話……………

私は、今日クロノ君と模擬戦をする為にはやてちゃんとフェイトちゃん
の二人と一緒にクロノ君の部屋に向かっている

なのは

「クロノ君との模擬戦するの本当に久しぶりだなあ」

はやて

「せやなあゝけど気になるんはクロノ君が頼んだ助っ人っちゅう人
なんやけど…フェイトちゃん知っとるん？」

フェイト

「何でも、クロノの後輩の人で実力もあるんだって」

はやて

「ちゅーことは…うちの先輩になる人なんかな？楽しみやなあ」

そう話をしながらクロノの部屋に向かって歩いている

ただ、フェイトちゃんが少し心配そうな顔をして言う

フェイト

「けどなのは、あんまり無茶しちゃ駄目だよ？」

もし、またあんな事になったら……」

なのは

「心配し過ぎだよフェイトちゃん……っと着いたよ」

そう言ってドアの前に立ちノックする

クロノ

「入って良いぞ」

そう聞こえたので私は「はい」と答え、フェイトちゃん達も後に続く

部屋に入ると、クロノ君の他に二人の男性がいた

一人は紺色の短髪に蒼の瞳、服装は私と同じ武装隊の制服を着ている。

もう一人は銀色の長髪、髪止めで後ろ髪を一つ縛っていて目の色は紫色、服装はフェイトちゃんと同じ執務管の制服を着ている

クロノ

「やあ、待っていたよ」

なのは

「久しぶりクロノ君……そっちの二人が例の助っ人さん？」

クロノ

「ああ、今回の助っ人の二人で……一応僕の後輩だ」

伊吹

「一応ってテメエ……まあいいや、初めまして龍崎伊吹だ！宜しくな」

ファラン

「ファラン・グラフアイトです。宜しく」

なのは

「高町なのはです。」

此方こそ宜しくお願いします！」

フェイト

「フェイトⅡTⅡハラオウンです

お二人の事は義兄のクロノから良く聞いております
お会い出来て光栄です」

はやて

「うちは八神はやてや！

宜しゅうな！」

これが、私達と伊吹君との初めての会話だった

伊吹side

あれから少しだけなのは達と話した後、訓練室に向かった

俺達ムサイ男性陣は、準備してから行くと言って先になのは達を訓練室に向かわせた

ただ、本部の訓練室は今使えないとの事で、俺が作った専用の訓練所に行く事にした

場所はミッドの市街から少し離れた荒野で規模は他の訓練室より強度にあり、魔導士の訓練だけでなく、肉体強化を重視したトレーニングルームもある
デバイスの作成も此処でやっているので、ソレ用の施設もある

伊吹

「しかし、彼処に行くのも久しぶりだなあ」

フアラン

「そうだな…最近の仕事で忙しかったしな」

クロノ

「……………」

伊吹

「ん? どうしたクロノ、さっきから黙り込んで?」

さっきからクロノがだんまりしてやがる……
一体何だよ?

クロノ

「お前達だから言うが……正直言って今回の模擬戦をするのは躊躇ったんだ」

伊吹「?どういう意味だ?」

ファラン

「……………高町なのは…………ですか?」

ファランの言葉に、クロノのは無言で首を縦に振った

クロノ

「二人は話で聞いた事があると思うが、3年前になのははある任務の際、アンノウンに瀕死の重症を負わされたんだ…」

それからクロノは3年前に起きた事件の事を俺達に話してくれた

原因は蓄積していった疲労の限界……結果としては一命はとりとめたが、二度と空を飛べないと宣告される程に酷かったそうだ

だが、それを乗り越えて今のアイツがいるわけだが……キツイ物言いをすれば、それは自業自得だ

自分の体調管理が出来ない奴にこの先の戦いに生き残る事なんて出来やしない

俺がアイツの上司だったら問答無用でクビにしていたかもしれないな……例えば上の連中が、『高町なのは』の力を必要だとしてもだ（それを言ったらクロノやフェイト達にぶっ飛ばされそうなので口に

は出さないが……)

伊吹

「だったらなんで引き受けたんだよ？ キツパリと断ればいいじゃん」

クロノ

「勿論そうする積もりだったさ
けど、どうしてもって言われて…」

伊吹

「押し負けて渋々引き受けた……って、弱いなお前…」

クロノ

「……言うな、自分でもそう思ってるんだからな」

まあそんな訳で訓練室に到着した俺ら

玄関前にいたなのは達が俺達を見つけ「おい」と手を振って呼んでいる

はやて

「遅いで三人とも！」

伊吹

「待たせたな！」 ↑ 某蛇ボイス風

はやて

「全くホンマや！ってか何故にス〇ーク！？」

ファラン

「…馬鹿は放って置いてとっとと入るぞ」

ファランは訓練室のカギを開け、全員中に入る

なのは

「凄い設備ですね…」

伊吹「そうか？大体はこんな感じだろ」

フェイト

「武術用の訓練場まである…：お二人はストライクアーツをなさるんですか？」

ファラン

「ストライクアーツもそうだが、基本的には地球で習う古典武術がそうだな…」

伊吹

「いくら魔導士でも、いざ魔法が使えなくなったらお手上げってのは嫌だしね…：まあ俺達はそうでもないが…」

はやて

「そうなんか？凄いなあ〜♪」

うちは全然ダメダメや」

なのは「わ…私もちよつと…お父さんとお兄ちゃんが武術に長けて

るけど…伊吹君達は誰に教えて貰ったの？」

伊・フア

「……………」

なのは

「アレ？何で二人共黙っちゃうの！？」

何で震えてるの！？ねえ！？」

クロノ

「二人に武術を教えて貰った人って…「うわー！！足が滑ったあ
フゴブア！！」

クロノが『奴』の名前を言おうとしたのを察知し、足が滑った、と
称してクロノの顔面に右ストレートをいれる

伊吹

「いやあゝ悪いクロノ、つい足が滑っちゃった♪」

クロノ

「何処がだ！明らかに右ストレートがキレイに決まったぞ！？」

伊吹

「嫌ですねえ♪右手がオバケに操られたんですよ♪」

なのは

「おっオバケ！？」

フェイト

「いいいい伊吹さん！

おおおおオバケなんていいいる訳ないですよ！？
あれはプラズマなんです！！？」

ん？こいつらオバケが駄目なのか？

クックククツ…だったら…

伊吹

「わかんねえぞお…此処は昔は処刑所だったって噂があるから…たまに出るんだよ……『コレ』が……」

な・フェ・は

「いやあああああ！！！！！」

おゝ予想以上の反応…イテ！？

伊吹

「つゝゝゝいてえじゃねえかファラン！？」

ファラン

「三人をからかったお前が悪い！？
安心しろ、此処は昔処刑所だった訳じゃ無いしオバケも出ない」

なのは

「ほっ…」

フェイト

「よっ…良かったあ」

はやて

「伊吹さんのブアカッ！！ホンマに怖かったんやでッ！！」

伊吹

「す…スマン」

フララン

「たくっ…さっさと修練場に行くぞ！！（それ以上そんな話をされたらたまったもんじゃ無いし）」

そんなこんなで、修練場である荒野に着いて模擬戦を始めた俺達だが…

なのは

「デイバイイイイン……バスタアアアー！！」

フェイト

「ハーケンセイバー！！」

はやて

「遠き地にて闇に沈め、ディアボリックエミッション！」

ズドオオオオオン！！！！

伊吹

「オイオイ待てっつの！！」

クロノ

「相変わらずの馬鹿魔力だな」

結論を言おう

？なのは、砲撃のチャージ時間早すぎだろ！！

？フェイト、お前速すぎ！！目で追えるのがやっとなんですけど！！

？はやて、その広域魔法は反則だろ！！

総合結果、お前ら化け物ですか？と龍崎伊吹は貴女方に問います

な・フェ・は

「化け物じゃ無いもん！！！！」

伊吹

「嘘だっ！！！！！」

こっちは避けるだけで精一杯なんですけど！！

伊吹

「へおいクロノ、何か作戦はないのか！！」

クロノ「へ作戦も何も…先ずはなのはとはやての魔法を止めないと…」

伊吹

「へフェイトが邪魔をして上手くない…かあ、ファラン！フェイトの足止めを頼めるか？」

ファラン

「へそれは良いが…別にアレを倒しても良いんだよね？」

伊吹

「へその赤服の弓兵のセリフは止めれ！死亡フラグが建つぞ……んじゃ任せた」

ファラン

「へ任された！！」

伊吹

「へおう！それじゃクロノ、俺達で砲撃^{なのは}魔王と狸娘^{はやて}を潰すぞ！！」

クロノ

「へ言いは物騒だが…了解した!」

さあ……反撃開始だ!!

フアランside

さて、フェイトの相手を任された俺だが…

フアラン

「あの速さをどうにかして封じないと話にならないしな…」

悔しいが俺はフェイトの様に速くはない
精々追いつくか否かだ
まあ…いくつか手はあるが…

伊吹

「行くぜテメェら!!
反撃開始だ!!」

フア・ク

「おう!!」

伊吹はなのは、クロノ提督ははやての所に向かう

俺は、それを止めようとしたフェイトの前に立つ

ファラン

「悪いが行かせはしない」

フェイト

「なら、貴方を倒して行くまでです」

ファラン

「やってみろ!!」

俺はデバイス『デスペラード』を構え、フェイトに斬り掛かる

フェイト

「バルディッシュュ!!」

バルディッシュュ

《イエッサー! ソニックムーブ》

フェイトは速度強化の魔法を使い、攻撃を避けて距離をとる

フェイト

「プラズマランサー、セット！」

バルディッシュ

《プラズマランサー》

フェイトの回りに金色の鏃状の形をした魔力スフィアが生成される、
数は六つ

フアラン

「ちい！クリムゾンランサー、セット！」

デスペラード

《クリムゾンランサー》

俺も紅色の鏃状の魔力スフィアを六つ生成する

だが、これは相殺用で、こっちはいつでも次のランサーをセット出来る

ファ・フェ

「ファイアー！」

瞬間、全く同じタイミングでランサーが放たれた

互いの放ったランサーが激突し爆散、煙が舞った

ファラン

「（よしっ、この隙に二射目を…っ！！）」

俺は二射目を発射しようとした瞬間、身体が動かない事に気付いた

ファラン

「これは……バインド！！
くそっ！！やられた！？」

煙が晴れ、目の前にはザンパーフォームに変えたバルディッシュを
振りかざすフェイト…一気に決着をつける気か！！

フェイト

「撃ち抜け雷神！！」

バルディッシュ

《《ジェットザンパー》》

フェイト

「はあああああ！！」

フェイトがバルディッシュを振り降ろし、その刃に俺は斬りつけら
れる

ファラン

「ぐうわあああ!!」

バインドで縛られた俺はそのまま避ける事も出来ず斬りつけられ、
地面に叩きつけられる

ファラン

「くそ! 今のは効いたな……っ!!」

片膝をついた俺にバルディッシュを突き突けるフェイト……その表情
は勝負が着いたと言った顔をしている

フェイト

「此処までですファランさん、諦めて降参して下さい……」

諦める……か

ファラン

「悪いなフェイト……俺が諦めるのを……」

デスペラード

《ソニックムーブ、ステルスシルエット》

ファラン

「諦めろ!!!」

フェイトside

ファラン

「俺が諦めるのを…」

デスペラード

《ソニックムーブ、ステルスシルエット》

ファラン

「諦めろ!!!」

そう言ったら、ファランさんは忽然と姿が消えた

フェイト

「えっ! バルディッシュ! ファランさんの魔力反応は!?!」

バルディッシュ

《駄目です、魔力反応と生体反応、共にロストしました》

フェイト

「そんな!?!」

魔力反応も生体反応も探知出来ない……一体どんな魔法を…

デスペラード

《ブラッドチェーン》

フェイト

「えっ！きゃあ！！」

デスペラードの音声が聞こえたと思ったら、突然地面から紅い鎖が現れ、私を縛りつけた

目の前にはいつの間にか姿を現したファランが少し幅の大きい剣状の姿に変わったデスペラードを頭上に掲げている

その身体の周りに黒い炎を纏わせながら…

フェイト

「（まずい…この状態でファランさんの大技を喰らったら…）」

ファラン

「デスペラード！！」

カートリッジフルロード！！！！」

デスペラード

《ロードカートリッジ》

私は早くバインドブレイクしようとするも、中々抜け出せない

ファラン

「終りだ、邪王炎殺……黒龍破……!!」

『グオオオオオッ!!!!』

ファランさんのデバイスから放たれた黒い竜の炎が雄叫びをあげながら私の方に向かって来た

フェイト

「キャアアアアッ?!?!」

私はそれを避ける事が出来ず、そのまま炎の黒龍に吞まれた

フェイト

「ん……あれ、私は一体……」

確かファランさんの砲撃(?)に吞まれて……それから……

ファラン

「気がついたか？あの後お前は気絶してたんだよ…小一時間くらいな」

フェイト

「そんなにですか…って!？」

突然ファランの顔が現れびっくりする

しかもこれ…膝枕されてる!!

ファラン

「ああ…流石にこのままにするわけにもいかないし…少し堅いと思っただけどコレくらい問題無いと思っただけど…どうした？顔が赤いぞ？」

フェイト

「だっ大丈夫です！」

有難うございました!!」

私は直ぐに飛び起き、深呼吸をする

どっ…どうしよう、男の人に膝枕されるなんて初めてだよ／／／

ファラン

「そうか…しかし、フェイトの寝顔は中々可愛かったな」

フェイト

「ふっふええええええ!!!!!!」

ねっ寝顔まで見られた!!はっ恥ずかしいよう／／／

フェイト

「そっその…変じゃありませんでした?私?」

ファラン

「別に変じゃ無かったぞ?

俺から見てもフェイトは美人な方だし…きつとお前に合う素敵な男性が現れるよ…きつと」

フェイト

「そっそうでしょうか?」

ファラン

「ああ!!! 勿論!!!」

そう笑顔で言ってくれたファランさん

……何だろ? 胸の中がドキドキする…

さっきから心臓が急激に鳴り響いて煩いったらない

ドオオオオオオン!!!!!!

その瞬間、突然遠くから爆発音が聞こえた

フェイト

「あの方角は…なのは達かな？」

ファラン

「そうだろうな…恐らくもう決着がついた事だろうな…フェイト、ちよっと悪い」

フェイト

「えっ？何です…きゃあ!？」

突然ファランに腕で抱えられた…所謂お姫様抱っこだ

フェイト

「ファランさん!？降りして下さい!!」

ファラン

「降ろすも何も…お前はさっきの俺の黒龍破を喰らって、立ってるのがやっただろ？」

それに、少なからず俺にも非があるんだコレくらいしなきゃ割に合わない」

フェイト

「でっですが!？」

ファラン

「こういう時は黙って言うこと聞く!!」

フェイト

「は…はい」

結局ファランさんに押しきられてしまった…

でも…何か嫌じゃ無い…寧ろ嬉しいかも…

ファラン

「少し飛ばすぞ、しっかり捕まってる!」

フェイト

「あっ、はい!」

そのまま私を抱えたまま、ファランさんはなのは達の所に向かった
もしかすると…私がファランさんに恋をしたのは、あの時に向けた
笑顔かもしれない…

伊吹 side

さて、ファランとフェイトがガチンコバトルをしている頃、俺とクロノは……

伊吹

「さて、どうするクロノ？」

クロノ

「どうするも何も……」

只今、一言で言えば大苦戦だ

なのはの砲撃魔法は半端ねえし、はやての広域魔法もとんでもねえし、やっと近づいて斬りつけようとしたら、なのはのプロテクションは異様に硬いし……

全く……管理局の白い悪魔と狸娘は化け物か!!

なのは

「悪魔じゃ無いもん！」

はやて

「そうや！なのはちゃんの悪魔呼ばわりはともかく、うちが化け物
って酷いやんけ！あと、誰が狸娘や！！」

なのは

「……はやてちゃん、それはどう言う事かな？」

なのはが黒いオーラを出しながらデバイスをはやてに向ける……こ
れひょっとしてチャンス？

はやて

「あっ……いや、なのはちゃん……これは言葉の彩という物でして……け
して本心から悪魔とか魔王とか、はたまた冥王とか思ったり何かし
たりしてませんか……あーごめんなさい！！」

ごめんなさい！！今のを全力全開で謝りますから！！だからこの距
離でスターライトブレイカーは――「はやてちゃん……」[お話]しろう
か♪スターライトオオオオ！！ブレイカアアア！！「いやあああ
あ！！！」

なのはが撃ったドでかい桜色の砲撃がはやてを吹っ飛ばした

てか何！！あの出鱈目な砲撃魔法！！あんなの喰らったら龍崎さん
一発でお陀仏ですよ！！？

クロノ

「だが、これはチャンスだ。あの仲間割れ（？）のおかげではやてを叩く手間が省けた」

伊吹

「そうだけどよ…俺は今のアイツがラスボス級に見えるんですけど…」

レベル1で始めたばかりなのにレベル100のラスボス級と戦えて言ってるもんだぜ!？」

目が覚めたら教会に居て「おゝ死んでしまうとは情けない!」って言われそうなんだけど…

クロノ

「ドラ○エかよ」

けど…なのは以上におっかない魔導士は一人しかいないだろ?」

伊吹

「はぁ? 誰だよ一体」

クロノ

「君達の師匠…ゼクス・クォールズ元帥だよ」

伊吹

「……反論出来ねえ程納得した…けどアレはラスボスより隠しボスだろ」

しかもバグキャラだから勝てる確率はほぼ0%だし：

まあアレに勝てる魔導士がいるかわからんがな：多分ないけど：

なのは

「二人共、さっきから何話しているのかな？
お話している暇なんてあるのかな？」

魔・王・降・臨！！

今のアイツの天使の微笑みが、死神の微笑みに見えたと言おう

よし、お前は今日から

第六天魔王、高町なのはだ！

なのは

「魔王でいいよ：こっちも魔王らしい戦い方をするから：」

うん：そのセリフ使うの早くないというツツコミは入れない事にす
る：もう疲れた

伊吹

「それじゃこっちも真剣^{マシ}でやりますか：：：ソフィエル！スタートア
ップ！！」

俺の両腕に銀にコーティングされたアームリストが装着される

なのは

「へえ…デバイスを二つ所持してるんだ…大変じゃ無い？」

伊吹

「まあな、それにコイツがなきゃまともに動けないしね…こんな風にな！」

右手に持っていた神威を左手に持ち替えて、一気になのはとの距離を詰めその腹に掌底をいれる

なのは

「ぐふう!!」

咄嗟の事だった為か避ける事が出来ずモロに入り、腹を抑えて少しよろめく

伊吹

「わりい！痛かったか？」

それなりに手加減した積もりだったんだが？」

なのは

「だ…大丈夫です（咄嗟の事だったから避ける事が出来なかったけど、反応出来ない速さじゃ無い…落ち着いて対処すれば…）」

ソフィエルを装備した時の戦闘スタイルは『圧倒的な速さで相手の攻撃を避け、敵に格闘主体の技や魔法でラッシュする』をベースにした物

単純な速さなら、今のフェイトに追いつける自信がある

ただ、逆に言えば、防御魔法が疎かで、余りプロテクションで防ぐという事が出来ないのが弱点だ

伊吹

「（それを補う為に、俺は複数のデバイスを使用してるんだがな）」

俺が見た限り、なのははシューターの精密な射撃と破壊力のある砲撃魔法、そして硬い防御力がある
砲撃魔導士としては一流だろう

だが、どんなに凄い奴でも弱点がある

奴の泣き所は恐らく接近戦〔クロスレンジ〕、それもフェイトの様なスピード戦を得意とする魔導士だ

とあええ、幾ら接近戦が得意と言ってもアイツが反応出来ない程のスピードがなきゃシューターや砲撃に当たって『はい撃墜』なんてシャレにもならないし、スピードがあっても決定的な一撃が与えら

れる技が無ければ意味もない

だからソフィエルをセットアップした

速さと打撃に自信があるコレなら、なのはを負かす事が出来る筈だ

伊吹

「（その為の下準備の『印』も付けたし…後は…）」

俺は後ろにいるクロノを見て、念話で話す

伊吹

「へクロノ、少しだけ時間を稼いでくれるか？」

クロノ

「へ何か策でもあるのか？」

伊吹

「へ無かったら念話なんてしねえよ！…頼む」

クロノ

「へ…わかった、だが幾ら僕でもなのは相手に余り多く時間は稼げない…手早く頼む」

伊吹

「へ了解だ！」

クロノは念話を切り、なのはにステインガーを射ち、なのははプロテクションでソレを防ぐ

クロノ

「なのは、少し相手してもらおうぞ」

なのは

「クロノ君が相手なら手加減はいらないね、デイバイン…」

クロノ

「ブレイズ…」

な・ク

「バスター（キャノン）！！」

二つの砲撃がぶつかる中、俺は左手に持っている神威を逆手に持ち変え、右手を下にもっていき魔力を溜める

伊吹

「ソファイエル、カートリッジロード！」

ソファイエル

《ロード…カートリッジ》

弾薬が二つ排出され、右手が蒼い雷に覆われる

それだけじゃ無い…右手を覆った魔力光が刃の様な物になって、それ

も雷を纏っている

準備は……整った!!

クロノ

「うわああああっ!!」

クロノがなのはに落とされた……だが、もうそんな事はい
後はコイツを……なのはにぶつけるだけだ!!

—no s h d e

なのははクロノを落としてもまだ油断はできなかった

今日の前にいる自分の先輩にあたる人物——龍崎伊吹を見る

なのは

「（何かしようとしてる……でも!）レイジングハート!!」

レイジングハート

《レストリクトロック》

拘束魔法を唱え伊吹を縛る

これで伊吹は動く事が出来ない
例えバインドブレイクしても、その前に砲撃を射たればどうしようもないし、今伊吹が使おうとしてる魔法で砲撃を防がれても二回目は伊吹はない。

でなければ、クロノに時間稼ぎをさせる訳がない

なのは

「これで終わり！

ディバイイイイン！！」

レイジングハート

《ディバインバスター》

なのは

「バスタアアアー！！」

瞬間、放たれる桜色の砲撃魔法、なのはが最も得意とする超距離砲撃

しかし、伊吹はこれを避けようとしないう、以前とバインドによって拘束されたままだ

もう少しで当たるその時に伊吹は動いた

ほんの少し力をいれた瞬間、バインドがバキンツと音を立てて解かれたのだ

だが、既になのはは勝利を確信していた

どのみち今の伊吹になのはの砲撃を避ける術は無いと思ったからだ

そう……だからだろう…

伊吹がまさに砲撃が当たる瞬間にフツと消えた事に驚いたのは…

なのは

「えっ!!」

当然なのはは自分の目を疑った

当たると思っていた自分の砲撃が、よもやあの距離で外すとは思っていなかったからだ

なのは

「（転移魔法？でもソレとは少し違う…何が…？）」

辺りを見回すが伊吹は何処にもいない

だが……

レイジングハート

《!! マスター、超高速で此方に接近してくる魔力反応が一つ》

なのは

「えっ!! 何処なのレイジングハート!?!」

レイジングハート

《前方を真っ直ぐ此方に……来ます!! 構えてください!!?》

なのは

「う……うん!」

五年程付き合いの長い相棒の言葉を信じ、デバイスを真っ直ぐ突き出すのは。

その時……

——ガキン!!

何かが弾かれた金属音になった…

一瞬の事だった、レイジングハートを突き出した瞬間、突然真上にソレが宙を舞った

両腕を上げられた状態になったのはは言葉をだす前に見たのだ…

左手に持った長刀で自身のデバイスを真上に弾き飛ばし…

右手で今まさに自分を貫こうとする『蒼き閃光』を…

伊吹

「雷迅…牙突掌!!」

刹那、繰り出されたその一閃は、撃ち込んだ瞬間、蒼い雷がなのはの身体にほとばしった

なのはは声を上げる間もなく意識を手離し、倒れる身体は伊吹の右腕に抱えられ、左手は神威を待機状態にしたあと、落ちてきたレイジングハートをキャッチする

伊吹

「悪いな…先輩の意地として、勝たせて貰ったよ…」

こうして模擬戦は、伊吹達先輩組の勝利に終わった

なのは

「えー！！良いじゃないですか」

伊吹

「嫌だね！何でそんなタネ明かしをしなきゃならないんだよ！！」

あの後なのは少し時間が経った後に目を醒まし、伊吹のあの超高速移動について質問してきたが：見ての通り断固拒否している

フェイト

「ファランさん、あの時：その：よろしければ、姿が消えた魔法について聞きたいんですけど…」

ファラン

「アレは『ステルスシルエット』って言って：ほんの少しの時間だけ肉眼、魔力反応、生体反応を遮断させる迷彩魔法だ。

といっても：殆ど不意打ちや距離をおくぐらいにしか使えないし、魔力の消費も結構あるから多くは使えないけどね」

一方フェイトは先ほどフアランが使った迷彩魔法『ステルスシルエツト』について質問に答えている

はやて

「ええやん伊吹先輩

少し位タネを明かしたってもうカワイイ後輩が頭下げて頼んでんやし」

クロノ

「だってさ…どうする伊吹…」

伊吹

「だが断る!!」

はやてとクロノは、なのはから伊吹に説得を頼まれたが、以前と喋ろうとはしない

なのは

「ぶっく!! だったらもう一度模擬戦して、私が勝ったら教えて下さい!」

伊吹

「嫌だね!!…ていうかさっきやったばっかなのにまだやるか!!! こっちは死ぬ程疲れたんですけど!!!」

なのは

「伊吹先輩が体力ないだけだもん!!」

伊吹

「テメエの体力が異常なんじゃボケエエエ!!」

なのは

「ひっど〜い!!」

こんな子どもみたいな口喧嘩をしている一方…

フェイト

「あの…よろしければ、また模擬戦をお願いしても…宜しいでしょうか？」

フアラン

「俺なんかで良ければ、喜んで」

何故かフアランとフェイトの回りに大輪の華が咲いていたのは気のせいである事にしよう

―舞台裏コーナー―

伊吹

「遂に来てしまったこのコーナー」

ファラン

「時間が惜しいから手早く紹介しましょう」

ゼクス

「今回のゲストは『魔法少女リリカルなのはStrikerS』償いの槍』から、主人公ラディオン・メイフィルスとそのデバイスのセラフィムだ！」

ラディ

「ども、ラディです!!」

伊吹

「良く来たな…ってラディ、セラフィムは？」

ラディ

「あれ？さっきまで一緒に…」

ダダンダダン♪

セラフィム(T.N. verZ)

「ハロー♪」

伊吹

「本当にターミネーターで来やがったし」

セラフイム

「ゼクスさん、お会い出来て光栄です!!」

ゼクス

「良く来たな…我が友よ」

ーガシッ（握手）

伊吹

「奇跡だ…ターミネーターと人間^{ゼクス}が握手している」

フアラン

「ああ…ある意味で奇跡だ…」

そんな奇跡（？）に感動する中

リーシャ

「はい、ラディ君、リンディ茶と私が作ったアップルパイですわ♪」

ラディ

「わーい♪いっただきまーす」

此方はリーシャの作ったおやつをがぶりついていた…

伊吹

「さて、とつとコメント返しをするか…」

二階堂さんへ

伊吹

「フラグが立たない方法？んなもん千華ちゃん一筋に愛せば万事解決だろ」

ゼクス

「それか思い切ってハーレム帝国を設立するかだな」

ファラン

「一晩もしない内に堕ちそうな帝国だな」

セラフイム

「それではリーシャさんから、鶴の一声をどうぞ♪」

リーシャ

「昶さん、余り千華さんを泣かせてはいけませんよ…私は優柔不断な男性は『問・題・外!』ですの♪」

ラディ

「うわぁ…言っちゃったし」

セラフイム

「〜♪」

Nakiさんへ

セラフイム

「ゼクスさん、お土産として専用ミーティア（対人アルカンシエル装備）を差し上げます♪」

伊吹

「なんてもん渡すんだオイ!？」

ラディ

「ホント御免なさい!?!」

ゼクス

「サンキューな! こっちもお前さんの為に作った俺様印のエス〇リボ〇グだ!?!」

セラフィム

「ワ〜イ♪有難うございます!?!」

ラディ

「なんてもん渡すんですか!?!」

伊吹

「ホントマジでゴメンナサイ!?!」

ゼクス

「んじゃ早速、っと」

―ガシヤン

ファラン

「まさかと思いますが、試し撃ちをする積もりですか?」

ゼクス

「あぁん? 何当たり前の事言ってるの?」

伊・ファ

「殺らせるかぁぁあ!?!?!」

セラフィム

「えい♪」

グシャ！バキッ！ドカッ！ベチヨ！

伊・ファ

「……………」

返事がない…只の屍のようだ…

ラデイ

「伊吹さん！！ファランさん！！」

セラフィム

「ゼクスさん、リーシャさんの避難は完了しました」

ゼクス「サンキュー♪セラフィム。さあラデイ、何か言い残す事は？」

ラデイ

「ブラシスコン万歳！！」

ゼクス

「アルカンシエル&ハイマツトフルバースト！！ファイアアアア！！」

ズドオオオオオン！！！！

ゼクス

「まあまあだな♪

さてセラフィム、後は頼んだ」

セラフィム

「りょ〜かい♪

びるびるびるびるび〜♪」

伊・ファ・ラ

「ターミネーターでそれをやるな〜〜〜!!!!!!」

三人共復活!!!

リーシャ

「終わりましたか？」

セラフィム

「はい♪」

リーシャ

「そうですか♪でわ次の感想に参りましょう」

TODAさんへ

伊吹

「隆浩、出来れば師匠と戦うのはもう止めた方が…」

セラフイム

「いつそあの時消し飛ばされれば良かったのに♪」

ゼクス

「バゝカ！んな事したら八神はやてに告白出来ねえだろ！」

ラディ

「晶彦く頑張って隆浩の身長拔かせよ♪」

リーシャ

「隆浩君、頑張ってはやてさんとの恋の成就して下さいな♪」

フアラン

「まあ……頑張れよ」

村正さんへ

ゼクス

「千歳ちゃん…俺様の話聞いてた？俺様は女の子とは戦わないの！？」

伊吹

「本人が希望しているんだから、戦ってやればいいじゃん？」

フアラン

「一真が変わりに戦えば良いんじゃない？」

セラフイム

「それかフラムさんかフェンさんに代わりに戦えば良いんじゃない？」

リーシャ

「いずれにしても、今は検討中みたいですのでもうしばらくお待ち下さいな」

ラディ

「（良いのかなあ）」

U・Tさんへ

ゼクス 「俺様に絶望？……おもしれえ！！受けて立つぜ、セフィロス！！」

ラディ

「…明らかに前の感想と反応が違うよね？」

伊吹

「野郎が相手だったら喜んでぶっ殺すからあの人は…」

ファラン

「良かったらクラウドとナナキも観戦に来るか？」

セラフイム

「セフィロスのあんな最後やこんな最後が生で見られるかもしれませんよ♪」

リーシャ

「??? どんな最後なんですか？」

セラフイム

「それは見てからのお楽しみ♪」

伊吹

「さてと、此処でお知らせがある」

ゼクス

「俺様と戦う野郎の募集だ！閉め切りは『3月30日』まで、感想、メッセージで知らせてくれ」

ラディ

「出来れば参加するキャラのデータも送れば助かります」

セラフイム

「ただし、命の保証は出来ないから命知らずな野郎（男）な奴だけ送って下さい♪」

リーシャ

「あと、もう一つ嬉しいお知らせがあります」

全員

『祝！アクセス10万件突破！！』

伊吹

「いやあゝ気がついたら10万件突破だよ！」

フララン

「まだ10万件だがな……こんな更新速度が遅い駄文を見てくれると思うと、正直嬉しい」

ゼクス

「相変わらずの更新速度の遅いこの駄文ですが！」

リーシャ

「これから応援宜しくお願いしますわ♪」

ラディ

「今回は本編に再突入！！」

伊吹

「ジンの過去、ティアナの兄の思い……どちらも見逃すなよ！」

ラディ

「俺が活躍する

『魔法少女リリカルなのはStrikers〜償いの槍〜』も宜しく!」

セラフイム

「主役である私のカオスが真っ赤に燃える!! そんな活躍をご期待下さい♪」

ラディ

「しないから!! しかも主役はオレだから!!」

伊吹

「それじゃあ皆!! 次回に向かって…」

全員

『スタンバイ、レディ!!』

番外編第二話：初めての出会い、波乱万丈の模擬戦（後書き）

Nakiさん、ラディとセラフィムの出演有難うございました！

何か指摘する所があったら言って下さい

第八話：少年の過去、少女の思い（前書き）

えっと…長い間更新せずいませんでした！（土下座）

ジン

「……死刑」

ちよっ！謝ったのにこの仕打ち！！

ジン

「当たり前だ…3ヶ月以上放置してたんだ…
今回はアンタの為に処刑人を呼んである」

えっ！誰！

なのは

「どうも♪処刑人その一です♪」

フェイト

「処刑人その二です♪」

はやて

「処刑人その三やで♪」

何……だと!?

ジン

「……じゃ、任せた」

なのは

「全力全開! スターライトオオオ……」

フェイト

「轟け轟雷! サンダースマツシャー……」

はやて

「響け終焉の笛! ラグナロク……」

……ジン、弁解の余地は?

ジン

「ある訳ないだろ……」

諦めて死ね

氏ねじゃなくて死ね」

フフフ……良いだろう……潔く受けようではないか……我が生涯に一边の悔い無し!!

な・フェ・は

「「ブレイカアアア……!!」」

ズドオオオオオン！！！！

ジン

「死んだか…さて、見苦しい所を見せてしまって申し訳ない…
相変わらずの文才の無い駄文だが…第八話…始まるぞ…」

第八話：少年の過去、少女の思い

—2年前—

『……もう、行くのかい？』

『……ああ』

『……そうか』

二人の少年が廃虚と化した建物の前で立ち話している

辺りには人気は無く、空は曇り、雨がふっている

『4歳の君がこの組織に来て10年…長い様で、実にあつという間だった』

『……確かにそうだな。だが結局、オレとお前の死に場所は…此処じゃなかったな』

黒髪の少年が空を見上げる様に上を向きながらそう言うと、もう一人の銀髪の少年が言う

『君は、これからどうするんだい？』

『……自分の存在意義を見つける為の旅をする。まあ、簡単に見つかるとは思ってないが……』

『「道具」として生きる以外の存在意義なんて……僕達にあるのかい？』

『……その為にオレ達は「自由」になった……奴等の命と罪を背負う代償として……な』

『だとしても……僕達は死ぬまで殺人者のレッテルを貼られる事になる……自由を手にしたとしても……居場所は限られる』

『だったら……死ぬまで一人で生きれば良い。
居場所なんて必要ない……立ち止まらず、死ぬまで一人で歩き続ける』

『死ぬまで……か。』

『気の遠くなる様な話だ』

そう言って二人は背を向け、離れるように歩き出す

『さよならだジルフィード。出来れば君とは、再び巡り会わない事を願うよ』

『ああ、そうだなシェラード。オレも二度と、お前には会いたくないな』

二人の少年は、目を合わせず、振り返る事もせず、別の道を歩き出した



そして、現在…

コウ

「しかしまあ、こうしてこの『表』の世界でまた君に出会うなんて…運命とは残酷だね」

ジン

「全くだ…あの日から2年しか経っていないというのに…」

はやて

「ジン君！どういう事や！」

リュクロスって一体なんなんや！」

はやてが叫ぶ、他の仲間も信じられないといった顔をしている

コウ

「ああすまない、そう言えばリュクロスの存在は管理局には全く知

られていなかったね」

ファラン

「知られてない……どういう事だ！管理局の情報網でも知られてないって！」

ファランは驚く、管理局の情報網は『法の番人』と云われるだけあり、あらゆる情報がある。犯罪組織もその一つだ

それにひっかからないという事には、ファランだけでなく、なのは達の驚いている

コウ

「情報の隠蔽や書き換えは此方の得意分野でねえ。管理局に存在を知られないようにするのは少し苦労したよ……だが安心したまえ、あの組織は既に僕とジンの二人で滅ぼしてる。

君たちの恐れる様な事はない……さて、長話がすぎたのでこれで失礼するよ」

彼は背を向き、ヴァンと一緒に転移魔法でこの場を去ろうとする

……が

ジン

「待て、コウ」

コウ

「…ん？」

ジンが待ったをかけ、コウに近づく

そして…

——ガチャリッ！

二人は懷から拳銃を取り出し、互いの頭につきつける

ジン

「お前……何を企んでいる？」

コウ

「舞台の準備…とだけ言っておこうか

今回は決闘の見学兼主役達の下見だからね…」

ジン

「…舞台の準備？」

コウ

「いづれ解るさ、君なら尚更…ね」

そう言い残し、ヴァンとコウは消え去った

ジン

「（コウ：お前は一体何を？）」

ジンは懷に銃をしまい、コウの言い残した事を考えていると、なのは達がジンに近づいて来た

なのは

「ジン君：あの話は本当なの？」

ヴィータ

「ていうか今取り出したヤツって質量武器だろ？何で持っているんだよ」

ジン

「高町隊長の質問の答えは『yes』だ：

ヴィータ副隊長の質問の答えは、本部には護身用として所持許可は貰ってある」

ジンは振り返りながら二人の質問を答える

フェイト

「それじゃあ聞かせてくれないかな？リュクロスの事…」

フェイトはジンを睨みながら質問する

少し黙った後、ジンは語りだした

ジン

「リュクロスは少数の暗殺集団の集まりで、オレも4歳の頃から人を殺す為の術を身につけていた

銃の扱いは勿論、ナイフの使う戦術や体術などを覚えていった

シェラード…今のコウと呼ばれていた奴もその一人だ」

シグナム

「4歳……そんな幼い頃から」

はやて

「!?!? ちょいまち! ジン君の家族は…両親はどうしたんや!?!」

ジン

「さあな…両親との記憶が無いからな…とっくの昔に死んだか、オレを捨てて今も何処かでのうのうと生きているかの2択だが…正直言っただけ今のオレには関係ない」

はやて

「関係ないって…」

「そんなあんまりやろ!?!」

はやては怒鳴る。家族を最も大切にする彼女にとって、ジンの言った事は逆鱗に触れても仕方ない事だ

……だが。

ジン

「自分を捨てたかもしれない親に会いたがる子がいると思っているのか？」

仮にもしその捨てた親が今更会いに来たとしたら…オレは直ぐにその親を殺す！」

はやて

「っ!？」

フェイト

「そっ…そんな!？」

なのは

「酷い…会いに来た親に対して、そんなのあんまりだよ!？」

ジン

「じゃあ聞ぐが、自分を捨てた親を恨む子どもがいらないと思っているのか？」

なのは

「それは……」

そこでなのは黙り込む
ジンの言った事は確かに酷い言い方だが、事実をついているのは確かだ

ジン

「話が少し逸れたな…
リュクロスにはある規約があるんだ」

ファラン

「規約…それは？」

ジン

「……………任務遂行後、自害することだ」

その言葉に、その場にいた全員が驚きを隠せなかった

スバル

「なに…それ？
どういう事？」

今まで黙って聞いていたスバルが口を開くが、ジンは呆れた様な口調で言う

ジン

「そんな意味も知らないのか？
お前でも簡単に解りやすく説明すれば、任務が終わったらとつと死ねと―」

スバル

「そんな事は聞いていない!!」

ジンが最後まで説明し終わる前にスバルが怒鳴る。

スバル

「どうして…何でたった一回の任務が終わったら死ななきゃいけないの!？」

そんなの……そんな事って……!」

スバルはただそう言って涙していたが、ジンは構わず喋りだす

ジン

「リュクロスに依頼する連中は、殆ど社会の上に立つ連中ばかりだ
その依頼者「クライアント」に余計な疑いを与えない為の考えだ

それに、オレやコウの代わりになる奴なんて他にもいた

『減った分だけ足せばいい』

それがリュクロスのやり方だ

オレとアイツは所詮：組織の為の使い捨ての道具という事だ」

ファラン

「だがお前は生きている：もしお前がその任務を遂行したと言うなら、お前は死んでいる筈だからな！」

此処でファランはジンに強く言い出す

ジンの言っている事が本当なら、今此処にジンはいないからだ

ジン

「ええ：確かに2年前に、オレは任務を言い渡され、それを遂行させた：：だが自害する事が出来なかった。死ぬ事が別に怖かった訳じゃない：呆気なく終わったんだ：

標的「ターゲット」のいる場所には簡単に入れるし、簡単に近づく事が出来て簡単に殺す事が出来た：何もかもが呆気なかった：

『こんなものなのか』とってしまったんだ」

そのままジンは空を見上げて言った

ジン

「オレは、組織の道具として生きる事も：

その為に死ぬ事も出来なくなった…出来損ないの欠陥品だ」

フェイト

「―いい加減にして！」

突然フェイトが怒鳴る

その瞳は、明らかに怒りをあらわにしていた

フェイト

「『使い捨ての道具』とか、『出来損ないの欠陥品』とか、どうして自分の事をそんな風に言えるの！？」

そんなの…人として間違ってるよ！？」

『使い捨ての道具』と『出来損ないの欠陥品』…どれもフェイトにとって一番嫌いな言葉だった

フェイトだけではない…遠くで聞いているエリオも、どこか辛そうな顔をしている

だが、ジンは表情を変えようとせず、再び口を動かす

ジン

「人として…か

確かにそうかもな。だが、オレはソレしか生き方を知らなかった…

：アンタらみたい生きる事なんて出来なかったらな」

ジンはそのまま背を向け話した

ジン

「これで充分だろ…

オレはこれからヤボ用で行くところがあるから失礼する…カタストロフ、コード3821」

カタストロフ

《了解。コード3821ジェットスライガー、Come Closer》

なのは

「待ってジン君！」

突然なのはがジンを呼び止めて話しかける

ジン

「何だ？まだ何か言いたい事があるのか」

なのは

「ジン君…もしかしてまだ何か隠している事があるんじゃない？」

ジン

「何を言うかと思えば…さっきの話でオレの事は全てだ

例えまだ何か隠していたって、アンタには関係ない」

なのは

「でも、私達は仲間なんだし…何か力になる事だって」

ジン

「生憎と、オレはアンタみたいな偽善者なんかと仲間になった記憶は一切ない…仲間ごっこなら隊長達だけでやってくれ」

ヴィータ

「そういやスバルにも似たような事言ってたな…仲間なんて必要ない…自分が道具だからって」

なのは

「そんな事ない！ジン君は道具なんかじゃ…」

ジン

「だが、リュクロスの道具として育てられたのは事実だ…悪いがもうオレに関わらないでくれるか？はつきり言って、アンタらウザイよ」

その瞬間、突然ジンの真横から大きいバイクが火を吹き走りながら現れ、ジンがソレに飛び乗ると同時にそのまま何処かに行ってしまった

フェイト

「ファラン先輩、本当にジンは…」

ファラン

「わからない……ジンの過去の事は今日知ったばかりだからな

伊吹にも…後でこの事を伝えないと…」

デスペラード

《マスター、その伊吹殿からメールが来ています》

ファラン

「伊吹から?…見せてくれ」

ファランは皆から少し離れてメールを開き、内容を見る

「パリイン!!!?」

フェイト

「先輩!?!」

ヴィータ

「何だ!…どうしたんだよいきなり!」

いきなりファランが怒り任せに窓ガラスを殴り割った

ファランの目は明らかに殺気が込められていたが、フェイト達の方
向から反対に向いていた為、その表情は見られる事はなかった

ファラン

「悪い：何でも無い」

ヴィータ

「んな訳ねえだろ！？」

明らかにあの態度は何でも無いで済む訳があるか！？」

ファラン

「すまない、本当に何でもないんだ

伊吹からのメールの内容にちょっとふざけた文があって怒っただけ
だし…」

シグナム

「本当かグラフィット…私達に何か隠している事があるのではない
のか？」

ファラン

「疑い過ぎだシグナム、本当に何でもないんだ」

シグナムはそれ以上は何も言わなかったが、やはり目はまだ鋭いま
まだ

ファラン

「悪いけど、伊吹に招集をかけられたからこれで失礼する」

リフィア

「なあ、アタシも行った方が良いのか？」

ファラン

「いや呼ばれたのは俺だけだ…お前はなのは達と一緒に隊舎に戻ってくれ。」

じゃ、またな皆」

ファランは急ぐように車に乗り込み、アグスタを去った

リフィア

「（どうしょ…この空気…アタシ耐えられないよ）」

恨むぞタイショウ！！）」

特部隊でたった一人取り残されたリフィアは、現状の空気に耐えられず、心の中で絶叫した……

—ジンスide—

オレは大型バイクの『ジェットスライガー』を走らせ、ある場所に
向かっていた…

カタストロフ

《よもや、あんな形で主の過去がバレるとは思わなかったな》

ジン

「何時かバレる時がくるくらいわかっていた…それが速くなっただけだ、オレの目的に支障はない」

カタストロフ

《しかし、もしあの者達が邪魔をしてきたら…どうするつもりだ？》

ジン

「その時がきたら躊躇なく撃つさ、多少の長期戦は覚悟するがな」

カタストロフ

《現在の主の戦闘力と機動六課全員の戦闘力の差は、特殊弾の使用とフルドライブ使用を合わせても、勝てる確率は皆無に等しいぞ？》

ジン

「だとしても、何もしないよりはましだ…着いたぞ」

着いた先は住宅街から少し離れた古い屋敷

元々どこかの貴族の屋敷だったらしいが既に亡くなっており、今では誰も寄り付かないのでオレが買い取った

理由は二つ、一つは誰も寄り付かないので静かに暮らせるところ。
二つ目は：アイツらの隠れ家には良いだろうと思ったからだ。

オレは扉の前に立ち、ソレを開ける

ジン

「おい羽駒、いる―」

？

「チェストー！―！」

扉を開けた瞬間、フライパンを持った女がソレを思いきり振り下ろしてきた

……が、ソレを軽く避けて足を突き出す

結果、相手はそれに引っかけり、音をたてて派手に転んだ

？

「イタタタ…もー！」

何すんのさジン！」

ジン

「その言葉をそっくり

そのまま返してやる

それよりミコト、羽駒はいるか？」

この女は『ミコト・クロツグ』：オレが『ジルフィード』という名前を捨て、宛のない旅をしていた時に出会い、オレに『ジン・クロツグ』という名前をくれた『自称』姉で居候だ

……最も、血の繋がりなんて全くないので『姉弟』と言うには少し違う気がするが…

ミコト

「羽駒さん？あの人なら部屋に…ってジン！
またアンタ目上の人を呼び捨てにして！」

ジン

「羽駒は部屋か…」

ミコト

「ってコラー！まだ話は終わって…ってだから無視するなァー！」

煩い怪獣を無視してオレは目的の部屋に行く事にした

— out side —

ジン

「羽駒！入るぞ」

部屋に入ると、そこにはゴミが散らかっており、ベッドの上には髭を少し嚙した中年のオッサンが腹をだして寝ていた

ジン

「（手っ取り早く起こすか…）カタストロフ、セットアップ…
特殊弾、爆裂弾「バーストバレット」装填…」

カタストロフ

《了解。爆裂弾「バーストバレット」セット》

カタストロフを武器だけセットアップさせ特殊弾を装填させる

そして、そのまま黙ってカタストロフをオッサンにめがけて…

ジン

「バーストシューター、ファイア！」

カタストロフ

《バーストシューター、ファイア》

通常よりも一回り大きい魔力弾を撃ち出した

………

オッサン

「イテテテ…ったくよくただ起こすだけで特殊弾使うの止めろよな
し

非殺傷とはいえ当たれば痛いんだからな少年！」

ジン

「それだけ無駄口だ叩けるなら、あと10発は余裕だな…」

ミコト

「止めなさいジン！」

羽駒さんが可哀想でしょ！」

羽駒

「優しいね〜嬢ちゃん♪

少年も少しは見習っ…」

ジン

「……カタストロフ、

爆裂弾と火炎弾「ファイアバレット」を同時装填しろ」

カタストロフ

《了解。》

羽駒

「ちょ!?!? 待った少年! 流石にそれは非殺傷でも（精神的に）死ねるから!?!」

家庭の談話……と言うには、少々物騒だが…

中年のオッサン―羽駒ハネコマ 馨カオルはコーヒ―を口にしながらジンに話す

羽駒

「本当に短気だねえ少年…機動六課の所でもその性格で通してるわけ？」

ジン

「……アンタには関係ない事だ」

ミコト

「アンタがそんな態度だから友達が出来ないんでしょ！」

ジン

「それも貴様には関係ない……大体なんんだお前のその格好は…」

ミコト

「似合わない？羽駒さんが通販で買ってくれた物だけど…」

ミコトの今着ている服は白のフリルを付けた黒のエプロンドレス
頭には白いフリルに黒のリボンの付いた頭飾り…つまり浴に言うメイド服を着ているのだ

補足しよう……ミコトの年齢はジンと同じ16歳、別にメイド服が似合わない訳ではない

対し羽駒は30過ぎだオッサン…その歳で通販でメイド服を買い、

更に10代後半の娘に着せるといのは…些か良い趣味とは言えない…

ジン

「羽駒…貴様…」

羽駒

「良いじゃんさ別に」
「やっぱ屋敷にメイドがないといけない様な気が…ゴメンナサイ！少年！無駄使いた事は謝るからデバイスをしまつて下さい！！」
「？」

今のジンは睨みつけただけで熊を殺せるくらいの視線でデバイスを羽駒の頭に押し付けている

ミコト

「もうジン！いい加減にしなさいよね！
私はこの服気に入ってるし…次から無駄使いさせない様に私が管理するから！」

ジン

「ふん…仕方ない…」

それより羽駒、『例の件』の事だが…」

羽駒

「ああアレか…すまん譲ちゃん、少し席を外してくれないか？
少年と二人だけで話したいからさ…」

ミコト

「あつ、はい解りました」

ミコトは席を外し部屋を出る

羽駒

「…さて、要件は何だっけかな少年？」

ジン

「ジェイル・スカリエッティの情報が知りたい」

羽駒

「あいよ、ちょっと待ってくれよ」

羽駒はノートパソコンを取り出し、キーを打ち出す

暫くして、羽駒は画面をジンに見せた

羽駒

「コレが俺の知る限りのスカリエッティの情報だ…」

ジン

「…やはり少ないな」

パソコンの画面を見たジンは芳しい情報がなかったのか少々愚痴を溢す

羽駒

「文句言うな：

奴の情報は管理局の方でさえ良く知られてないんだ
それよか、お前の『答えを出す者』なら一発で解るんじゃないのか
？」

ジン

「オレの『答えを出す者』でも、奴の情報が少ないんだ：実際に奴
と会った訳ではないからな」

そう。ジンの『答えを出す者』（アンサー・トーカー）とて万全で
はない

ごく稀に答えの出ない問い、解らない事がある

まして人間の場合、実際その人物に会わなければ的確な答えが出な
い場合もある

これは、ジンが能力を使いこなせていない事も一つの理由かもしれ
ないが、こればかりはどうしようもない

羽駒

「まあ、ソレで解ってたら俺は要らないわな
しかし何でまたこんな奴を調べていやかる？」

ジン

「奴はオレの失った過去の記憶の数少ない手がかりだ：だから追っ
ている」

羽駒

「あっそ…そっちも大事かも知れねえが、譲ちゃんの両親の仇の方はどうなんだ？」

ジン

「…仇なんて関係ない

オレが勝手にやってる事だ…それに、そっちはもう調べ挙げてる」

羽駒

「そうか…じゃあもう帰るのか？」

ジン

「ああ…後は自分で調べるつもりだ」

羽駒

「わかった…スカリエッティの情報は此方でも調べてみる。
何かわかったら直ぐに知らせる」

ジン

「無理はするなよ

それに、お前は…」

羽駒

「わーってるって

というより、少年こそ無理はするなよ

お前さんは一人で抱え混み過ぎだ

少しは他の仲間にも…」

ジン

「羽駒…オレは仲間なんて…」

羽駒

「お前が仲間を必要としない理由は解るつもりだ…が、それでも一人で駄目な時は頼ればいいさ…俺や譲ちゃんのように…な」

ジン

「…気が向いたらな」

羽駒

「そうかい…ディランデイ、少年を頼むぜ」

カタストロフ

《その名は止めろ、我はもうお前のデバイスではない》

羽駒

「はは、そうだったな
じゃ、またな」

ジン

「また…か。」

もしかしたら、二度と会う事はないだろうがな」

物騒な言葉を言い残し、ジンは部屋を出た

羽駒

「そういう事は言うもんじゃないぜジン…お前さんには帰りを待つ奴等がいるんだ…俺も…譲ちゃんもな…」

ジンが出ていったドアを見ながら、羽駒はそう呟いていた…

―ティアナside―

私は隊舎に戻って直ぐに一人で個人練習をしている

練習を初めてから大体6時間。途中、ヴァイス陸曹が止めに來たけど丁重に返してもらった

だけど流石に6時間ぶっ通しで練習していれば限界がくる訳で…少し仰向けに倒れて一息入れる

そして、今回起きた事件を振り返る…

あの時…ジンがスバルを助けてくれなかったら、私が誤射した弾がスバルに当たっていた…

私がミスしたせいで…

仲間に迷惑をかけてしまった…

ティアナ

「（もう…あんな思いはしたくない！）」

そうだ！いつまでもくよくよしてられない！

才能のない凡人の私は、他人の倍以上練習して、少しでも強くならなきゃ！

でも…今のまま続けても行き詰まりを感じてくる訳で…

ティアナ

「（こんな時…アイツなら…）」

そこで私は、一人の少年を思い浮かべた…

ジン・クロツグ…型こそ違えど、私と同じ狙撃手^{ガンナー}。

今日聞いた過去の経歴を除けば…悔しいけどアイツは私より腕は確か。

射撃の腕もそうだが…アイツは近接戦闘の心得もある

狙撃手は間合いが命…

近づかれれば勝機はない

にもかかわらず、アイツは顔色変えずに涼しい顔で何でもこなしていた…

ティアナ

「つくづく嫌になるわね…凡人と天才との差っていうのは…」

？

「おい、そんな所に寝てると風邪ひくぞー」

突然声がしてびっくりした私は起き上がって声をした方に振り向いた

そこに居たのは…龍崎伊吹提督だった

ティアナ

「龍崎提督！あのっ…

密命の方は…」

伊吹

「とっくに終わった

んでチョイとフアランを呼び出して内緒話した後、さっき帰ってきたって訳だ

…っていうかお前も提督言うの止めろって！
苦手なんだよその堅苦しい呼び方は！」

相も変わらず提督呼びを嫌う龍崎提督

伊吹

「それで、お前は何してたんだ？此処で昼寝してた…て訳じゃない
だろ？」

私は何も答えない：

龍崎提督は少し厳しい顔で言い出した

伊吹

「今日のアグスタの任務で何があったかはファランから聞いたし、
なのは達からこってり絞られただろうから俺からは何も言わない：
お前が此処で何をしていたかは見ていれば大体解る

だが、疲労した体に鞭打ってまで練習するのは少々いただけないな」

ティアナ

「っ！？けど！私は凡人で、皆より才能がないから：早く皆に追いつきたいんです！！」

その為に私は他の人の倍以上練習するしかないんです！！」

私は龍崎提督に自分が押し殺してきた思いをぶつけた

……こんな事を龍崎提督に言っても意味がないとわかってるのに：

ティアナ

「強い貴方に：私の気持ちなんて：解るはずない！」

伊吹

「強い：ね。俺は別に強くはない：

ファランやリフィア、それにジンが居て初めて俺は強くいられるんだ：

俺一人じゃ…何も守れないし、強くもない
お前にだって仲間はあるだろう？」

ティアナ

「仲間……」

その言葉で先に頭に浮かんだのはスバル…その次にエリオとキヤロ
とフリード、そして隊長達…皆私にとっての大切な仲間…

ティアナ

「けど、私なんかと比べたら…」

伊吹

「ティアナ、例えどんな力や才能のある奴でも完璧な人間なんてい
ない
互いに支えあって生きていくのが人生というゲームだ」

ティアナ

「龍崎提督…」

伊吹

「Nobody's Perfect.

俺の好きな言葉の一つだ」

ティアナ

「Nobody's Perfect. …誰も完全ではない」

伊吹

「ああ、なのは達だって確かに力は強いが完璧ではない…アイツらだって負ける事だってあるし失敗もする…」

けど、その積み重ねがあって今のアイツらがいるんだと俺は思う」

勿論俺やフアラン達もな、っと龍崎提督は付け加える様に言う

伊吹

「だからお前も無理せず誰かに支えてもらえ一人でしょいこんでも疲れるだけだぞ」

龍崎提督はそれだけ言って背を向けて歩きだし、残ったのは私だけになった

―伊吹 side―

ティアナと別れた後、俺は神威達(?)と喋っていた

朱羅

《ティアナ殿は、この後どうするおつもりなのだろうか…》

伊吹

「心配なのは解るが：

どうするかはアイツが決める事だ」

神威

《だろうな：俺らがこれ以上関わるのは野望ってもんだ》

リュシエール

《まあ、あの小娘が壊れようが知った事ではありませんわ》

伊吹

「お前なあゝその言い方はどうかと思うぞ！」

俺がリュシエールに忠告すると、煉牙とソフィエルが立て続けに言う

ソフィエル

《リュシエール：酷い》

煉牙

《本人の前でなくて良かったモノを：》

リュシエール

《わ：私^{わたくし}を悪く言うのはやめて下さいまし！！！》

伊吹

「そこまでだお前ら！」

リュシエール、その発言はティアナの前ではやめろよ。

ああいう奴は心が繊細なんだ

ちよっとした拍子で壊れちゃうくらいな」

リュシエール

《ま…マスターがそう言うなら…》

ブロウニング

《やゝい♪リュシエールが怒られたゝ♪》

リュシエール

《こん…のポンコツ！》

伊吹

「……お前らサメの餌決定」

リュ・ブロ

《ゴメンナサイ！！》

全くこいつらは…A Iの性格設定をいじくったのが間違いだったか？
今度メンテの時にマジでA Iの性格設定変えようか…

神威

《けど良いのか？このままじゃあの譲ちゃんは兄貴と同じ過ちをやらかすぞ？》

伊吹

「それはねえだろ：
教官のなのはが付いているんだ：って言いたいが少し心配なんだよ
なあ」

なんせあの砲撃悪魔娘はキレると何しでかすかわからんからな：
かといってティアナに無茶すると言っても兄妹揃って頑固な奴だし：

伊吹

「これじゃあマジでティーダと同じ過ちをやらしかねないな：」

ティーダの奴も、殉職したあの事件の前まで無茶な自主練を続けてた

俺やフアランも無理はするなと言ったが、それでも止める事はなかった：

結果……自主練による疲労した体である事件の現場に赴き：

伊吹

「（クソッ！嫌な事を思い出したぜ！！）」

いつまで経っても目の前で誰かが死ぬっていうのはむなくそわりいぜ：

けどあの糞上司！殉職した奴に対して『役立たず』はねえだろ！！

まあ、あの後俺とファランの二人で糞上司を痛めつけて二度と表の舞台にあがらなくしてやったし証拠も隠滅したから問題ないけど…
つとんな事どうでも良いか…

とにかく、ティアナの事は放って置くわけにはいかねえが…今は他の事だな

伊吹

「ジンとリフィアにあの話をしなきゃならねえしな…」

二人には予めファランに頼んで俺の部屋に居るはずだ…

まだなのは達には顔を出してないが…後でも良いだろ…

それに、ジンの過去の件についても話さなきゃならねえし…

俺は駆け足して自分の部屋に向かった

―舞台裏コーナー―

リフィア

「ヤッホー♪今回はタイショウ達に変わってアタシとジンがこのコーナーを仕切るよ♪」

ジン

「(ー|ー) Z Z Z」

リフィア

「ってコラー!!!何寝てるんじゃないワレ!!!」

ジン

「(ー|ー) Z Z Z」

スバル

「ほらジン!早く起きなよ」

ティアナ

「どきなさいスバル!

クロスファイアで叩き起こす!」

?

「待って下さ〜い!!!」

ティアナ

「誰!!!」

ミコト

「わわ!いきなり銃を突き付けしないでください!危ないじゃないですか!?!」

ティアナ

「ごっ…ゴメンなさい
ところで貴女は？」

ミコト

「ミコト・クロツグ：

ジンの姉（自称）です

それよりいくらジンが常識がなくてひねくれ者で性格の悪い奴でも
銃で殺そうとするなんて酷いです！あんまりです！ジンの姉（自称）
として見過ごせません！？」

ジン

「…誰が常識がなく性格の悪いひねくれ者だって？」

リフィア

「あっ、ジン起きたんだ」

ジン

「あれだけ煩くされればな…それとミコト…誰がオレの姉だって？
オレはそんな事は認めてないぞ」

ミコト

「うっ…それは…」

ジン

「それにオレとお前の歳は同じ16で、更に言っしまえばティア
ナ・ランスターと同じ年なんだぞ…
赤の他人のお前らと同じ年でお前が姉って言うのが可笑しいだろ」

リファイア

「セラフィムが遂に撲殺天使に…」

ピロピロリン♪

セラフィムは称号

『撲殺天使』を手に入れた！

ティアナ

「何なのよ上記の奴！」

スバル

「セラフィムへの称号プレゼントだよ♪

ついでにド○ロちゃんのコスチューム付き」

ジン

「タ○ミネ○ターの身体にそのコスチュームはどうかと思うぞ？」

ミコト

「そんな事ありませんよ！きっと似合うと思いますよ！…多分…」

ティアナ

「多分じゃ不確定よミコト…」

スバル

「じゃあとりあえず転送♪」

ビュン！

ティアナ

「そういえばアンタらはあっちの後書きコーナーに行くのよね？」

ジン

「余り乗り気じゃないがな…」

ミコト

「コラ！お世話になる人達にそんな言い方はダメだよジン！」

ジン

「そんなのオレの勝手だ…次の感想に行くぞ」

村正さんへ

スバル

「あれって…一真と千歳の子ども？」

ジン

「馬鹿が…よく文章をみる…身体だけ幼児体になった一真だ…」

ミコト

「そうですよ…千歳ちゃんに手を出したら一真さんが犯罪者になってしまうじゃありませんか！」

リフィア

「ミコト…千歳はあれでもアタシらより年上なんだけど…」

ミコト

「えっ！？そうなんですか！？あわわわ！！

ゴメンなさいです！？」

ティアナ

「まあ…仕方ないわよね…私とスバルも最初はそう思ってたし…」

ジン

「まあ…最早アレは手遅れでしかないがな…」

ミコト

「ジン！また貴方はそんな事を…」

ジン

「……ふん」

ティアナ

「はあ…次、行くわよ」

沫乃憂谷さんへ

ぴよ~~~~~!!!

ミコト

「ん？何ですか？

今なんか小動物の鳴き声のような…」

ピヨ○ヨ

「ぴよ~~~~~!!」

スバル

「って！何か飛んで来た!!」

ミコト

「ヒヨコです!!」

それも空を飛んで此方に来ています！」

ティアナ

「いや、どう考えても蹴り飛ばされたでしょアレは…」

ジン

「……どけ。」

ジンは何処からか某大乱闘に使われた黄金のバットを持ち構える

……そして

ジン

「………悪く思うな」

―グワアラゴウワガキィイン！！！！？

ピヨ○ヨ

「ピギョオオオオオン！！！！！」

ピヨ○ヨはジンの悪球打法により空の彼方まで吹っ飛ばした…

リフィア

「あのヒヨコモドキ…

運がないというか…哀れというか…」

スバル

「そんな事よりさ、あっちの出演要請はどうすんの？」

ジン

「返事が遅くなったが…元帥の勝負と此方の後書きコーナーの出演の件…確かに引き受けた…遅くなった詫びにライフボトル×15個とエリクシール×15個をそちらに送る…有効に使えよ…」

ミコト

「それじゃあ次いつてみよ〜♪」

TOUDAさんへ

436

リフィア

「現代風に言ったらセラヴィーか最新のラファエルじゃない？なのはの姐さんは…」

ジン

「…最早高町隊長らの扱いが人間でなくなってきたいるな…」

スバル

「なのはさん達は人間だよ！ねっティア！」

ティアナ

「そうね…多分人間よね」

ミコト

「ティアナさん…多分じゃ不確定ですよ」

それよりなのはさんってどんな人なんですか？

噂は幾つか聞いてますけど…」

スバル

「なのはさんは強くて優しい。皆の憧れる魔導士だよ」

ジン

「全員が憧れている訳ではないがな…」

一部の連中からは悪魔やら魔王…場合によっては冥王やら破壊神なんて呼ばれているからな」

ミコト

「ガクガクブルブル…もしそれが本当なら、なのはさんって実は魔界から来たん侵略者じゃ…」

スバル

「違うよ！！ジンもウソっぱちな事を言うのやめてよ！
本気で怒るよ！！」

ジン

「嘘じゃない…現にあの女の砲撃による被害総額はこれだけでているんだ」

ジンが取り出した『高町なのはの砲撃による被害総額』のデータファイルをスバル達が見た反応は……

スバル

「……………ウソ！」

ティアナ

「これだけの額を経費でおとせるものなの!？」

リフィア

「アタシよりヒドイってどうよ!!」

ミコト

「アワワワワ……いし」

ジン

「これで解ったろ……」

あの女一人で管理局がいつ破綻するか……」

スバル

「うう……知りたくなかったそんな事実……」

ティアナ

「気をつけなさいスバル…いつか高町隊長の始末書が私達に回ってくるかわからないからね!」

スバル

「それはない…はずだよ…多分…きっと…」

リフィア

「スバル…言葉に自信がなくなってきたよ…どうすんのさ?」

ジン

「ほっというて次の感想に行くぞ」

U・T さんへ

リフィア

「クラウドとナナキってあんな性格だったっけ?」

ジン

「セフィロス限定の性格だろ?」

スバル

「あのセフィロスって人…何か怖い…」

ティアナ

「そうね…理屈じゃなくて直感的にヤバイ…まるで人一人殺しても何も動じないような眼をしている…」

ジン

「だろうな…お前らでは全く相手にならないだろう…奴と対等に闘えるというなら、それこそ化け物「モンスター」並みの力がなければ生き残る事さえ難しい…」

オレでさえ、相討ち覚悟で行く気でいかないといけないからな…」

ミコト

「ジン…セフィロスって…どんな人なの？」

ジン

「ランスターの言った言葉通り、人一人殺しても何も動じない冷徹の化け物「モンスター」…そして…」

ミコト

「そ…そして…」

ジン

「クラウドのストーカーだ」

ミコト

「ストーカーって、男を追っかけてるんですか!?!」

ミコトとジン以外は思いっきりズルツとズッコケた！

ジン

「ああ：しかも上半身裸で追っかけてはハアハア言ってる変態ストーカーだ」

ミコト

「ストーカーの上に変態さんなんですか！？
それが本当ならクラウドさんがいろんな意味で危ないじゃないですか！！？」

はっ早く早急に手を打たないと：クラウドさんがBL路線にいい！！！！？？」

ミコト、慌てて何処かに行く：

リフィア

「アンタさ：あんなウソ丸出しの事言っでどうすんのさ！
ミコトの奴マジで信じてるよアレ：し」

ジン

「知るか：カンペにあつた奴をただ読んだだけだ：本当か嘘かは知らないし知りたくもない：」

ティアナ

「そうね…本当にどうでもいいわねそんな事…」

スバル

「うん…本当にどうでもいいや…」

リフィア

「アンタら何気に酷いね…まあ、アタシもどうでもいいけど…」

ドドドドドドッ！！！！

ミコト

「ハア…ハア…只今戻りました…」

ジン

「……何してたんだ？」

ミコト

「クラウドさんに釘バット×2と召喚マテリアを5つ送りました！」

リフィア

「釘バットはともかく…召喚マテリアなんてウチの所にあっただけ？」

ティアナ

「しかもどんな奴を送ったのよ！」

ミコト

「えっと…バハムートとバハムート改とバハムート零式とバハムート真（ACで使われた奴）とバハムート烈を送りました！」

リフィア

「まさかのババムートシリーズ?!?」

スバル

「ねえ？それ何処に置いてあったの？」

ミコト

「……………さあ？」

ティアナ

「さあ？ってアンタねえ!!」

ジン

「もう良いだろ…このコーナーは殆どご都合主義だからな…一々突っ込んでたら埒があかない…」

ティアナ

「……………そうね、確かに一々突っ込んでたら埒があかないわね…」

ジン

「さて、ようやく感想を全て返した…オレは帰る」

スバル

「ジン！ちょっと待ってよ！まだ全部終わってないよ！？」

ティアナ

「それに、アンタには一つ質問があるんだから、それも答えていきなさい！」

ジン

「…チッ！一体なんだ？」

リフィア

「今回アンタが使った特殊弾について、簡単に説明しなよ」

ジン

「……特殊弾は、オレがカタストロフ専用につったカートリッジの弾薬だ…火炎弾「ファイアバレット」を初めとする属性付加させた属性弾「エレメントバレット」…破壊力を特化させた爆裂弾「バーストバレット」…封印能力を付けた封印弾「シーリングバレット」など…色々ある」

ミコト

「専用って事は、他のデバイスでは使えないの？」

ジン

「当たり前だ：他のデバイスでコレを使えば大破するぞ：しかも修復不可能な程にな：

それに、才能のない奴がコレを使えば、二度と腕が使い物にならなくなるぞ」

ティアナ

「アンタはそんな危険な物を使ってるの！」

ジン

「自分で作った物を使えない訳ないだろ

以上で特殊弾の説明は終了だ」

リフィア

「次にゼクスのおっちゃんとか戦いたい奴の募集結果だよ！」

ジン

「締め切り日はとくに過ぎているというのにあの駄目作者は…」

スバル

「まあまあ…で、誰が出るの？」

ミコト

「えっと…：一番目に『魔法少女リリカルなのはRainbow Flower』虹ノ花、此処に…」から御剣翡翠さん

二番目に『魔法少女リリカルなのは七つの大罪』から特別出演の楠木千歳ちゃん

最後に『魔法少女リリカルなのは片翼の天使シリーズ』から変態

ストーカーさんことセフィロスです」

リフィア

「セフィロスは変態ストーカーとして認識しちゃったんだねミコトは…」

スバル

「でも、参加者少ないね？」

ティアナ

「逆に多すぎても困るわよ…
この数が丁度良いわ」

リフィア

「それより、千歳は女だろ？あの人女性には戦わないって言ってたけど…」

ジン

「知るか…あんな極道娘に負ける元帥なら所詮ただがしれてる…」

——次回予告——

リフィア

「次回はお馴染みなのは姐さんが魔王化！」

スバル

「ガクガクブルブル…」

ミコト

「そして、それを見ていた伊吹さんとファランさんが…」

ティアナ

「ガクガクブルブル…」

ジン

「まあ、コイツらの場合は自業自得だ…」

スバティア

「「ちょっと!!」」

ジン

「事実だ…オレは羽駒からの情報で一人である研究所に向かっていった」

ミコト

「次回、魔法少女リリカルなのはStrikerS（聖王の騎士）第九話…交わらない思い…」

ジン

「オレは……戦う事しか…生き方を知らない」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4238i/>

魔法少女リリカルなのはStrikerS～聖王の騎士～

2010年10月12日17時52分発行